

明治三十八年十一月三十日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾貳號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十二號目次

論說

悟道を論ず……………小笠原秋水
 大なる信仰を得よ……………露波

雜錄

歴史的諺(續)……………浦井恒堂
 大絃小絃……………岩田紫雲
 方丈記につきて……………周南子

文苑

鐘樓守……………水坊
 荒上人……………影主衣
 ちぎれ雲……………嵐月
 七月……………村山
 讀尊德二宮先生傳……………村上函
 籬下窓前……………水歌
 詩人の夢……………潮歌
 小曲三……………斗歌
 夏の蟲……………枯水
 小女吟……………秋生
 愁々二曲……………ゆ桑
 手招き……………水

舟行……………紅芙蓉
 落葉……………水月潮
 經機……………紫歌
 蟋蟀……………紫歌
 秋の歌……………紫歌
 笛……………紫歌

俳句

紫草紙……………紫雲
 雜吟……………美島
 四高俳句會吟草……………美島

雜報

○卒業證書授與式○第十八回卒業生氏名○送卒業生諸君○迎新來諸君○天長節祝賀會記○漫語
 ○獨語集○在寮の諸君に呈する書○六百の諸兄に呈する書○野人語○北辰會役員氏名○同代議員氏名○同委員氏名○校報○十八公氏に答ふ○嗚呼我友

附錄

○本校陸上運動會記事……………斗牛みづ
 ○流れ藻……………斗牛みづ
 ○北辰會費決定計算書○寄贈雜誌……………斗牛みづ

北辰會雜誌第四十二號

論說

悟道を論ず

小笠原秋水

仰いて星辰の囁を聞き、伏して流水の響に凝思すれば、彼に崇高の詩歌あり。此處に幽邃の韻語あり。稷々として松風の冴ゆるかぎり光々として明月の照らすきはみ、山裂け海鳴り雲行き波歸るはてよりはてに満ちて、常に自然の琴線は震ひ天地の靈韻は盡きざるに似たり。かくて誰か宇内の廣大に驚き幽妙を讀せざる。

春は徐に江南の一枝を音通れて暖かに、秋はさゝやかに葉末の白露をこぼして涼く、昔見し夢や如何にと忍ばせし夏草の靡氣は、霜にあせ霰に萎わてあはれ多き枯野の月は寒し、かくて誰か整然たる自然の循行と清新の詩味とを賞せざる。

恐るべきは廣大なる自然をたゞに耳目によりて感じ皮膚を以て觸れ、實感を以て宇宙の凡てと

なし、思考と推論とを以て夢幻視し、詩と信仰とを強いて妄誕となし、更に物有つて後に靈あり物散せんとすに靈は死滅すとなして得意なるを、記せよ、生れながらにして盲なる者は千紫萬紅の燦然たるを解するに由なく、却つて色彩の存在を否定し、生れながらにして聾なるものは、昭虞武象は云はずもあれ、音聲その者の實感だになければ其存在をさへ否定し而も固く執つて動かざる者なるを、然り蝸牛の如くたゞ數理と實驗との觸角をのばして、得たりと樹蔭をさまよひ塵塚を匍匐し、觸るゝに委かせて甲を是し乙を非す、赫耀として大虛を渡る大慈惠の靈光を感ずるにすべ無く、幽玄なる自然が胸底にひゞく無弦の清音を聞くに由なし、故に整々として一絲亂れざる宇宙の統一は畢竟彼等には偶然の事件として顯はれ、雲行き水流るゝ自然の一大理法は全く無意義に理學の法則を反覆する者として彼等が眼底に映せんのみ、

然れども宇宙は實に廣大なり幽遠なり、實に整然として秩序あり、神の片影はこの間に忍ばれて眞如の朗月はこの隙より光を抜く、神と云ひ眞如と云ふ、均しく共に宇宙の本体に名け宇宙の妙用を主宰する者を呼ぶ、これ有つて宇宙は始めて今ある如き不可思議の宇宙たり得るなり、

二、

嗚呼たはいなる無窮の靈、

天を張り、海をのべ、雲を巻き、風を吐き、

月日を驅り、山嶽を震ひ、

千萬の星を造り千萬の世を治むるもの、

風にありて吟し、我にありて歌ひ、

花にありて笑み、星にありて照る、

たゞに詩人が空想にのみ屬するにあらず、蒼空のあなた遙かに輝く星のかす／＼をすぎ行きてそのあなたやいかに、我が見る北斗より更に第二第三乃至無數の北斗は無限の空間に羅列せられずや、半夜蒼天に思を走らせば、惚として嘆し茫として迷ひ、迷ひは混濁となり闇黒となり、覺然として醒め翻然として我にかへる時、荒茫としてはてしなき無限の圓滿と完全とに驚かざるを得ず、廣大なる無限はたゞに空間のみにあらず、遠く大虛の昔を忍べば漠として把束する能はず、人類の始めは極めて若く地球の夫れも亦近き過去なり、太陽然り彗星然り、銀河亦然り星雲もこれを免れず、然れども時其者は何時の時にかその端を開きその緒を起し、限りなき一大虚空と離すべからざる經緯の縁を結ひしそや、觀し去り觀し來れば宇宙は無限を骨として立ち肉として飾り、無限を外にして宇宙なく宇宙を外にして無限なし、かくして無限は宇宙の至靈なり至力なり、怒て疾風と吹き微笑みて花を開く、一粒より大樹を繁茂せしめ一核より長松を起し、紫に葡萄の房を染め金色に小山田の秋を波たゞす而もその大を感じ靈を覺とらざる者は愚と云はんより寧ろ可憐の命運なりとや云はまし、

然り宇宙は廣大なり無窮なり、然れども吾人が雙眸に映る沙漠の如く荒海の如く無味なるに非らず、一滴の水是れを顯微鏡下に照らさば微妙なる美觀は爛々として盡きず、是れを日光にさらさば鮮妍として淡紅となり濃緑となり、忽ちにして紫玉となり黄金となる、若し一塊の砂礫に對

して細やかに觀察せんか、過去幾億歳の歴史は尙ほこの小体の上に層々として影を止め、無窮の大虚をてらす日光は尙この小塊の間に焯灼として光を惜まず、曾て幾多の花はその間に咲き幾多の胡蝶はその間に舞へり、一度見て以て無味とするものすでに然り、況して玉盤蒼穹にかゝりて朗らかに彩霞紅雪をつゝみて暖き間に於ける自然の幽微は多く云ふを要せし、

更に轉つて宇宙が他の方面を觀察せんか、日は常に東に昇りて紅に、月は常に斗牛の間をさまよいて白し、星は闇に照り、露は夕にしげく、流水に花を浮べて春行けば綠蔭に涼風をかほらし、て夏は來り、虫秋を泣いてつくせば、白皚々の冬は野を山を裹みぬ、變々化々して而も一貫せる宇宙の意志は尙この間にほの見えずや、

蜂は忙はしく飛び蝶は静かに眠りて驚かず、等しく露に生きて蝨に聲なく蟋蟀に光なし、白鷗は水に浮き黄鳥は梢をはなれず、群鴉さびしく枯枝に秋を鳴けども吐鵲獨り夜を月に叫ぶ、足あるものは走り鱗ある者は遊ぎ、意志ある者は動き心なきものは歌はず、千状萬態、亂れて雪と舞ひ、散つて花と躍る、而も自然の形態は依然として万有を統治す、見よ、あらゆる生物は一小細胞の發展にすぎず、あらゆる天地の運行は一精力の應用に過ぎざるを、

The essential unity of the Divine mind cause necessary unity in the processes by which things exist and grow, no less than unity in the type of their manifold generale and species;

こゝに於て進化論は無味冷膽なる科學にあらず、詩趣津津たる無韻の詩なり、靈氣飄飄たる福音なり、單に舊物質變て新物質たるのみなれば進化にあらずして變化なり、廣く空間を盡し永く

時間を絶したる宇宙の本体がこゝに本現して虫となり鳥となり獸となりて更に人となる、かくて進化論は完全なる有神の論證たらざるべからず、嘆ずらくは其皮相に走つて、以てその本根を放棄する學者の多きを、

すべからく念頭の妄雲をはらして心眼朗らかに一大無限を達看せざるべからず、神はたゞこれを感じるものゝ上にのみ在りとの警語は、神を感じる者が初めて神を想像し畫して作り出せるにあらず、感し得る心眼を有する者が初めてこれを發見するのみ、我が感すると否とは神の存在に累を及ぼす者にあらずして、條然として過去を極め未來を盡して神は存在するものたるを忘るべからず、自ら心眼なくして其存在を否定するは、再び生育が色彩を否定するの可憐なるのみ、すでに生れて吾人あり、故なくして生るゝ能はず、故なくして生くる能はず、故とは何ぞや、所謂無限所謂神なる者のみ、曾て詩聖懷疑の淵にあえひて思ひ逶遲たる時、忽ち神韻空にひいて聲あり、「我が存在を疑ひ得るは既に我が存在の爲めならずや」と、

三、

説き去りて吾人はたゞ宇宙の大と美と及びその意志をたゞえぬ、而してこの大と美と意志と、小さく翳き自己との交渉は果して如何、

古來滄々たる自然のとはに若くして人生の老ひやすく亡びやすきを恨み、天地の浩蕩として限りなきに驚き人生の芥子よりも小に蜉蝣よりもはかなきをかこちて幾その熱涙はそゝがれ幾條の紅血は川をなして漲りしや、遠く希臘にチューノーレを斃して以來、近く同胞の青年を空しく

巖頭に悶えしむる迄、觀し去り觀し來れば實に人生の如く不幸と悲慘とに満つる者はあらず、見よ、花薰つて蝶は舞ひ紅葉榮えて兒鹿は躍るものを、もろしと春になき淋しと秋と悶ゆ、日出て新柳の糸をくぐり月出て親鳥の胸に夢結ぶ兒燕はありながら、徒らに天地の迷路に入つて晝を苦み、黒き魔障の影に襲はれて夜を驚く、理想は空しく消ゆとはたゞにシルレルのみの聲にあらず、長く樂園を失ふとはたゞにミルトンのみの叫ひならんかは、

人の生命の樹下蔭

花深く咲き花散りて

枝もたわくゝ智慧の實を

味ひそめし昨日今日

知らずば何か旅の身に

人の情も薄からん

知らずは何か移る世に

假の契もあだならん

斯くて人は永劫苦悶の淵にあえぎ、闇より闇に追はれて、胸に湧く熱き紅血は永くセタンか呪咀の爲めに犠牲と捧げざるべからざるか、しばらく吾人をして語らしめよ、

夫風に飛ぶ濱の眞砂は積んで富嶽をなし、おごろをくぐる滴は流れて琵琶の湖をなす、眞砂と滴と元より小なり、小と雖是れを外にして大なく、大と雖も小を待つて始めて大なれば、富嶽の

高琵琶の大、遂に眞砂と滴との中に認めざるべからず、必ずしも吾人を待つて宇宙は初めて大なりとは云はずも、すでに吾人が宇宙の一部なる上は、その大なる本体を体として吾人は存し、その大なる作用を用とし吾人は生く、大海のあらゆる水滴を集めて初めて辛きにあらず、一滴の中にこれとこれと同量の鹹味あるにあらずや、これ實に吾人か唯一の希望にして人類の生命否萬物の意義はこれに縛かれざるを得ず、

無限と云ひ絶對と云ふ、等しく吾人の思慮を超越したる者にして、而も其は其自身と同性を吾人に附與し、失望より吾人を救ひ落膽より吾人を勵まし、躍如として永遠の進程に勇奮せしむ、其の無限と同性なる者とは、美の享樂と、深幽なる思索と、崇高なる敬虔となり、逐次項を追うて述へん、

グーテ曰く藝術は萬有の根底たる不可思議的神秘の瞬間的啓示なりと、而して不可思議的神秘は普通にして天地何處として存在せざる處なし、

うなる兒か鮒釣る里の溝川に

櫻流るゝ春の夕暮！

見ればこゝにも美はしさあり

山鳥は羽擲ちて逃けて谷川の

水にうなつく白百合の花！

見ればそこにも美はしさあり

塵の世は塵にまかせてかゝわらす

大空高くすめる月かけ

かしこに高き美はしさあり

海苔魚朶を隠しつ見せつ海の中

風に亂るゝ秋の朝霧!

こゝにも幽けき美はしさあり

たゞこれを知りこれを感じる一の靈性を待たざるべからず、幸にも無限はこの靈性を吾人に附與せり、靈性即ち美の享樂を通して龐氣に宇宙の本体に接して恍惚たる間に、自己は宇宙と合し宇宙又自己に合す、たゞに天然界に於けるのみならず、人事に於ける悲哀慘憺たる美を叙してハマルトンは

超絶的見地よりして悲壯ばかり悠遠なる希望と慰藉とを與ふるはあらず、悲壯の中に顯はれたる世界は人類精靈の眞正の故郷なり、其處には現世の風波の及ばざる安靜なる港灣の吾人を待てるあり、一度この境地に來り顧みて現を回想すれば、人生なるものは所詮他の圓滿なる理想界に到達するに先ちて通過すべき淨穢界にすぎざる事を悟るなるべし、

最後に吾人は敬愛措かざる芭蕉か洞察に聞かんか

それ天地は風雅なり、萬象も亦風雅なり、この風雅は佛祖の肝膽なり、造化に隨つて友とす、見る處花にあらずと云ふ事なく、思ふ所月にあらずと云ふ事なし、心、月にあざれば禽獸に等

しく、かたち花にあざれば夷狄に類す、夷狄を出で禽獸をはなれて造化に歸れよ

古池や蛙飛び込む水の音

美はしき情緒を通じて宇宙と一大冥合をとげ、個性の小天地を脱し小我の繫縛を斷すれば、我は昔の我に非らず、花と咲きて我は薫り月と澄みて我は清し、宇宙泣かば我泣き天地はく笑みて我亦はく笑む、行くとして障ゆるなく止まるとして追ふものなし、人生の毀譽にあらず、塵間の風雅にもあらず、宇宙の大、自己の小、泣くは畢竟天地の舞臺に登つて泣きもし笑もする優人か眞面目なるに似て一場の悲劇なるのみ、大悟徹底の空に雲なく、清風朗月の間に高吟する上より見れば、たかしくも亦憐れに映するに過ぎざるべし。

次に幽邃なる思索はこゝに積んで哲學をなす、ターレスを以てその端を發して己來、プラトンの觀念論となり、アリストテレスとなりストアの一派となり、中世の宗教的哲學となり、引て近世に入つてデカルトに懷疑的研究の緒を開きて、燦爛たる近世哲學は蘭菊香と争ひ桃李妍を競ひ、カントの純粹理性批判となり、ヘイゲルの精靈哲學となる、而してその歸する處は何んぞや、唯一絶對の本体を見とめてこれに融合するの努力精神を説くに外ならず、我思故我有を基礎として強いて神の存在を説かんとせしテガルトは更なり理性批判を以てしてカントは、神の觀念にてその存在を説かんとする者を論破すれども尙神の存在を證し能はざると同じく、神の非存在をも證する能はずとし、ヘーゲルは遂に絶對的無限を認めて、其の感性的直覺に對して表彰せられたる者を美術となし、寫象によりて表彰せられたるを宗教となし、宗教か一切の形式を脱したる哲

學と料し次てスペンサーも遂に不可知的世界を是認するに至れり、而してヘーゲルはその絶対無限を以て數學的の無限と解せずして、完全無欠の圓滿なる存在なるを許せり、こゝに於て吾人は智識の要求する眞の本体か、情緒を通して直覺する美の本体と殆んど同一なるに驚嘆せざるを得ず。

Willst du ins Unendliche schreiten ?

Geb nur im Endlichen nach allen Seiten. (Goethe)

かゝる無限にして今少しく暖かに云はゞ、テニソンの歌へる如く

Speak to Him thou, for He hears, and spirit with spirit may meet

Closer is He than breathing and near than hand and feet,

と見るべきにあらずや、たゞ彼も是もふみ分くる麓の道にして、何れ同じく高根の月を見るを得んのみ

最後に崇高なる敬虔の念により宇宙の靈光を輝し、區々たる人生の喜憂を脱却し、紛々たる世相の羈束を超越する者は宗教なり、最初の情を通して宇宙の大美と接する詩歌藝術の如く宗教心の一部は崇高なる情緒なり、智を通して宇宙の本体を一大合理と感ずる哲學の如く宗教の一面は智識なり、然れども前兩者が宇宙の本体を抽象的に大美大理とするに反して、此は其を靈化して大なる意志とし大なる慈愛と感して、世は至るところこの大意志によりて動きこの大慈悲によりて榮ゆとなし、尊崇の念を以てこれに歸服し、親愛の念を以てこれを樂む、かくて水村山郭は大悲

の光明に満ち、柳闇花明の里たる柔輦の樂ひゞきてゆかし、然れども敬虔の念は尙入悟の一面にし宗教は更に他の偉大なる部分を有す、曰く意志なり、意志はやかて鞏固なる信念をなし信念はこゝに人生が依て以て立ち得る至大の盤石たるものなり、意志を外にして宗教なく宗教をはなれて偉大なる意志を体现するの由なし、十字架上に登つて尙は彼か所信を變ぜざるは彼が大なる宗教的意志の發現にあらずや、鎌倉に激して蕭々たる殺氣龍の口に襲ふも尙は白刃を碎くの概あるは日蓮が宗教的意志にあらずや、大なる意志を外にして大なる解脱を望む可らず、聞け大なる意志のひゞきを

各々十餘個國のさかひを越えて身命をかへり見ず尋ね來たらしめ玉ふ御こゝろまじひとへに往生極樂の道を問ひきかんがためなり、親鸞に於きてはた、念佛して彌陀にたすけられまいらずべしとよき人のたほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄に參る業にてやはんべるらん總して以て存知せず、たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候、その故は自餘の行をばげみて佛になるべかりける身か念佛して地獄に落ち候はゞこそすかさされ奉りてと云ふ後悔も候はめいつれの行もたよび難き身なれはとて地獄は一定すみ家をかし、詮する處愚身か信心にたきてはかくの如し、この上は念佛を信し玉ふともまたすてんとも面々の御はからひなり

大なる意力は言々に溢れ句々に漲り洶湧として躍り出づる靈氣に觸れずや

以上述べ去り述べ來れる三個の徑路は畢竟同一事を意味し、何れも蘆山の一面たるにすぎず詩人にして初め宇宙の義を解し得べく、哲人にして初めて宇宙の眞をたどり得べく、聖者にしてよく宇宙の意志を味ひ得べし美の極致は眞の極致にして又意志の極致ならざるべからず、吾人か敬服する西行の歌を以てこの項は結ばん

鷲の山たれかは月を見さるべき心にかゝる雲しなれば、

四、

慕直に天地同根万物一体を觀するはたゞに傳心の訣のみにあらず、いやしくも人生の夢死醉生を脱して大なる意義を得んとせば、ひたすらこれによらざるべからず、前項細やかに説ける美と眞と善とに對す吾人の天稟は、實に天地同根の原理に外ならず

すべからく人生の假面を脱して眞摯に宇宙を感じ、すべからく吾人が虚飾を去つて無爲に天地の妙用を察せざるべからず、天地は無爲なり自然なり、無爲自然に到達せんには先づ我が心頭に於ける迷妄の邪念を拂はざるべからず、深潭に水すみて初めて燦然たる星辰は影をうつし、花心清冷にして穢れざる時初めて露のしづくはやどる。假面は永久に人を殺し、虚飾は永却の苦悶を惠む

眞摯に悲慘に深刻に、力の有らん限り心の動かん限り、頭腦と雙手と兩脚とを以て思ひ惑ひ躍り更にはえかしめよ、沈滞は墮落なり、墮落は腐敗なり、清水を濁らすも、これ名刀をさびしむるも亦これ

對象を廣く天地に求めて、一莖の花にその美をたへ、一閃の電光にその壯を讚するも可、悟道の關門は自覺にあり直摯にあり、活眼の洞察する處そこに無限の教訓をかゝればなり

對象を自己の心中に求めて、一心に三諦を觀し、一念に三千の法を觀するも亦可
時正に晩秋に入つて空に雲なく地に靄なく、神澄の氣蕭殺の風、渡つて極より極に走る、妄想にあらず幻影にあらず、觸れて聲あり取つて把持し得べき恒久の至靈を追はずや

大なる信仰を得よ

露 波

本居宣長が歌ひけん如く吾人は日露開戦に於て我國民精神の眞髓たる所謂大和魂の燦たる光輝を現實に見たり、外に於ては敵國外患に對して水火をも辭せざるの勇氣即ち旅順攻圍に於ける如き遼陽奉天の激戦に於ける如き其の忍耐其克己其の奮闘實に壯烈なる眞に鬼神をも泣かしむるに足るを認め、内に於ては一婦女子に至るまで義勇奉公の精神を帶し國事に盡瘁せし如き其の熱心と仁愛とに於て實に多くの「ジャンダルク」あるを知りぬ、然れども短兵急に激し安きだけ其れだけ深き／＼沈思と遠慮とに於て欠かざるやの憂なき能はざるなり、乃ち今や我帝國が偉大なる天の使命を奉じて世界人道の爲めに祝す可き平和を締結したるの時に際して千秋忘る能はざる幾多の屈辱的事實を以て帝國史上を汚したりとて國民一般の慷慨と悲憤は當る可からざるもの有りしと

雖ども更に峻嚴なる天來の聲あるを知られる者多からざるやを吾人は大に恐るゝなり、天來の聲とは何ぞや、曰く、大なる信仰を得よ、是れなり、

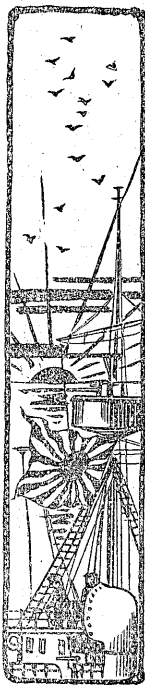
夫れ昨歲一度日本海に於て炮火相交るや永遠の平和と道義とのために吾人が負へる使命をば飽くまでも果さざる可らずとは我國人の擧つて唱道せし所なれば平和克服の時に際して土地の占有如何と償金獲得の如何とは更に吾人の遺憾とする所にあらず何となれば戦によりて得たる物は又戦に依て奮ひ得可く劍を以て防ぎ得べき者は又劍を以て破り得べければなり、然れども我國人に確固たる信仰を欠くてふ事實を時局の終結に際して窺ひしは吾人の大に悲む以所にして又之を天來の警聲として覺醒一番せざる可からざる所なり、信仰を云々するは啻に病的精神を有する悲觀者流の閑事業と成す忽れ苟しくも三千年來脈々として大和民族の心血を一貫したる大精神を持して廿世紀文明の源泉たらんとする我國青年者にして此をしも過視す可くんば將た何事をか重要視す可きとせんや

見よ媾和談判當時に於ける我國人の如何に斷乎たる態度を欠きしかを、又如何に兒戯に類する事を演せしかを、吾人は徒らに死せし子供の年齢を數ふるの愚を學ぶものにあらずと云へども一國精神の存する所を以て將來を卜し大に悚然たらざるを得ざると共に耳底深く此の天來の語を聞き得たるは實に茲に存するなり、蓋し斷々乎たる態度を取り能はざるは獨立自尊の欠乏に因す、獨立自尊なき所には力なく生命なし、生命なき人と死せる國家と咄何事をか成し得べきとするぞや、此に於て吾人は獨立自尊を天下に向て大呼せんと欲するなり、されど獨立自尊とは肱を揚げ

肩を怒らし弱者の肉を以て己が腹を充たさんとする傲慢暴戾なる侵略主義を意味すとす勿れ、他人の人格を手段として取扱ふ者は則ち自己の人格を蔑視する以所なり、眞の獨立自尊とは實に如斯きものにあらず、内に深く自ら頼む所信する所ありて其の確固不動の自信に基き超然として一切の上に立ち吾人本來の理性の要求に従て活動するの意なり、乃ち如斯き自信と覺悟と有りて始めて利害に超越し得失に迷はず驚かず恐れず徐ろに万障を排して確かに其理想を實現するを得、他人の一擧一笑何かあらん列國の同情亦何ぞ顧慮するを要せんや、其の始めて聲を擧ぐるや天上天下唯我獨尊と叫び國と王位とを棄つる恰かも破れたる草鞋を脱するが如く悠々自適然かも其理想と志願とを方足して無碍自在、光明となり慈悲となりて弱者と悶える者とに力と安慰とを死後三千年の今日に於ても猶與へつゝある釋尊も實に如斯人なりき、十字架の上に肉を殺し然かも永却消へざるの愛となりて治ける基督は如斯き人なりき、甘んじて毒を仰ぎしソクラテスも、九十五ヶ條をウイテンベルヒのシュロツキルへの正門に掲げて堂々として法王と争ひしルーテルも獨立自尊の人でありしなり、而して如斯き自信の出づるは實に敬虔なる信仰に有るなり然らば信仰とは何ぞ如何にして得らるべきものなるか、曰く信仰とは能信と所信との融合によりて成立する靈の力なり、能信とは神に倚らんとする吾人の心換言すれば吾人本來の理性の要求にして所信とは吾人の信する對象即ち佛教の所謂如來基督敎の所謂神なり而して其對象の神たる如來たるに論なく一切の文字と言語とを絶して只思惟によりてのみ感じ得可き無限の愛なり慈悲なり乃ち吾人心中の本來の要求も此の無限の力との合一に於て信仰成立す、故に神靈永へに自

らの上に有るを信す、神靈その上に宿れる以上は假令ひ形に於ては敗北の民たるも靈に於ては天空海濶優に世界公道の主たるを信じ何物か能く此信仰を侵し得べき、其處に力あり活動あり、噫宗教上の悟りなるものを平氣に死するを得る事に存すとす勿れ如何なる困難に於ても苦境に於ても平氣に活くるを得る是れ即ち悟道の好果なり 而して此信仰や自己を疑ひ、人世問題に迷ひ、大なる煩悶の子となり、大なる厭世の子となりて凡ての習慣や形式やを排し、遂に自己夫れ自身をも棄却し去りて始めて靈の上に偉大なる力と光明とを感ず可きなり、信仰の人となり得べきなり

嗚乎現代我國の青年は文明てふ語に心酔して余りに浮薄に余りに輕擧なるなきやを吾人も憂ふるなり、故に吾人は所謂天來の聲「大なる信仰を得よ」を傾聽して何處までも高上の途を辿らざる可からず、過去に顯れたる一切の哲學と宗教とを奉せざるも可なり否な寧ろ世に諂ひて政府の力と金力とを以て自らの位置を保たんとする如き宗教を打破し健闘と煩悶との後に自己の上に大なる力を感じて即ち大信仰を得て本來の希求と理想とを實現せざる可からざる也



雜 錄

歴 史 的 諺 (續)

浦 井 恒 堂

Thalathai Thalathai 希臘語にて海といふ語にて歡極まりたる時の感動詞なり希臘著名の歴史家クセノフハネスの著一萬軍の退却(アナバシス)に見えたる語なり偕一萬軍の退却といへる有名な事蹟の顛末を尋ぬるにペルシア王ダリオス、ノートスに二子あり長をアルタクサルキセスと云ひ次をキロスと云へりペルシヤ建國の祖キロスと區別せんがため時として小キロスといふアルタクサルキセスは皇太子なりけれども其母パリサチスは少子キロスを愛せり故にダリオス崩してアルタクサルキセス位に即くやパリサチスは密にキロスに懇懇して其兄の位を篡はしめんとせりキロス之に従ひ抗議して曰くアルタクサルキセスは吾兄なりと雖も其生れし時は父王ダリオスが未だ即位せざりし時にして予は父王が即位以後に出生したれば繼承權は予にありと甚だ不都合なる論法なれどもペルシヤ國に於ては顯著なる先蹤あり即ち八十餘年前ダリオス一世の殞落せるに際し其末子クサルクセス是と同一の場合に於て即位せり先是キロスは小亞細亞の總督(サトラップ)となりて常に希臘人に接し彼等の智勇共に大にペルシア人に優ることを知れ

り故にキロスの叛せんとするや先づ希臘人の力を籍らんと欲し切に希臘人を厚遇して其款を買はんとせり時にスバルタの亡命クレアルコスといふ者ありキロスの信任を得て帷幕の謀臣たり彼はキロスの命に因りビチニア州なる山賊を討つを名とし希臘の傭兵を募りしに小亞細亞なる殖民地は元より希臘本堂の冒險者之に應ずる者多く八千二百に達せりキロス大に喜び四〇一年十萬の亞細亞兵と希臘傭兵とを以て叛旗を翻へしサルデスを發す此時も猶遠征の目的を打ち明かさざりしを以て二三の腹心を除くの外絶えて之を知る者なかりき全軍次第に内地に進みければ希臘兵は始めて欺かれたることを發見し激昂甚たしかりしかども所謂乗りかゝりたる舟にて今に於て罷め還らんことは不可能なりしに因り更に其給料を増加し且つ成功の後重賞を受くべき約束を得て満足し前進を繼續せりキリキアに至りし時希臘艦隊の兵士來り加はり一万三千の數に達せり

キロスと希臘兵とは長途の行軍に種々の困難に出遇ひたる後遂にバビロン府附近のクナクサに達しにアルタクサルクセス大軍を以て靜り返りて押寄せたりペルシヤ軍の左翼は容易く希臘兵の突撃のために敗れしかはキロスは大に勇み直に其手兵を率ゐてペルシヤ軍の中央を衝くペルシア王の護衛兵忽ち敗北せしかはキロスは急に之を追躡して直にアルタクサルクセスに逼り鎗を投して兄の胸部を傷け落馬せしめたれども彼も亦敵兵の投鎗に中り戦歿せり之を聞きキロスの全軍潰走取捨する能はざるに至れり

希臘兵はかくとも知らず追撃に従事せしがキロスの軍潰走したるを聞き急に其陣營に歸りしに

糧食等は既に盡く敵の劫奪する所となり尋てキロスの戦歿せしことを知り皆色を失へり

彼等は孤軍敵地の中央に入り進退維れ谷まれりと雖も百難を冒して退却するより外他の手段なきを以て全軍遂に退軍に決しクレアルコスを推して全軍の指揮に當らしむ

アルタクサルクセスは謀を以て希臘軍を殄滅せんと欲し詐りて希臘兵と和を講し無事に本國に歸還することを許し將軍チサフェルネスをして一隊の兵を率ゐて希臘兵の嚮導たらしめ却て之を内地に誘ひ入れたりき

如此して行くこと二十餘日に及びしが其間希臘人をしてペルシア人を疑はしむべき事情續發せしかはクレアルコスを首として希臘の諸將はチサフェルネスの陣營に到り嚴談せんとせしに伏兵起りて諸將を捕へ之を國都に送りて殺しといふ

此報希臘兵の陣營に達するや希臘兵はペルシア人の反覆無信に憤激すると共に其胸中の恐懼いふべからず彼等は懸軍萬里敵地の中央にあり司令官なく嚮導者なく糧食なく其位置の危殆想ふ可しされど勇敢なる希臘人は毫も自暴自棄に陥ることなくソクラテスの門弟にして智勇衆に勝りたるクセノフハネスを選びて總指揮官と爲し全軍心を一にして途を轉し北方に向ひ黒海沿岸に出でんことを決し行軍を澁滞せしめ戦鬪の阻碍となるべき輜重類を焼却し輕装して再び退軍を始めけり

此一行の事はクセノフハネスの著アナバシスに詳なり希臘兵はチサフェルネスの追撃を蒙りつゝ敵地を經過し百難を冒し後アルメニアに達せしか此時に至り波斯兵も最早追撃を斷念して

引き遣りしかは希臘兵は一難を免れ得たれども更に一難來たり今や氣候に苦めらるゝに至り積雪奇寒のため斃死するもの數を知らずそれよりアルメニアの北に進み種々の蠻族の部落を通り抜け聖山の絶頂に達し、時先鋒隊は遙か彼方に於て黒海の水面鏡の如きを發見し海よ海よの歡呼は直に全軍に傳はれり既に此所に達し、上は希臘殖民地に達するも遠からず凡ての危難も過ぎ去りしことなれば將士歡極まり相擁して泣けりと云ふ如何にも萬死に一生を得しなれば左もありけん夫より二日の後黒海沿岸の希臘殖民地トラベズントに到着し水陸并ひ進みて本國に歸れり

Tomes Vedras, Lines of. 難攻不落の陣地をいふナボレオン時代の所謂半島戰役ベニンシュラップ(一)に於て英將ウェリントンの經營せる陣地より出てたりトレスベドラスは葡萄牙エストラマヅラ州の市にてリスボン府の北西約二十四哩に在りトレスベドラス線とは三重の防禦線にして一八〇九年より着手しウェリントンの兵佛將マツセナと戰ひ利を失ふや一八一〇年十月より退きて此線を防禦し佛將の凡ゆる方法を盡して攻撃を試みしにも拘らず固守して一八一一年の八月に至りマツセナは終に力盡きて退けり此陣地の第一線はターグス河畔なるアルハンドラより起りて海岸に至り長二十九哩第二線は第一線の後方六哩乃至十哩に在りて長二十四哩第三線はリスボンの南西にありてターグス河口に達し長甚た短し如此防禦せられた地は五百平方哩に及べりと云ふ

Tou est perdu fors l' honneur (All is lost save honor; Alles ist verloren, nur die Ehre nicht) 近世史

の初期西班牙佛蘭西の二國絶えず以太利に於て角逐し北部以太利は佛蘭西の勢力範圍に入り南部以太利は西班牙に歸し前者はミラノを中堅とし後者はナポリに據りて對抗し互に消長あり然るに一五二六年に至り俄然形勢一變し佛王フランス一世バビアに於て一敗地に塗れ西班牙の捕虜となりてマドリードに送られたり王はマドリードより書を佛國なる母后に呈して曰く予は凡ゆる者を失へり但し名譽は之を汚さず請ふ安んせよと傳へて人口に膾炙す

Ultima ratio regnum (The last resource of King; das letzte Mittel der Krone) 王者の最後の手段兵力の事にて普通に佛王路易十四世より出づといへどもそれより以前に屢々大砲の銘として用ひられたり

Uriah, Letter of (Uriah's brief) 死の宣言 ウリアーはユダヤ王ダビデの將軍なり嘗て總督 Joab に從ひて出征し Rabbath Ammon の市を攻むウリアーの妻甚だ美なり國王ダビデ之を奪ひウリアーを殺さんとし急使を以てウリアーを召す其來たるや王は之に一封の密書を授け歸りて之を司令官ヨアブに呈すべきことを命ず其書に記して曰くウリアーは勇者なり宜しく彼をして敵の最も頑強なる方面に向はしむべしと哀れ彼はかくとも知らず王の書をヨアブに呈し、かばヨアブは王の命令を實行し無殘にも戰死しけり

之と同じ意に Letter of Bellerophon と云ふあり Ephyle 王 Glaucos の子なり其兄弟ヘルと争闘し之を殺してアルゴスに奔り國王 Proetus の客となる王妃 Antaea は甚だ姦婦なりベレロフオンの美男なるを喜び屢々之を挑むベレロフオン應答す大に之を諭すアンテア深く恨み讒して曰く

彼は屢々妾に戯れ忍ぶこと能はずと王之を信じベレロフオンを殺さんとす而して事王妃に關するを以て或は累を及ぼさんことを憂へベレロフオンをして王の舅リキア王 Jolates に使せしむ其書に記して曰く此使者は君が愛女を侮辱せし罪あり嚴刑に處せらるべしとヨバテス乃ちベレロフオンに命し恐るべき妖怪 Chimæa を退治せしむ然るにミネルバ神の保護に因り使命を全うして歸りしかは王の計畫齟齬し更に Solyini 及び Amazons と闘はしむ是亦た功を奏ししかは王は堪ふる能はず勇士を遣はしベレロフオンを襲はしむベレロフオン奮闘盡く之を殲す王大に其勇武を賞し害心を去り之に娶すに王女を以てす幾も無く王殂し嗣無しベレロフオン終に其後を襲ふてリキア王となれり

Utopia, utopian, utopist. 實行すべからざる社會改良策空想的社會及び空想家をいふ ウトピアは希臘語 ou (not) topos (place) より出たる新拉丁語にしてあらぬ所の意なり十六世紀の初英國文豪 sir Thomas More はウトピアと題せる書を著はし新世界なるウトピアといふ架空的小嶋に於ける幸福圓滿なる社會の状態を描出し大喝采を得たり此書は一六一五年拉丁語を以てルーベン市に於て出版せられ幾も無く英譯せられたりモアの自由主義及合理主義(ラシヨナリズム)を戯作に托して發表せる者にして現今の語を以ていはゞ社會主義と稱すべき説を多く含めりされども此書よりウトピアといふ通稱(ジエネリツクネーム)を生ずる程に獨得の創見あるにあらずモアは僥倖に名を得たる者といはざるべからずしてウトピアに述べたる所は其種の多くの一に過ぎず之を前にしてはブラトンのリパブリックあり後にはベーコンの New Atlantis あり恰も

フレンチエの一旅行家アメリゴより亞米利加の名出てコロンブスの名隠れたるが如し

Vandalism (獨 Vandalismus) 亂暴狼籍殊に美術を鑑識するの明なく惜氣無く之を破壊すること沒美觀をいふ西羅馬帝國の晩年皇帝フレンチニアヌス三世軍隊の弒する所となり羅馬市の動搖甚しきに乘し既にアフリカを占領して西地中海の制海權を掌握せるゲルマニ族のワンデル國王ガイゼリックは艦隊を以てチヘル河を遡りローマを陥れ掠奪恣にするに十四日數百年來保存せられたる精巧なる美術品擧げて滅へり(四五五年)これより起りたる語にして此度の日露戰役の初めある一種の社會は多少のワルタル主義行はれたるが如し

Vae victis (拉丁) vae to the conquered 獨 Vaele den Besiegten 無理が通れば道理引き込む勝ては官軍負れば賊軍 紀元前三九〇年ローマはガリ人の入寇を蒙り市既に守を失ひしかとも勇將マソリウス手兵を以てカピトル(牙城)に退き嬰守七月に及へりされど城中糧餉漸く盡きんとするを以て和を提議すガリ人欣然之を諾し償金を得て去らんとす而して償金授受の日ガリ人の秤を用ふるに甚た不正なり(蓋し當時未だ貨幣無く金銀の延金を權りて授受せしなり)ローマ人之を詰るガリの總督ブレンヌ目を瞋らして曰く黙れ咄汝等戰敗の奴と乃ち彼の劍を以て秤の錘に加へ一層多量の金を權りきとぞ

We are Venetians, then Christians (以) Siamo Veneziani, Poi Christi) 一四五三年君子丹丁堡オスマンリトルコの攻撃を支ふる能はずして陥落するや從來東地中海の商業を獨專せるベネチアの位地危殆に陥れり是時に方りベネチアの當局者は斷然たる決心を以て對土耳其古政策を定て曰く

吾人はベネチア人なり先づ第一にベネチアを思はざる可らず宗教は第二の問題なりと乃ち汲々としてトルコ人の款を得んとし終に通商條約を結び以てベネチア商業の安然を圖れり而して今日と異なりて宗教的熱度旺盛異教徒を視る蛇蝎の如くトルコに對して新に十字軍を起さんとの議行はれし當時にありては此ベネチアの舉動は歐洲基督教國の激昂を惹起せしは異むに足らず皆ベネチア人を以て反覆者となし怒り罵り終に此語は極端の實利主義拜金宗と同意となれり又後世荷蘭人は歐洲諸國の激昂を喚起しよことありき其は寛永十四年天草亂に於て我政府に媚び有司の請に應じ軍艦を以て嶋原の背面より砲撃し攻圍軍に聲援を與へしためなり也

To carry war and peace in his pocket 獨 Krieg und Frieden in den Falten seiner Toga tragen 特派

全權大使の責任を云ふ 紀元前二一八年カルタゴの大將ハンニバル根據地西班牙を發してローマの同盟サグンツムを攻むるやローマは直に使をハンニバルの本國カルタゴに派遣しハンニバルの罪を數へ出して以てローマに送らむことを求むカルタゴ人肯せずローマの使の一人ファビウスは其使者の功なきを耻ぢ又カルタゴの民其戰を好むことハンニバルの如くならざるを察し之を脅嚇して功をなさんと欲し衆人の中より進み出て其上衣(トガ)を捲きて恰も物を包むの狀を示して曰く予は此内に平和と戰とを持ち來たれり宜しく汝の欲する處を撰び取るべしとカルタゴ人答へて曰く二者唯た汝が與ふる處のまゝなり吾人は之を撰ふことを欲せずとファビウス曰く然らば戰を與へんと袂を拂ふて去り第二ポエニ戰役(紀元前二一八年—二〇二年)を生せり

War should support itself 獨 Krieg muss den Krieg ernähren 拉 Bellum se ipsum alit ローマ將カ

トより始まれり彼は紀元前一九五年執政官(コンスル)に任せられ直に西班牙の知事となりて赴任し速に平定功を奏し、が常に誇りて曰く余が西班牙に於て攻め取りたる都城の數は之に費したる日數より多しと彼は西班牙の僻陬にして軍隊の給養意の如くならざるを見て極端なる徵發主義を實行し所在兵士を縱て掠奪を行ひ自ら給養の法を講せしめたりと元より軍隊と掠奪とは離る可らざる關係を有しよことはいへどもこはまた極端に走りたる法にして頗る世人を驚かせり然るに意外にも約二千年の後獨逸の三十年戰爭(一六一八年—一六四八年)に於て此兵法再び賞用せられしかは軍隊の通過くる地方は敵味方の差別無しに掠奪を蒙り民塗炭の苦に陥れり

Xanthippe 躁暴不貞の婦 クサンチペは希臘の大聖ソクラテスの妻なり性躁暴常にソクラテスを侵す一日事を以て怒を發しソクラテスを罵ること甚しソクラテス聞かざるが如し然るに其妻の罵ること益す甚しきを以てソクラテス起て戶外に出づ其妻憤に堪へず水を貯へし壺を提げて追ふて之を窓外に擲つソクラテス之を見て笑て曰く此の如き雷鳴の後には必ず大雨の來り注ぐ者なりと此人口に膾炙せる物語より終にクサンチペは亭主を尻に敷く妻君の摸型となれりされど歴史家の研究に因れば彼女に關する說話の多くは後人の捏造にかゝる者にして彼女を批評するに先ちてソクラテスの言行を思はざるべからずソクラテスの如き無頓着奇矯なる言行に對しては如何なる婦人も怒を禁ずる能はざるべきなりソクラテスの禁獄せられし際クサンチペの悲み歎きしことは青史に明記する所にしてプラトン等の書に依れば傳説の謬れるが如し

歴史的諺増補

Anyolean Silence 危險なる沈黙 アミクレは太古希臘のペロポネソス半島ラコニア州にありし市にしてドリア人が勢力を得し以前に於てアカイア人の首都なりき此市にては奇妙なる法律ありて敵人來襲の警戒をなすこと嚴禁なりき其由來を訊ぬるに市民は極めて怯慄にしてスバルタ人を畏怖すること甚しく風聲鶴唳もすれば狼來れりと叫ひて人々を驚かしに因るとぞ然るに此法律のため實際スバルタ人が奇襲を試みしに方り何人も警戒の言を發せざりしかば何等の抵抗をも試みずして市は占領されりぬ因りて希臘人より始まりたる諺にアミクレは沈黙によりて死せり (Amyclæ perished through silence) といひ又あまり沈黙なる人を見ては more silent than the Amycleans といふなり 拉丁にては Amyclæ ipsi taciturnior といふ

Argonaut 希臘神話中の有名なる遠征なり初オルホメノス王アタマスの太子フリクソスは其生父の爲に禱雨の犠牲とならんとせしかは其妹ヘルレと共に實母雲の神ネフェレより賜はりたる金毛皮を有する神羊に乗りて逃走しヘルレは途に海に陥りて死せしかフリクソスは黒海東岸なるコルキスに達し國王アエテスに倚れり終に神等は屠られ金毛皮はアレスの森に藏せらるる後イオルコスの子ヤソンは其姦惡なる伯父ペリヤスの姦計に陥りて身を死地に投しアルゴといへる快船に乘し約五十人の同勢と共にコルキスに赴き公主メデアの妖術の援助を籍り無事に金毛皮を獲て國に歸れり是に依り金を得んがため如何なる困難をも辭せずして僻陬不毛の地に赴くの徒をアルゴナウトといふ即ち一八四八年北米カリフォルニアに於て金鑛の發見せらるるや合衆國は勿論歐洲より goldseekers の同地に麇集するもの恰も蟻の甘に付くか如く一八四九年に於て

は無慮十萬を算せり此輩を呼ひて Argonaut of 49 といふ又輓近一八九六年カナダのユーコン河畔なる Klondike に金鑛の發見ありし時も一大移民を生しは人の知る所なり Atrialic wealth 偶然の所得殊に思ひがけざる遺産相續を爲したる時彼はアッタリックエルスを得たりといふ 紀元前一三三年殷富を以て鳴れる小亞細亞ベルガモン王アッタロス 殞落し遺命を以て其國を羅馬に献ず此國は既に久しき以前より羅馬の保護國なりしが此アッタロスの遺書は羅馬議政官の僞作ならんとの説あり

Cadmean victory 希 Kadmeia Nile 拉 Cadmea Victoria 高價を以て購ひたる勝利をいひ前に出てたるピロスの勝利と同義なりカドモスはフェニキア王アゲノルの子なり其姉妹エウローバが一日海濱に出て遊びしにゼウス神は牡牛となりて現はれエウローバを誑惑して其背に乘らしめ電の如く飛び去れりカドモスは父の命により其兄弟フホイニックス。キリツクス。タッス等と共に途を分ちてエウローバの搜索に出でしが目的を達せずカドモスはデロスに赴き神の教を請ひしにエウローバの搜索を斷念し途に牝牛に遇はる其行く所に隨行し牝牛の臥したる地に於て一市を興すべき神託を得たり乃ちフォキスにて遇ひたる牝牛を追ひてポイオチアに到りテーベの市を興せり因て後世其牙城をカドメアと稱す彼はテーベに於てアレス神の泉を護れる龍と闘ひて之を殪し其齒を地に埋めしに地中より數多の勇士現れ出て互に激しく闘ひて皆斃れたる五人のみ残りてカドモスの臣となりきとぞ

Delenda est Carthago 拉丁語にしてカルタゴ討滅せざる可らずの意必ず貫徹せんと欲する目的をい

ふ 古羅馬の名士カトーは熱心なる主戰論者にして羅馬とカルタゴとは兩立し能はざるを信じ常にカルタゴの討滅せざる可らざるを説けり嘗て羅馬の使者としてカルタゴに赴き其殷富の有様を目撃せしより益々カルタゴを嫉むの念盛となり羅馬に歸りし時携へ來たりし新鮮なる無花菓を上衣の褶より取り出し之を議政官の諸員に示して曰くこは予はカルタゴに於て三日以前に獲たる者なり吾人の畏るべき敵國は此の如く我邦に接近せりカルタゴ討滅せざるべからず此時より彼は元老院に於て又公衆に向ひ演説を爲す毎に必ず演説の結尾に至り揚言して曰く而して予は信ずカルタゴ討滅せざるべからずと之と同意を以てアレキサンドル大王曰く *world two suns bear* と是は大王の東征に際しベルシア王ダリオスコドマンノスはエウフラト河を堺として天下を兩分せんことを提議せしに答へたる言なり又ナポレオン帝曰く *London must be stamped out* と前二人は終に其目的を達しナポレオンは失望に終れるは人の知る所なり

Gigas, Riches of 不義の富 ギグスは古代のリヂア國王(紀元前六八七年一六五四年)にして *Meninades* 朝の祖なり史家ヘロドトスの傳ふる所に依れば彼はヘラクリッド朝の國王 *Candanes* の寵臣にして近衛兵の司令官なりきカンダウレス王は常にギグスに向ひ皇后 *Zeusis* の美を褒稱して止まざりしがなほ物足らず思ひギグスをして之を實見せしめて王の言の溢美にあらざることを證せんと欲し一夜彼を召して王の寢室に忍ばしめ裸體の皇后を瞥見せしむ皇后之を悟り大に王の無禮を恨み翌日急にギグスを召し王を弑して其位を篡ひ彼女と婚するかはた直に死するかを迫るギグス終に意を決し弑虐の大罪を犯し王位に登る國民服せず其位地危かりしがギグスは厚

くデルフォイなるオラクルに贈賄して彼に有利の神託を發せしめ終に國民の歸服を得たりと云ふ

大絃 小絃

岩田紫雲

没趣味なるものよ

噓吁、没趣味なるものよ。没精神なるものよ。實に可憐の者よ!!。爾、元來木石に等し。石化せる爾の頭腦は、趣味を解するの能なく、自然の清き愛、あたゝかき恵を享くるの價無し。世に標榜すべき理想なくしてこの人生を醉生夢死に終らむとす。殆ど治し難き程に膿みたる腦漿は、形而下の美に沈酔しやすくして、自然の清美、靈光は、汝の腫眸に映することなく、常に高潔なる精操、眞美なる理想を放擲して、虚榮に溺れ、名利の奴となり、貪婪に迷ふにあらすや。あゝ爾、可憐の者よ!!

汝の抱負、汝の志想さては汝の本領も、可惜其の影をかくし其の光消ねはて、嘗ては、世を提げ、衆生を濟度せむとまで揚言壯語せし汝の氣節、今や那邊に求むを得べき。これ果して誰の罪ぞや。茲に於てか吾は大聲疾呼せざるべからず。美的趣味涵養は沈まむとする精神を興し、溺れんとする人間固有の美性たる情操を救ひ、煩悶子不平兒をして眞人間たらしむる唯一の良策なりと。今試

に崔峨たる高嶺に登り、仰ぎて天體の大覽に接し、俯して地表の燦爛たるを見れば、誰か無限の感興の湧洶せざるものあらんや。永劫の愛に微笑むは、天の星、地の花なり。縷々として永へに絶えざるは、夫れ人生の情懷なるかな。あゝ實に幸福極りなき人類は、この美趣に富める天地自然の間に生を享く。あゝ何たる天の寵兒ぞや、然かも吾人は、不識不知の中に自然の董化を受け、清美なる理想、鞏固なる信仰、圓滿なる美觀を覺得し、こゝに一個の完全せる美化せる人間とは作り成さるるなり。この理想、この信仰、この美觀をして渾熟せしめて忘想、迷悟、沒趣味の魔影を遠く心外より驅逐せよ。あゝ自然なる哉。自然なるかな。沒趣味沒精神より超脱してより高き人性を得んと欲せば、先づ鬪をまたいて戶外に出で、以て自然のいかに美しきか、またいかに多趣なるかを識れ。噫吁ナザレの神人が野の百合花を見て喝破したる其の一言、いかに其の人格を美ならしめしぞや。永久的生命は、美的趣味の鼓吹に促されたる人格の活動によつて賦有せらるるものに非らずや。終に臨んで、吾は一言せむ。世の沒趣味なるものよ。若し汝、自己を墮落の深淵より救はむと欲せば、先わが言を聽け!!」

奮闘の生涯

In the world's broad field of battle, In the birch of life, Be not like dumb driven
Cattle, Be a Nero in the strife!

生存競争が、宇宙進化の原理たる以上は、奮闘は、吾人人類の天職なり。駸々乎として進む天則は、吾人に命ずるに激しく戰へてう言を以てせり。夫れ人生の行路は至難なり。一たび誤らば身

は、萬仞の絶壁より落下し、千尋の海底に沈まむ。敵は、獨り本能寺のみにあるにあらず。左右、前後、又影閃めいて、危難いつれの處にあらはるゝやも測知れず。暗澹として爲めに天日暗く、咫尺を辨せざるこれ世は一個の修羅の巷。虎の尾を踏み劍の刃を渡るが如きこの奮闘の生涯を處するにあたり、壯丈夫として己を持するの道や、如何? 曰はく、胸襟廓落、よく天地の大を容るゝに足り、悠悠乎として駿驥に鞭ち、自ら努め自ら修め、自ら處し、人の力を藉らず、人の助を乞はず、獨立獨歩、然かも唯我獨尊、迫りくる萬難を排して動せず、變せず、叢る魔を斫つて捨て、たゞ眞一文字目差す己が標的に突進し、然かも正々堂々、天下の公道に則り、大路を濶歩し、些少の蹉跎に爪の垢程も、痛悼せず、事を決するは、癪を切るよりも易く、勇往邁進、己が目的を遂げ、己が主義を貫徹する迄は、よしや此の身、粉となつて碎くることも、己が手にせる正義の旗は、固持して放たず、我馬斃れ、我が劍は折れ、力こゝに盡き萬事休焉を絶叫し、わか事業、わが勳功に萬歳を三唱し、自裁してやまのみ。終生の大目的に着眼せず詐譎以て得たりとし、一時を糊塗し凡眼を迷惑してからくもこの世を終らむとするは、捨てて問はず、苟しくも偉大なる男子、威武も以て動するを得ず、富貴も以て移すを得ざる眞個の壯猛男を以て自ら任ずるの士は、深く己に顧み奮闘の生涯に耐ゆるや否やを試察し、然して後、奮然百尺竿頭更に一步をすゝめて、奮闘的紛亂亂争の渦中に身を投せよ。事に當るに及んでや決して狐疑逡巡する勿れ。些去就に迷ふ所あらんか。これ失敗の近因なり。シエークスピア曰はく、「狐疑は、吾人に對する反逆人なり。これあるが故に吾人をして決する能はざらしむ。決する能はざるが故に機會を逸し、不成功を招

く」と又ポーロ曰はく「只進め。唯目的に向つて進め。後にあるものを顧みず」と。此の決意。これ奮闘の生涯に處する上に於て必ず携へざる可からざる利器に非ずや。これ又成功の秘鑰か？」

喪家の瘦犬

ユーゴー曰はく「佛蘭西人は、猫類の動物なり。常時事なき際には、唯々小猫の毬に戯れて餘念無きが如し。然かも一朝、血を見んか。即ち猛然として一個の雄獅子となる」と。日本人も亦然り。然れども日本人は、平常子猫の如く戯るゝことを知らずして日々齷齪し、喘々焉として何をか見て吠ゆること頻なり。宛然これ食を漁る喪家の瘦犬。徒に吠ゆるは、其犬怯懦なれば也。「時」は、世に慷慨家を産み出すことあり。自ら稱して慷慨家といふ。然して自ら責任の地位に立つも確乎たる覺悟なく。尙更世を濟ふ經綸の才などあらうはずもなし。唯社會の流行兒たらんと欲して世に阿り、人に媚ひ、自ら取つてよしとする定見もなければ、主義もなく、社會的幫閥の如く、彼處に飛び、此處に奔り、寔に、滑稽極る轉手古舞を演じ、世の喝采に心慢り。天下の志士は、已のみと考へ、偶々奇言詭辯を弄して、世の耳を迷はし、とんだ大事を惹起すが落となるなど實に世の爲めに悼むべきことどもなる哉。然して眞成の慷慨家とは、然からず。必ず積極的の大目的あつて、此れを基とし、天下公動の局に當るを云ふなり。かゝる高節の士は、恰も寥々たる曉星を望むか如く、世の慷慨家の多くは、浮華薄弱にして、恰も萍の水に漂ふが如く、泛々として風に隨ひ、波に浮び、漂々として自持するの力なく、朝に秦夕に楚、變轉の術を盡し、世間を誤

魔化す假面の士のみ。噫々。一片憂國概世の志あるもの、これを悲まざらんと欲するも得へけんや。」

方丈記に就て

周 南 子

當時の思潮——長明と方丈記——方丈記と佛教——往生要集

保元平治以來天下暗黒文教亦た衰微に趣けり此時に當りてや藤原氏は既に實權なく殿上人の勢力亦収集するに足らず平安朝時代彼等を中心とせる貴族文學は今や彼等を去りて在野の隱逸者の手に歸せんとせり

而して當時の社會の變動は人心をして世界の無常を感せしめて厭生の念を抱かしめ從來の如き樂天的而かも輕佻浮薄の氣を帶はしめす即ち現世に執着するの頼み少なきを悟りて之を厭離して理想を未來世に置きて誠心に憧憬するの趣きは從來の思想上殆んど見ること能はむるの現象として特に此時代特色と云ふも不可なし方丈記の如きは最も此傾向に投せるものにして彼の長明の特性によるもの大なるは論なれども一面より觀察すれば時代思潮の產物なりと云ふを得べし

見よ此時代の天災地妖と及び綱常の廢頽より貴賤地を易へたる急激の盛衰とは當時の社會の人心をして如何に人生のはかなきことを感せしめたるか浮世の變轉極りなく人事の厭ふべく恐るべき

ことを眼前に見んもの誰か寒心せざるものあらんや平安朝以來唯だ詩に耽り歌に狂し蝶に戯れ花に浮かれ痴情に沈めるのみにして眞摯なる人生觀あることなくなつたや輕薄なる樂天觀のみを有せるものを今や現世は深刻なる厭生觀を喚起し佛者の所謂三界無安猶如火宅盛者必滅會者定離生死事大無常迅速の説相をば目撃するに及びてや現世に安住するの望み少なきを以て従て來世に理想の天地を希求するの心情は當時社會の心情なりこの心情の文界に波及せるは偶然にあらず作者鴨長明は今より七百余年前京師に生れ家世々加茂明神の禰宜を以て明神に奉仕す長明は菊太夫と稱し幼年の頃より朝廷に仕へ又源俊賴僧惠俊を師として和歌を學び又琴瑟の奧秘に達せり後に和歌所の寄人となり從五位に上る然るに彼は父祖に紹きて祠官たらんとの志望ありしに之を得ざりしかば居常快々として樂しみます此世の不如意なるを歎し仕を止め門を杜ぢ交りを絶ち入道して蓮胤と稱し洛外太原山に幽居し行ひ澄ませる清僧となりたり後に幽居を日野の外山に卜して方丈の庵を結びて靜居せり方丈記とは此時に成れる隨筆にして彼の一身の不如意なることよりして一生に値遇せる種々の人事天變地妖をば思ひ浮かべ書き綴り文々句々佛教的趣味を帯びたり方丈記の佛教思想の要領を捉らへしめば厭離穢土欣求淨土の八字にあるべし彼の大風を記しては

と佛者の訓諭の當れるを告白し

又飢饉の時患民等寺を破却し佛像を賣るを見ては

濁惡の世にも生れあひてかゝる心うきわざをなん見侍りしまのあたりいとめづらに悲しかりし事

なり

と痛歎せる又大風大火飢饉地震の如き變轉常なき様を歎せるを結して

すべて世のあたりにくきことを……しばしも此身をやどしたまゆらもころろをなぐさむべき

と哀慟せる等の如きは厭離の心意の表現と云ふべきなり實に安元の火災より元暦の地震まで世界の轉變を擧げて人生の安きことなきを知るや我身も住處も安き事なく常に其憂の絶ぬざるより

更に之を超絶して身心を修めて安慰を得んとせる彼は自ら官位を捨て家藏を捨て奥山に方丈の庵

庵を結びて幽居し世塵と交りを絶ちぬれば又名利に迷惑して我意を汚すの憂ひもなく罪惡を激發

せしむるの惡魔もなし又往時見聞せる火災地震飢饉等の直接に世界の無常を感せしむるの動機も

なく安靜に清淨に獨行して彼の圓滿なる阿彌陀如來の淨土を希求し念佛修行することを得て晏如

として樂しむ處あり乃ち記して曰く(以下断片ヲ)

たびくの炎上にはろびたる家またいづばんぞ……たむかりの菴のみのとけくして恐れなし程

せましといへども夜のふす床あり書居る座あり一身や必ず不足なし

又 栗津原……歳を折り木のみをひろいて且は佛に奉り且は家つとにす

又 又、たほかた世を遁れ身を捨てしよりうちみもなくたそれもし命は天運にまかせてたれますいと

す浮雲になぞらへて頼まずまたしとせず……衣食のたぐひまたたなじ人にまじわらざれば姿を耻

又二神歎せる
又大風大火飢
饉地震の如
く變轉常なき
様を歎せるを
結して
すべて世のあた
りにくきことを
……しばしも
此身をやどした
まゆらもころろ
をなぐさむべき
と哀慟せる等
の如きは厭離
の心意の表現
と云ふべきなり
實に安元の火
災より元暦の
地震まで世界
の轉變を擧げ
て人生の安き
ことなきを知る
や我身も住處
も安き事なく
常に其憂の絶
ぬざるより
更に之を超絶
して身心を修
めて安慰を得
んとせる彼は
自ら官位を捨
て家藏を捨て
奥山に方丈の
庵を結びて幽
居し世塵と交
りを絶ちぬれ
ば又名利に迷
惑して我意を
汚すの憂ひも
なく罪惡を激
發せしむるの
惡魔もなし又
往時見聞せる
火災地震飢饉
等の直接に世
界の無常を感
せしむるの動
機もなく安靜
に清淨に獨行
して彼の圓滿
なる阿彌陀如
來の淨土を希
求し念佛修行
することを得
て晏如として
樂しむ處あり
乃ち記して曰
く(以下断片ヲ)

る悔もなし

又、いま日野山の奥にあとをかくし……其西に闕伽棚をつくり中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り落日を受けて光りとす彼の帳のとびらに普賢ならびに不動の像をかけたなり……谷しげけれど西は晴れたり觀念のたよりなきこしもあらず……

註に曰く念佛者が悟道の念を運ぶの方法として正座觀想を教ふることは淨土の觀無量壽經に見ゆ即ち第一に日想觀とて正座して日出より日没を諦觀して以て淨土欣求の初歩とす東は日出にして悟道の初歩を示し西はこれ彌陀の淨土にして悟道の究極を示すものなり方丈記に西はあれたり觀念のたよりなきにしもあらずとせるは此の消息を洩らしたるものならんか春は藤波を見る……西の方に匂ふ秋けしひの山路をちぎる夏は空蟬の世をかなしむかと聞こゆ冬はつもり來るゆき罪障にへつくべし

これ四季の景を觀して厭欣の聯想を與ふるものか
幽居の様斯の如しと雖も彼は強ひて念佛讀經をば機械的に強行して以て安慰を得んとはせざりしものゝ如し既に穢土を厭離して淨土を希求し一念南無阿彌陀佛と大悟すれば精神は既に相對界を離れし無限の絶對界と一致せり而かも穢土の生体の脱却せざる限りは其弱点として或は時として念佛懶うく讀經も進まざることもあるべければ曰く念佛ものうく讀經すまざる時は……

と上來長明が方丈記に於て彼の世界觀を伺ふに要するに彼は最初深刻なる厭世觀よりして終に清寂なる樂天觀にありしものと察せらる以上管見せるが如く長明は方丈記に於て明白に佛教思想を彰はし居れり而して佛教思想を帶ふるは當時の思潮の産物なりとは雖も長明に於て殊に見るべきものは彼の幽居の記に

和歌管絃往生要集ごとき抄物を入る
とあるものに於てなり吾人をして最後に往生要集てふ典籍に就て一言せしめよ

往生要集は叡山の僧徒として一代の碩徳たりし源信の製作にして其眼目としては往生極樂を勸むるにありされは開卷に曰く

夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり道俗男女貴賤誰れか歸せざらん是の故に念佛の一門によりて聊か經論の要文を集む之を披き之を修するに覺り易く行ひ易し(原漢文)と然れども彼は叡山の傳來の學風によりて教育せられたるものにしてあれば本集の骨目たるや易中の易行たる稱名念佛(即ち阿彌陀如來の救濟を信じて常に口に南無阿彌陀佛と稱へて安心立命を得るもの)にありと雖も後に鎌倉時代に出でし諸脚の如き門戸を開きて堂々之を鼓吹唱導することは敢てせず故に本集を皮相的に之を見れば觀想を推尊し諸種の行儀を加へ稱名念佛なるものを以て附屬となせるが如くに伺はるゝなり

彼は卷を分つや第一に厭離穢土第二に欣求淨土とし第一に厭離穢土を叙するに當りては筆を起して先づ地獄より人間天上の諸世界に至るまで盡く其厭離すべきあらゆる相狀を叙述し(例せば人

間界を叙するに不淨相、苦相、無常相、の三を以て説示せるが如き第二に欣求淨土に於ては前に反して十種の勝樂を擧げて阿彌陀如來の淨土の欣求すべきを勧めたり更に此淨土に到るの方法として正修念佛即ち覺り易く行し易き念佛の要旨を示し後に助念方法即ち念佛を勤むるものをして百方補助の業を修めて其精神を頹さずして其目的を達せしむるものとし乃ち「一目の羅は鳥を得ること能はず万術觀念を助けて往生の大事を成す」と喩義を擧げて「三業(身口意の三業)を護り深信至誠にして常に念佛を勸む」と七個の方法を以て之を示し其要する處は寡慾清淨常勸念佛にあらしめたり

長明の方丈記を見るに其始め天變地妖人事の變遷よりして厭穢の心を發動せしめて更に欣淨の樂境に入り而して寡慾清淨常勸念佛を以て事とせるものは大体に於て往生要集と符節を合せり實に往生要集は彼の理想的讀物たりしならん彼の本集に私淑して之を座右に置きしもの亦偶然にあらず否彼が最初深刻なる厭世觀を起すや往生要集を迎ふるの動機となり欣求淨土より寡慾清淨常勸念佛は本集の感化興りて力ありしなるべし

吾人は此の往生要集を紹介すること尙ほ詳細ならしめんとするも今は繁を恐れて之を略しぬ



文苑

鐘樓守

上

水衣

八幡の森を通りぬけて畔道、轡蟲の聲は桓のさはにとらるに鳴き立てたが奥殿より東に開いた茫々たる曠野、晝ならば雲と連るのが見えやう。しばらくは萬籟唯聞として星河動かず、風無ければ草葉の露も聲を呑んだ。

珠と亂れて浮草に散る螢をせめてもの谷の灯、山路を踏みまよふた時の様な心で夜な夜なこのほどり、崩れた粉蝶にもたれて思を遣つたが、仰ぐ空、岸より斜につき出た池の面に倒れるばかりの柳の木の、つくつく法師の歌に青絲を亂したのもはやきのふ、……………
無然とした。

濠端に沿ふ道の兩側にはたけにあまる薄、小松原へはしばらくの關ではあるが、萩尾花女郎花が亂れ模様の中を、露蟲鈴蟲松蟲の聲は雨と降つて、自らもあやふく蟲の賦、調べは冴えたる大空にかすかに響き渡つたがつと草は開いて明るかつた。月は二十日である。

あれだと胸は躍る、霧は滿山の麓を閉ちて凄涼の清夜、玲瓏たる素魄は手近の老松の上にかゝ

り、山頂はくつきりと輪廓を畫いた。眼前には夜目なれば黒々と横に一町ばかりの小松原。もうあれだと思ふと鞆として斷崖を衝く驚濤瀆激、四散する跳沫は潮のかをりを送つて、耳には絶えず波の音が聞ゆる。

吁また例の幻、鐘撞堂のあたりで幸じて聞える位なもの、松原にも辿り着かないで送うして波の響がと強ひて氣を静めると、以前にも増した寂寥の天地、今通つた七草の道のわたり蟲の聲が風に連て高く低くこゝろには幽である。

僅一ヶ月の間にかうも寂びれたものかとそぞろ懷舊の涙にくれたが、雁翔らば翼も透かう、二十日とは云へ眩きばかり咬々たる月光を眞向に受けて悄然と辿る影、我ながらあさましく、振り返る眼前にはあはれ啼かず地をかすめて羽音重う山鳥が飛んだ。飛ぶ行方を惘然とうち眺め鏡やあると云ひ知らぬ胸のなやみ、鏡やあると黯然とした。

高きも丈五を超ゆるなく低きは尺ばかりの小松原、若しそれ風ただやかなる春の夕、笛をこゝに曳かんか、地ははた一面の葦、人里を離るゝ遠きが故でもあらう、かをりは烟こそ立たね香爐よりかともまがひ、近き松の梢に戯るゝ風は經とも聞ゆる。宜なるかな、松原のはて、數ヶ村を瞰下した小高き丘の上に、梵城大悲閣が絶壁の半腹に移されたにも關らず、依然として巖磴立つ鐘撞堂！

堂の直下數十丈には巨浪翻つて銀山頽るゝごと、冥濛たる白霧は崖噬む波濤のたけびと相應じて物凄い。

と懷しげに仰いで堂を見、俯して鞆の響に耳をすます容姿端麗うら若人の、瞳は流るゝ様に動いて縹渺たる滄溟の上、月あかければかすかな漁火と浦々に添ふ數ヶ村とに投せられた時、肅然と襟を正した。

中

それがゐなければ十ヶ村は闇だと敢て恩に被せるのでも人に矜るのでもないが、何かの折には口僻の様に云た鐘樓守権爺も、寄する老の波には抵抗しがたく、こぞの春、撞木を握たまゝあやふく悶絶しやうとしたのを、折しもこゝを通りかけた旅裝束の若人、堂に怪しき聲あり、驚いて飛び込んで抱き起し、石段を背負ひながら伽藍に辿り着いた時は、赭顔白髪の権爺、片息になつてゐたものゝさすがに近郷の建物、これと云ひ様鐘樓をきくと眺んだ眸ははや物のあやを見分くる事が出来なかつた。それでも終夜の加治祈禱、三五の醫師のつきさきりで、辛うじて命だけは拾つたが翌々日の朝、永き昏睡より醒めた時、はらゝと熱い涙が彼の頬を傳はつた。「あゝ十ヶ村は闇だ」。双の腕はしかと物を握る力を失つたのである。

事實彼の如く鐘を撞く者は恐くば天下に二人とゐまい、一たび響くや海は十幾里の沖迄、堂を中心として左右の浦々數ヶ村、山手にあたる二三ヶ村、朝は寅、夕は酉、夜半は亥と、あやまたず撞く権爺の撞木によって人々は刻を知るのである。であるから彼病むと聞いた其日、十ヶ村を擧てひとしく色を失つた。

翌日、彼の再起たざるを見た近郷の年寄株、額を鳩めて談じ合つた末、作と云ふ水夫あがりを彼

のあとに据ゑたが、あはれ如何せむ、鐘の音は四五村に辛うじて響くのみ。依然として樵夫の研をかへす斧の音海人が勇ましい歎乃の聲はいづこにも冴えなかつたのである。

かくして七日目の曉、紅蓼の渚白蘆の洲、沖より吹く潮風が浦の苫屋の檐を拂つて、彩霞未だ流れず、東天はやゝかすかに白むだばかり、殘月朦朧として海のあなた中室に懸つた頃、怪しむべし般々鐘の音！ 響の末は鐸として青郊荒蕪を越へ碧岫をつんざき、清溪翠澗に亂れ入り水流に激し、前はこれ渺々の蒼海、十數里の沖を走る影の如き白帆にまつはり、近きは偃蓋錯落たる小松原に蕭瑟を喚び、鐘樓の眼下、左右に分れた浦つゞき村々の雨戸を震はしたが、と十ヶ村の者共ひとしく枕を蹴て耳を澄ました。刻は寅、聞け般々の鐘の響。

權爺！と何處ともなく歡呼の聲が起ると、あちらからも權爺、こちらからも權爺、浦に山手に天地も揺めと叫ぶ間を、本堂に折しも經の方丈躍り上て喜び、羊腸たる石段を飛ぶが如く駆け登たが鐘樓の前ではと跪いた。

ひら／＼と櫻の花。

見よ、眉目清秀の青年、かの旅の姿をそのまゝ、撞木を握つて微笑するを。

誰か知らむ、權爺は昨夜晩う磯より海に身を投じたのであった。

下

思ひぞ出づる六年の昔、とある山路を麓へ差しかゝつた時は日は全く落ちて殘んの光、崖鬼背を摩する巉崖の頂の白雪に映ね、新に聞く千山に響き渡る吐鵲一聲、床屋が桓根に夕顔の花ほの白

き夏の黄昏であつた、潺湲たる溪流を數仞の下に聞き、半月を浮べた様な飛橋の袂擬寶珠にもたれ、碧瑠璃の空に煌々と紫微の垣よりあらはれた明星を仰いで終日の酷熱に若しかつた旅の疲を洗つた折しも遠く幽に晚鐘の響、餘韻擾々流れに亂れ、二の響、三の響、響は響を傳へ、あたかもこれ妙なる樂の調べ。都を離るゝ數十里、日を経る十幾日、鳥の聲、水の流に馴れた耳には天上の樂とも聞えたのであつた。

今の鐘はと山の麓、村はづれのさゝやかな茶屋に溢茶をすくりながら尋ねると、あれはこゝから二里ばかり北、荒磯の上の名代の鐘でござんすと答へる娘の話を引き取つて、いくら鐘が善くても堂守の權爺さんがゐなければ駄目でさあと囁。

見ぬ須磨や明石はいさ知らず、文人雅客の目をまぬかれて民質朴に俗正しく、夜戸をとざさず路に落ちたるを拾はざるこゝ鐘の音の聞ゆるを境として太古さながらの小天地、嵐強き亘雪深き夜も撞木を握つては依稀として覗ふべし三軍を叱咤する老將軍の俤、姓は知らず人呼んで權爺と云ふ。もとより何處から來たものだと誰も知らぬ、數十年の昔飄然と此附近にあらはれたが辿り辿つて例の鐘撞堂へ來た時、中をつくづくとのぞき、千里の馬もと難かしくうなつた其日より身は直に鐘樓守、妻も無ければ無論子もない、道は山手から一筋、されば都の方とは直ぐわかる、今は權爺さん、其頃は派手な若衆姿で悄然とござらしたか、あはれ平家の公達の落人かと今でも霞む眼に見えますると婆さんまだらの齒莖をあらはして淋しげに笑つた。

其夜星明をたよりに苔むす巖の上に瞑目端座、やがて筆端風を呼び雲を起し五更に至つて成れ

る長篇の詩「鐘樓守」師の閨を歴、洛湯に梓を乞うたのがあゝ抑さすらふる今の身の基とは！

榮ゆる者はうらまると譬、未だ二三年を出でずして稱讚の聲は猜忌となり嫉妬となり歡呼の叫びは罵詈の辭と變じ、はては拍手の鉄拳とも變せむ勢に年少氣鋭燃ゆるが如き血潮の何すれぞ堪へむ、燕雀焉ぞ知らん鵬鵠の志、高調豈爾等の低耳に入らむやと奮然袖を拂つて都を去り、野に山にさまよふ身となつてより、あはれ折あらば今一たび權爺が鐘の音にけがれはてし耳を洗はむものをと其年より五年目、去年の春、山路を踏み迷うて思はず見る右斜、もの三四町のあなた小松原をぬけてた鐘撞堂、まさかと思つて近寄れば堂の中の怪しきひびき、權爺の悶絶それも夢、權爺に代つてことしの夏一ヶ月前迄、戯に撞いた鐘に結縁して一年ばかりの鐘樓守それも幻、燃ゆる血潮をこらへにこらへた夏の曉、ひそかに鐘に暇を告げ、朝顔の花をかぞへつゝかへれば以前にも増さる阿門の輩の、ひとり鷓鴣を撞にするに噫と師の忌み給ふ歎息が自から口からもれる、と髻髯として眼に映じ來るかの大古さながらの村々、沖を走る白帆、山の樵夫の斧の音、わが撞く鐘に數千の人の命かゝれりと思へば、醜俗と絶縁せなかつた身の口惜しさ、長からずと云へ一ヶ月の間、鐘の響も聞かずに村人は遠うしてらうと矢も楯もたまらず都を出たのは十五夜、けふ二十日の月を頂き、露を踏み、蟲の聲を聞きながら來て見れば懐しい哉那の眠るが如き小天地。鐘樓を見上げて肅然とした。いざさらば筆を折らむと口の中。若き詩人の青白き頬には淋しき微笑が浮んだのである。

荒上人

影坊主

(一)

「呀、呀、呀！ しなしたり矣！」

直垂の片袖を拂へば扱も奇怪、短檠の仄闇き光を受けて浮くばかり曰く、凄く麗はしの首級一個、思ひきや其の柳眉、思ひきや其の花唇、吁々更に思ひきや濡髪ながら丈には餘るべき黒髪、灯火暗きか、吾が眼霞めるか、そもく之れ正しく彼左衛門尉が首級なる歟、非ず、さてはしなしたり矣。

「袈、袈婆！」

袈婆か、噫竟にこれ袈婆歟。あらじ、非じ、如何にするもさばかり我に優さしく愛でたかりし人の今かゝる状となりて見えんことの想ふべくもあらず、更に左ばかり微妙じかりし人の命を我自^{ウツチ}が手にほにかけてむ、と奪ひ去りしぞとは如何で思ひ得べきぞ。夢か、夢なるべし。假し洵なりせば我が胸は破れ我が血は滾ぎりて遂に心狂はずしては止まじ。

盛遠は静かに眼を瞑ぢぬ。瞑ぢて神を念じ只管に燃え立つ情思と狂ひ立つ血汐とを壓へんとはすなり。渠は今、前の日相見たりし愛^あしき人の言の葉を履んで今宵しもいかで知るべき其の人の首を袖に包みて花の里より飯れるなり。袈婆は逝きぬ、十七の佳人袈婆は貞節を懷いて逝きぬ。而

も未だ覺らざる盛遠なるもの今親しく其の傍に接して有るまじく怪しく疑へるなり。九月十五日の夜早く明けんとして灯火の影更に細く明け放したる西窓より思に沈める若武者が鬢の縛れに露冷かに下りぬ。而して彼は靜かに眼を開けるなり。靚すや、其の眦は裂け其の眼は怪しく輝き而して其の面は血を失へるを、されど又遽かに叫ばず、慄かず、波立ちし胸は今凝つて氷のやうに冷かになりぬ。其の肺腑を劔となつて貫きし或るものを胸深く悟り得しなり。やをら、さし延べたる腕に小袖のまゝの首をかき上げて瞬もなう肥と噴入りつ。菫めば固く引き結びたる唇の邊に笑の漂ふらんやうに、眼元の愛嬌の匂ふばかりなるもさながらなるを、嗚呼これ洵に袈裟なりけり。まがふ方なき袈裟なりけり。されど盛遠は又遽かに叫ばず慄かず。只情として慘として其の面影に向へるなり。

夜は明けんとす、窓に倚りたる彼方の經机の上にはち切りたる直垂の片袖の上に袈裟が首は据えられつ、前に供へられたる、香爐より立ち昇る二筋の烟のともすれば消え勝ちにユラ／＼と風に縛れて行末覺束なく心元なげなるを、定めなき現し世なる哉とばかり諸肌ぬぎて靜かに座したる盛遠は尺に餘れるが鞘を拂ひぬ、匂ひ溢る、ばかりなる大亂れの古備前、これ二時前には寝ねたる佳人が血を吸ひしもの、今や其の主なる人の腸を斷たんとするなり。灯影に其の凄き光を透かして見て盛遠は笑みぬ。而も袈裟が首級に到つては黙々として鬢髪も動搖がざるなり。盛遠は逆手に刃を握みぬ、袈裟の首級は更に黙々たり。題目を稱へて今ぞ其の劔に伏せんとして最後に眺め

たる渠が眼には怪しいかな、袈裟が眼の靜かに開いて蔑すむが如く嘲るが如く映じたるなりき。」突如として渠は劔を投げぬ。

(二)

十六日とはなりぬ。此日盛遠は郎等數多具して花の里なる左衛門尉渡の家主人を諍ねて、其が妻を斬りし罪を謝して親しく其の手に屠られんを乞ひぬ。されど事は多く彼が意^{こころ}たがひぬ。渡は盛遠の一度狂ひては意馬の脚折れて始めて止むが如き情を有する人ならず、渠は優しき情に泣く人なりき。かくて渡は悲愁の餘り剃髮してせめて袈裟が菩提を吊ひて愁思を遣らんとするに急にして盛遠を怒るには餘りに情緒紊れたり、盛遠は眼のあたり渡の剃髮するを瞻たり。其の母と其の夫とに宛てたる可憐なる袈裟が遺書は最も深く盛遠が心を貫きぬ。又渠は憫むべき袈裟が死を悼みて爲めに出家したる參十餘人の男女を觀たり。而して其の母衣川が愁悶悲嘆の狀を眼にしたり。歸途彼は袈裟が遺書の端に認めし、露深き淺茅が原に迷ふ身のいと暗路に入るぞ悲しきを誦して情々として快々として館につきぬ。

(三)

袈裟は逝きぬ、十七の佳人袈裟は貞節を懷いて逝きぬ、嗚呼我盛遠何すれのものぞや、自らあらけなき手に我が戀人を殺し雪の如く潔き節婦を屠つて心安けきを得べきか、念へば過ぎ來し三年の茫々として夢よりも淡かりけるかな。

生れて茲に拾有八年、稚くして母上に訣かれまつり孤子となりしより心様のみ暴く猛く荒み行き、流離多かりし身には物の哀れを識らず、太刀とれば敵に勝たんことを思ひ涙は只悔しきみに落して院に仕へまつる身となりては北面の士に隨一の剛の者と人に免されしを念へば今よりは三年の昔と半なり愈りぬ。渡邊の橋供養ありし其のかみ、ふと北の橋爪に此世ならぬ麗はしさを視てしより怪しく心くれ思亂れて身は空蟬の三年を昏らしつ。雨の宵に人懐かしくつくぐと物を思へば憐さ々々と胸に應へて、たのづから涙もさしぐまるゝを扱も盛遠ともいはるゝ程の武士がうら耻かしくも衰へるものかなが故の涙ぞ何が故の愁ぞ、丈夫志を立てては貫かすて止まじを人しれぬ思に氣心を腐らす上の愚やはある、山ならばよし其の山の峰を越えん、巖ならばよし其の巖の根を貫かん、此のねがひ何程の妨有らんとも貫いて止むべきのみ、人の命の双の手に餘るを殺すべきとも吾か希を貫く上に何程の逡巡ぐことのあるべきや。

さばかりの思を衣川の承けざりしこそ面憎くけれ、いでや所詮は慚はぬ望なりせば姨上なりとも吾が刃にかけ、且は返す刀に吾がこの苦しさを絶たんものと、有るまじき振舞にも及びしを袈裟の憫とや見し、やがてぞ相見るの首尾とはなりにしを。

憶へば夢なり、夢なり、一夜袈裟が花の如く雪の如く崇く優さしく微妙じき心映へを親しく看てし時、見ぬ思は實に物の數ならず命にかけてもと思ひにし晨の別れに、几帳に倚りて、我ながらんともわりなき心な起させ給ひそ、とて寂しく打ち笑みし面影と言の葉の眼につき耳に響くやうなるを、今し懐へば憐の極みなる哉。

袈裟は逝きぬ、貞節を懐いて逝きぬ、嗚呼我盛遠何れのものぞや。袈裟が一片清き貞節の前に何のがんばせか有る。死せよ、汝盛遠、愧死せずや。汝が狂ひて汚れし及ば其の命を斷ちしなるぞ。袈裟は竟に死に歸らず、花顏蒞むによしなく、嬌音今や耳にしがたし、潔き節操將た何れの邊に見むるを待べき。袈裟なし、袈裟なし、寂しいかな、我將た何の望か有て現し世に停まるべき、袈裟が哀情に想ひ到れば吾が腸も千々ならんとするを。

吁々寂しい哉。我今何の影に憧がれ何の光に照らされて命活きんとはする、念ふに望なきはやがてこれ生なきなり、生かそもく亦死か。今にして懐へば、よしや我に辛かりしとも人有りし世の戀しき胸に泌み亘る。今より長き行末の臨みても蒞みても吾には只冷かに寂しく茫々として漠々たる大地の闇夜を只我單身ひと灯火もなくして迫るやうなる心地のせらるを、よしや脚は千里を行くに怵ゆべとも何を目し何に倚りて進み得ん、噫々慘まししの吾が生なるかな。此の生を守り此の心を鞭つて何が故に吾世に立たざるべからざるぞ、謂れなし、謂れなし。世吾を捨つ、吾又世を棄つ、然り、吾今は只死すべき而已、されど既に我刃に伏すの愚かしきを知る。今是我竟に墨染の袖にこの悵愁の胸を包むあるを知るのみ、一には袈裟が菩提の爲、二には懺悔滅罪の爲、三には受戒解脱の爲、

袈裟が菩提は吊ひ得ん懺悔滅罪は希ひ得ん、されど吾如何にするとも解脱すべしとは思はれず、一度茲に吾が情は破れ去る、吾生きたがらにして心既に死す、既に捨鉢の身のみ、既に自ら棄て去る、今の我は生殘の軀のみ、道の爲には何物をも怕るゝに足らず、軀を堵すべきなり。いな我

常に情を恣にし意を暴にして心神を荒さずんば愁思苦悶一日も堪ゆべからじ。

(四)

盛遠は終に黒衣の人となりぬ。稱して盛阿彌陀佛といふ。此人真に僧か俗か吾知らず、其の剃髮の始めに當ては夜半起つて急に讀經し忽ち笑ひ忽ち怒り忽ち泣き終夜寐ざりしこと罕ならずといふ。かくて一代の怪僧は生れぬ。かくて捨鉢の身を那智の瀧に瀑して荒上人と化り畢んぬ。勿怪、渠が一生の荒行は血に勝ち情に剛かりし當年の若武者盛遠が自ら暴にせし後身の所作のみ、生れて寝く十八歳、早く既に醫すべくもあらぬ痛手に花の如き情を破り去られ、悠々たる天地渠一人容れられず、血を嘔くが如き愁思深刻窮りなきを懷いて逝きし渠が心情を思ひ翻つて更に意馬心猿行くがまゝに制へず牽かず、有らゆる難行苦行荒行に喜で軀を苦しめ更に心のまゝに舉動ひし渠が一代の怪績を憶へば、噫吾如何にするとも同情の涙なきを得ざるなり、この荒道心畢に佛に安心を得ざりしもの歎、

ちぎれ雲

嵐

月

曉の影ほのかに揺れて、春の夜は又音なく明け初めぬ。花のいきさえこもるやと思はるゝ、薄靄

の間を縫ふて、靜に流るゝ紫の光に、裏の梅園雪消え初めぬ。

あはれ花のしとねに身を寄せて、夢美しき鶯の、雪解の水に足をぬらして身獨を侘ふるいちらしさはありやなしや。

み園の宵は更けそめて、春の氣深く渡殿のあたりをこめぬ。池の水際、靄ほの白き蔭を、うら若き上臈か、後れ毛薄く頬に匂ひて、折々の落花に行きまごふもいぢらしや。

遙に園の花をもれて、夢かの如き笛のしらべのときれく、堪わかねてか其人は、うなだれ勝ちに熱き涙を袂に秘めぬ。

あはれうら若き身の、小さき胸に何のなやみか。我世の春は今を盛り、花の夢誘ふ鐘のねも更けて臙にかすむものを。

曙の影かすかに、鐘樓のあたりはやほの白く、み寺の春のしづけさは、曉の己に花散る音も聞ゆるばかり、……今しも二十七段石の階を登り終へて、鐘樓に入りし白衣の人。眉のあと深き匂いをこめて二十に足らぬ美しの身に、何をいとひての尼姿か。玉の手に撞木の綱をしかと引いて、淋しくもらせし片頬のえみは、あはれ今つく鐘のうすれの、せめては花の夢を縫ふて、つれなき人が春をよろこびの、朝の枕に通へとてか。

昨夜ふりしか、野面は白く雪を見せつ。碧瑠璃の流、一としほゆるやかに、籬落の梅僅に花をつけて紫の煙ほのかに森をこめぬ。

朝の光尙未だかすかに、空行く雲のみ色幾彩の香をとめて、やさしき影を水に落しつ。鶏の聲かすかに、あけの鐘つく村は何所ぞ。あはれ、眞白き雪の被衣きて、一色の夢にぬる、曉の野の静けさよ。

今日は春逝くと云ふ日なり。限りなき離愁の胸を、薄き袷の袂につくみて、村端れ流れのほとりに、大和へと旅立つ友を送りつ。二人かたみに見かはして言葉なきしを、心なや鐘のね遠く、一杵！ 二杵！ 三杵！ ……あはれ、うらぶれ包む旅姿、やがて若葉の初瀬のほとりに、雨に鐘きく日もあらば、二年の昔、我世流轉のはかなき鐘にかこちし吾あるを思ひ出でよ。

渡し舟、楫のしづくの水に落ちて、遠ざかり行く友の姿。えや別れと見返る片頬のやつれをそめて、夕日の光うすれ勝ちに、さらばの聲は空しく花さをふ水にながれぬ。

筑波もくれぬ。霞が浦にはや黄昏の影落ちて、潮來は遠くもやをこめぬ。

蘆の花ちる間をわけて、うら若き僧のせて行く小舟一ツ。しめりを帯びし櫓拍子のたねまを、何所ぞや、蘆の葉がくれ、憂にさゆる少女の歌。美しき聲、艶なる節。堪わかねてか、うら若き僧は、熱き涙を墨染めの袖に包みぬ。

心なや歌聲の又さやかに、愁をのせて蘆にうすれぬ。あはれ、謠ふ人、謠になく人、胸に包める思や何。汀の蘆のささやかに、秘めし言葉を聞くや聞かずや。

ほのかに霞む春の薫りに包まれて、彌生の日影ははや落ち初めぬ。野面はうすく紫の影をこめて、花の香、夢と薫じ、霞をくぐる小鳥の翼も、七彩の色をそめぬ。

やつれ姿を、小笠に包みて、たゆたひ勝に辿る旅人一人、うち若き身に何をわびてのさすらひか。花の香そごる胸にしむも、只伏目勝ちに、折々のといきも一としほいちらしや。

暫時して旅人はたぐすみぬ。深くも物に打たれし面ざしの……きさしは何。樂のしらべか。云ひしれぬ氣高きの胸にみちて、旅人はそと打ち仰ぎつ。みくは何。前なる丘のまなか、薫する花に身をよせて、吹くは小笛か。花うら若き少女一人、氣高き姿、艶なる衣、黒髪長く匂はせしは、あはれ、天上の星、我世の春に誘はれて、暫時をこゝに假の姿か。霞はゆるくあたりをこめて、袖にむつるゝ胡蝶の影も麗しや。

しらは又一としほ高うひびきぬ。聖きひびきの雲に通ひて、野末の小鳥も夢みるかや。仰き見るだに堪えかねて、旅人は又静にうなだれぬ。花野のまなか、霞の彩につままれて、聖き思は胸にみちつ。己が身をさえ人の世を、遠くはなれし其かと惑ひつ。

暫時して、紫の幕は野面に落ち、我世は美しき夕の衣に蓋はれぬ。花薫る丘。けだかきしらべのそれも、何時か消えつ……さはれ、旅人は尙うなだれて停みぬ。

又、靈たままつる宵となりぬ。草野に落つる月の影ふみ分けて、み寺の奥我幼くて逝きし妹のみ墓に詣でぬ。昔さわいとしほ露を帯びて、奥津城の影も深き愁をこめぬ。

跪づきて、手向るは、つれなしや花は亂れ勝ちに、み墓の石も泣けよとか。あはれ美しき者は、はかなしとは誰が云ひ初めし。さはれ美しきはたが罪か、我いちらしき妹の、七ツと云ふ秋を逝きてより、ここに四度の靈まつり、折々を心づくし。兄が手向の花を、せめては受けよ嘻しき笑みに。あはれ汝なが在りし日の姿、えまゝい、尙胸深くきざむとも、今はた、何の姿に何の夢をかみる。

春の淡雪、秋の霜に、汝が住む里の寒からば、せめて暫時なりとも母君御在す我家へかへりこよ。又兄と、春の夕野の花つみに、樂しき折もあらむ物を。

汝が行く野邊は、ほの暗き影低くこめて、花咲かず、鳥歌はず、水さへ枯れて流れずとか、身獨たざる淋しさに、少き胸の堪わがたくば、せめて今宵を我家に寝ねて、一夜なりとも樂しき夢にほゝねますや、冷たきみ墓の石によりて。涙にむせぶ吾あるを思ひ出さば、とくかへりこよ。汝が世の道は遠しと聞くに、かよわき足のたね難くとも、とくかへりこよ。家には汝を待つ母も御在するを。

露の香、一としほしめやかに、夜風にゆらぐ靈燈の火影物淋しく。吾はたわかねてうなだれぬ。朽葉の蔭に蟋蟀のなくね、微かに低く愁を帯びつ。あはれかよわき虫の、何を侘びての忍び音か、

ここにみ墓の石によりて、泣く吾あるを知るや知らずや。

七月

ゆ

ゆ

心はるかなる七月の空、まだきより拭へるがごとくなれば、やはらかなるばら色のにほひ、ひたすらに漲れる日の出なり。早つゞきに見るやうなる、いきせまるまであかあかどからびたる光にはあらず、またあらしの前に表はるゝ、濁りたる日の色にも同じからねば、いと、花やかなる嬉ばしき輝きやうにて、細長き旗雲の間を、のびのびと昇り來て、さはやかに照りいでこそ、ふたゝびうす紫の靄のなかに入りぬれ。雲のひれの上をめぐりて、うつくしくほそやかなる蛇の輝きいづるありて、その光、さながらに、とぎたるしるがねのごとし。見よ、日は今輝きぬ。ふたゝび、嚴なる歡喜もて、舞ふがごと羽をのばして、たほいなる軌道をのぼりきたる。

眞晝近くなりぬれば、空たかくは、うるはしき鼠いろの、まりのごとき一むれの雲の、やはらかなる白きふちどれるが、鳥あまた、たぶたぶなる大河の表に、散りばへるに似て、うごかす。流れは、人のかき亂すなきはるかなるかなたに、深き深き、すき透るやうなるみどりにて、めぐりて、鳥をひたせり。下空の雲はうごき合ひて、そのひまに青空の見えずなりしまでに集りぬ。されど、これも光と熱とに充ちたれば、その色、空のごとく青し。眼路のさかひは、ほのむらゝ

きのうつろひ、ひねもすかはることなく、四方を同じやうにてかこめり。いづくをながめても、あらしの雲の、集りてくろみゆくすまも、眼に映らねど、かゝるとき、空より、青色の光さすやうにあやしきは、眼にも入るまじき雨のしづくなり。

夕には、かゝる雲、みな消ゆきて、わづかに残れるも、黒やかにうち煙りて覺束なく、入日のかたにのみ、とき色のすじひきはへぬ。昇り來しときも同じやうにて、しづしづと、日の沈みゆきしあたりには、からくれなるのほほき、やうやく暗くなりゆく地の上に、長くかゝりてたゆたへり。されば、夕星は、空に、あらあらしげに手にどりし燭のごとく、ゆらゝかにきららめきつゝまたとけり。

七月のかゝる日には、物のいろもやはらかに、かどやくともきらきらしからず。なべて、しみじみとせるなさに、みちみちたらし思ひなり。かゝる日には、よくせずは、きはめたる暑さにて、高野なども、あるひは、むさるゝやうにてもあらむを、吹きはらふ風は、ちりほこりのうづまきを起して、はれかわきたる路にそひ、野を横ぎりて白き柱めく影を移しゆくならむ。そらには、にがよもぎと、花さける蕎麥とライ麥とのかをりする。農人の麥秋にとて待てるは、かゝる日なり。

(ツルゲネフ)

讀尊徳二宮先生傳

村上函峯

孟子曰豪傑之士。雖無文王猶興。我郷二宮先生。蓋其人也歟。方幕府末造。華奢成風。士之

講學者。不知經世實學爲何事。先生發跡田畝。學無師授。晝耕夜讀。自成一家。其率弟徒。尙信義。重實踐。闢荒墾蕪。節用厚生。以報天地功德爲宗。世稱報德學。大則侯國。小則鄉黨。莫不用之而舉其功績者。豈非所謂豪傑之士耶。宜矣朝廷追贈從四位。而門徒又祀之也。余與先生同里。閉而恨生不同時也。詩曰高山仰止。讀此傳。益不堪仰止之情。爲書此數行云。

書岡本秋暉畫雙鶴幅後

同

岡本秋暉爲人疎放高潔似鶴。夙師渡邊華山。遂傳衣鉢。於花鳥爲最妙。此絹本雙幅。松根二鶴相對。一仰一俯。清遠閑放。有塵外之姿。視之庸工。靈蠢自別。余與秋暉同里。又識其息碧巖。高潔士也。辭官嗜書。書名諱于世云。

新体詩

籬下窓前

栞

水衣

いせ聞くせくらぎ

あふぐとすれど

夏なかば深き夜の

雲たひぬれば

文苑

五十七

一ツだに 星の見えぬ。

つと飛ぶ 螢か

黒き瀬や 小流の

みづ草のうへ

散ると見ばはた

築地こね 闇を殘す。

友よと 紙苞

ためらひぬ 右手ながら

きみがみづから

やさし菜の

灰をこそ あは流さめ。

この川 春の日

桃さくら ひらひらと

散りてうかぶを

なさけいかにと
忍び音の 君いま更。

さはあれ なわびそ

うつろひの 人ごころ

ねはむはあまり

めしからむに

いざさらば 流しやらむ。

さ夜なり 水のへ

紙のまく そこなげし

音にこそ友の

まなこかやき

闇ながら 灰に映る。

なくごと せとらぎ

あふかくて 流れゆく

しをりのゆくへ

とふ人あらば

いざやゆけ 大海ばら。

瀕死の白鳥

(テンスン)

荒涼の 曠き野は

はてしなく 草深う

淺芽原 よもぎ原、

こは帷帳 悲しみの

見わたせば 唯淡う

四方をわふ 空の色。

聲をのみ 走る水、

瀬のまくに 流れゆく

死なむする 白鳥の

高くこそ なげきけれ。

さびしらや 日は真中

文苑

蘆の葉を そよがしつ

力なき そよ風は

小やみなく 吹きわたる。

はるくの わちの方

くものへに 聳えたつ

峯々の 色青う

冴えわたる 大空に

あまかける 白嶺は

ゆきにこそ 映えにしか。

水のへに うなたれて

よとと伏す 糸柳

吹く風の ためいきに

さど波を ふるはしつ。

空たかく 風にのり

みどりなす 牧場こえ

ともすれば 影ちさう

ねむるごと 流れゆく

まどはしの 水道を

あな思 あくがれの

濃むらさき 黄やみどり

日にはゆる つぐくらめ。

白鳥の 死の歌は

悲しみに かくれたる

よろこびの すさびもて

荒涼の そのわたり

ものみなを しごましぬ。

さはれかく 歌ふれど

唯ひさく あきらかに

うちふるふ 音のかすか。

たゞよふや 中空に

みちたりや 弱き音に

はた遠く はた近く

ひそむごと とむらひの

悲歌はいま 聞えしが、

忽に あめ地を

どよもして 聲たかく

かちごきか はく鳥の

歌はこれ くしき樂

凜りんと ひききけれ。

例ふれば 市ひとが

あし笛や 銅鈸や

瑤琴を かき鳴らし

よろびの うたげすと

奏樂の 音はるか

市の門を くぐり出で

明星に あくがれの

牧童を さますごと。

地に布くは 蘚苔か

這ひのぼる つたかづら

しめやかに 小枝さす

青白き 絲やなぎ

さやくと 音するは

あしの葉の さゝ波か

せゝらぎに たえがての

音よ銜 川堤

さびれたる 落葉の

川・池に 咲きたるは

白金の 水草か

ものみなは よもに散る

歌をもて

みなざりぬ。

柴櫃の

柴櫃の

かげに蟲かともすれば

まがひ聞ゆる草笛に

琴のしらべの消えゆけば

庭せきまでに蟲の聲

燈はゆらゝ

小風舞ひ入る椽がはに

障子くりたる音ちさう

蟲の音さつと遠のけば

飛石づたひ下駄のれど

白萩の

露ほろくと草のうへ

外方とちのかげのかき消て

ふたゝび蟲の歌ふとき

琴の音みだれくゆく

詩人の夢

(國民覺醒歌の序)

序章 海邊

茜さす

ゆうべ落陽の色赤く

魔炎に似たる雲の色、

天地ごろかし人やきて

けがれし世をば討つといふ。

夫れ例ふれば荒海の

浪漂酒の底ふかく

眞紅もゑなむ珊瑚をば

若き詩人の胸に秘め、

戀の炎にやきときて

天つ藝人の投筆に

さつとはけしに似たるかな。

潮歌 伶人

見よ榮光のさすところ

そこに紅玉の色ふかく

見る目まばゆき雲の色、

いづれは奇しき天地の

み靈ほゝゑむ紫か。

かゝる斜の樺橙色は

乙女の舞の袖かるう、

あれに流るゝ亂彩は

男、紅賣り眉清き』

眺むれば海若うして

紅の薫りのほゝゑみや

あるは紫紺の浪衣

寄する潮の興高く

歌ふは何のさゝやきか。

あかつき、清く照る星に

希望のゑみを寄せて行き、

今はた多き幸のせて

歸る舟路のいそぐと

金色の眞帆美しう

梶ゆるやかは舟の歌。

白き鷗の三ツ四ツは

小さき羽に身をよせて

西に夕をつたえ行く』

わゝ美しき空の様

あゝ麗しき海のたも

つもる下界の塵ふかき

たもと二ツを拂はせて

どくる想情の縹緲と

ゆうべを詩人そどろゆく。

暮れ行く濱の白妙の

眞砂にうつる我影は

色紫の肩やせに

これは此の世の人の子の

憂多かるためし見せ

かれは自然のほゝゑみの

幸の多きを現せば

磯馴れし松の颯々と

三もと二もと風に泣き

奏づる歌の情長く

詩人自然のふどころに

恍と夕を夢に入る。』

本章 夢の謎

うばたまの

くろやみの世の物凄き
こゝは何處ぞ。唯墨を
思ふがまゝに流したる
それにも似しか黒雲の
只點々とゆらぐのみ。

いぶかしや我目は眩れて
いづれあやめど別ち得ぬ。
もどかしや我耳聾いて
いづれひゞきどきくも得ぬ。

あれ恐ろしき雲の形。
悪魔憤怒と見えし間に
ほのかにうつる蒼光の
あやしき色のひまよりは
たゞ物凄き嘆叫の

時に現する光炎は
巨魔の怒りの吐息かや
深紅濃紫の色ふかく
黄金の色のそふさまは。

いかなる天魔如何にして
此の恐ろしき荒れ様ぞ
聖者よ君のみちからは
世に比なうきくましぬ
いで此時よ香染の
淨衣さわかに現れて
變化の荒れどとめてよと
あゝ祈らむに聲の出ぬ。
たゞ息せまる許しませ
何の恨ぞ我にありて

苦惱の今となさしむる。
我れもをのこよひんがしの
日出づる邦の詩人よ。
逃れはせじな語りませ』

蒼き光は紅さして
うすき光のあかるみに
たぼろく／＼に現るゝ
花うるはしき天の苑。

うす紫に薫するは
あれ紫苑かや桔梗かや
眞白に香あふるゝは
これ山百合か白薔薇か
げに美しと見るほどに
あら悲しくもやしくも

たちまち下る雲よりは
破戒の眉のひきつりて
瞋恚の眼怖ろしき
丈にあまりの巨魔人の
色黒々は銅に見る
はて、物憂しき悪形の

つらし悲しは云ひもあえぬ
見る目たちまち蹈みにぢる
花に何等のどがありや
あれあの花もこの露も
たゞたちまちに枯れしほれ
悪魔にくきよ如何なれば
罪なき花に仇ぞする
たゞ如何なれば如何なれば
とがなき露と泣かしむる。

此時よ颯と聲われて

紅璃瑠の光さすと見し

(そは「狭勇」の矢とびて快や巨人の胸にあたり)

石火に眩するまたくま

巨木くたけて地裂けて

巨人の姿消え失せぬ』

紫の

うす衣ゆらぐ靄の色

夢か臚かうるはしき

京は嗟峨野の初宵に

戀にはくるむ乙女かや』

咲き亂れたる花園は

紫衣むらさきいろも紅衣べにいろも

薫じの香霧かきに溶け

蝶よ酔ひしやほろくど

舞子にあやふき羽のさま、

白きは紅べにの花に笑み

赤きは紫むらの華による

げに美しき模様筆。

赤き白きはうましみの

雫したる花の間を

沿うて流るゝいさゝ川

水清うしてさらくくと

若き比丘尼の御手にくる

珠數水晶のすれの如。

さゝやきますは在りし世の

名残うせざる戀の賦か

香かほりのせたる花びらの

三ツ四ツニツ流れゆく』

をにづらふ

乙女の靈や現れし

眉ほゝるみのはじらひの

たも美しう氣高うて

すりくるきぬの音さやか

白衣の女神あゆみとめ

流れにひたす黒髪は

五尺みどりの清らかに

したゝる色のうるはしき。

岸を距てゝ咲きにほふ

焰の色の八重櫻

そよとすゞしき夕風に

ハラ／＼ハラと散りしきて

流れに洗ふ御髪の

ほとりにゆるう舞ひ下る。』

あゝ天上の花の世の

思ひ清らの眺めかな。

されどさくらの花片ひらの

血の色かほる枝々えだには

そと祕めたきし弓ありき

そと祕めたきし矢のありき』

朧なれど月ある宵さ知り給へ。あたゝかき父母知り人の親しきと百里わかれて、われ只一人、心かなしきを兼六の御苑にさすらふ。夏なれば白地浴衣の木影葉影にそみて、折からの模様振り京戀しくてくせん方なきさき思ほゆれば我つとめ、我地位、更らに見る日本日出邦の地位よ。クルーゲルは毒牙に仆れアギナルドは鏡双にさゝれしき知り候へ。

小曲三首

斗牛

黒百合

さ流くれ

草小橋

薄紙の

漂ふや

夕越えて

心づき

ゆく水に

せいらぎの

いざよひぬ

この思ひ

細ければ

花あはれ

秋なれば

塔さやに

くづをれぬ

黒き百合

亂るゝは

糸すゝき

舞姫

したゑるは

萩の露

さはいへど

明けたらば

歌ひめて

其文笛

旅のわれ

長かれと

ひとり見ん

紅の紐

君に似ぬ

わが袖の

あらひづく

鉦の音

みじか夜を

そのえにし

今さらに

すべもなう

いとせめて

舞ひたまへ

さぐりみる

片袖の

京の君

京の君

いざゝらば

消ぬぬまを

銀燭しよくのそば

金屏へつの影

この扇

この鼓

欄くゞる

夕月の

さはりなき

世ならねば

鴨川や

高樓に

芦わけの

戀の舟

膝のうへ

花櫛の

浪花江や

みつづくし

友禪の

舞姫よ

朽つるとて

この罪の

深からぬ

春なれば

あゝ十とせ

むくいんの

とひますな

ゆく末を

今こゝに

文一つ

あげよかし

その面

二つには

櫻木の

うつし見ん

東路に

さらば散る

うたはれて

みをつくし

ゆく年の

た染めさま

くる春や

ゆく年の

つたなきを

わがすぐせ

初夜の鐘

ゆり落す

よし絶ちて

あや糸の

夢にそれ

消えやらぬ

われならぬ

未結ぶ

唄の聲

われのみか

ゆかしやんせ

山家やへ

た染めさま

文苑

夏の蟲

一、

天の河原の水こえて
あふれ落ちたる浪の彩
山も岡邊も野も河も
同じ色なる深緑、

二、

其緑なる青桐の
廣き葉影によりそひて
くるゝ夕の暗のまを
わびてかくゝる夏の蟲

三、

世は今つのるさみだれの

枯

桑

烏婆玉ながす臯月やみ
またゝく星の光だに
地の上遠くたえはてぬ、

四、

濁りて重き潮泡の
こり固まりし地の上に
生れいでたる影の身は
清き光ぞしたはしき、

五、

見よ、今、時はやみながら
青葉の影をもれすきて
明かき光ぞ見ゆるなる

いざ近よりて身にしめん、

六、

したふ心のせはしさに
葉かげをいでゝひとすぢに
庭の面こえ窓こえて
蟲は光にいそぎけり、

七、

我が求むるは此處にぞと
燈のかげによもすがら
もがきつ、こひつ、もたえつゝ、
こがれて死ぬる夏の蟲』

小女吟

秋水生

尾花穂に出て 小原路や
籠には残る 花も無し
夕日冷たく 頬の上に
みたるゝ風は 鬢の毛を

人のみつらき命かな

春なこは 善し 花かけに
霞の月を すかし見て

あこかれ易すの 乙女氣に
しばし常世の 影や見ん

草はかれ行く 秋の野邊
露は消え行く 草のかけ
その野邊に行き 蔭に息む

夏なこは 善し みどりばの

滴こほれて ひびきある
池の汀の 草にねて
武陵の里に 舟やらん

やとる木かけの 老い朽ちて
眠る若草 かれ行けは
今赤裸々の 秋の世の
乙女につらき しぐら哉

たゞあこかれに 命ある
その乙女氣の れはろげを
今日秋風の 兩刃鋭く

破りて往にし つれなさよ

のろひの息を 魔神の
吹きてうつろう この暮を
何！ まごころの 底深う
なさけの水は かれましを
なさけの胸に 身をよせて
やがては秋の 何ならん
亂れて髪は 頬に迷ひ
さて秋はたゞ 人の戀ひしき

愁々 二曲

夜

ゆ

き

月の雫か、しろかねの
小鈴まゐるがす虫のこゑ、

さくや、光もみづみづと
風のひたりにうるほひぬ。

雲のかよひのひとくさを
きゆると見せて、かゝやける
露をはらひし葛の葉の、
うらがれそめし旅ごろも。

庭の古木の白樫は、
いま起きにけむ、五位鶯の
欠伸まじりのねむごゑに
巢にあらそべる羽はたきや。

破れ葉にとごとそごろぎて
秋のゆくへをかたらへば、
そでにあまれる歌聲を
結びかねたる女郎花。

朝

しどろに降れる虫のねも
あかつき近く衰へて、
枕のいたさたもひ寝に
つらや、一夜のゆめごころち。
ねがへりがちに鶏鳴けば、
雨戸をほそく入る風の

板のひまより、いと白き
狭霧のゆれも舞ひ入りて
またひろごりぬ、眼ざむれば
朝こそ来たれ、しどしどに。

手招き

紫雲ゆらぎて葩ちり
名もなき鳥の來り唱ふや
松、杉、柏、茂る眞内を
羅衣つけし影の歩み、

虫といふ虫音も清よに
匂ふ座近かくそこに膝行れば
丹の面輕るく頬づきて
來よこのゑみの手招きや

聲かときげばうすれゆき
黙ゆと見れば聲のして
風の送るか靈言を
「兄弟行かむ靈きあの地へ

萍

思へ俗界に人となる
稻麻竹葦の人の子等
太白の光あやしと見ず
いやが上にも罪かさぬ

花の下には虬はびこり
赤き舌はき何をかまつ
平知の化よと叫ぶ者
鏢甲肌につけすや

上天獨り衷を裁すも
道觸の神たゞ道をし守るも
あらずや父王を殺すためし
寥落の三年を泣く工女

水

燒けよ汝か身の「束縛」の繩
斷てよ「名譽」の汝か念
風は長けなす薄を揺すり
天の鼓の音遙か

煩腦の炎あひ倚りて
我が頬くしく蒼くふるひ
女波男波や八重の潮
苦悶とくこもく至る

(完)

舟行

ふる里より金澤へ

水と空とのみにして
わが船行くも
かへり見すれば
黒き山々
夜見の世の巖と聳え
岸の邊の漁る灯
波にまたよく、

紅芙蓉

薄墨は空を掩ひ

五日月

影ほの白し

船の灯の暗き方へに

鳴くは千鳥か

ア、秋闌けぬ、

行手もわかず

船打つ波の

雨に似るあり
情無けんや
父戀し

母戀し
此道唐の三百里

(完)

和歌

木葉

水

衣

鳴鏑浦にひやくを御座船の二位よさためか小簾のみだる、
露は袖に吉野をくだる白拍子夕日をむねにとくや鼓緒
峯の上に白旗降りぬ高樓は青葉の笛に小夜更くる頃
月によする歌はしひじと白萩のたそがれなればちさき露かな
たくるゝは黄菊白菊さ霧立つ野なりと云はで摘むと微笑む
なぎたるを待ての浦にはたへやらぬ都の人に秋の風吹く
つゝしめば蟲きく夜半を忍ぶだにゆかしく書きしそらることかな
鞍馬山鬮にまざる、御曹司門出祝ふことよむ杉風
秋は去る君のかくれしあどたふとあゝ秋は去る露をうばへと

經机

嵐

月

山の宿今日もひねもす鶯にかよわき胸をいためて泣きぬ。
水の秋をさすらひ侘ぶる我胸は蛇にまかれし小百合の花か。
別れてはやつれ勝ちなるさすらへ人せめて歌よむ才たび給へ。
沈む日は來世を説くかしのめやかに秋逝く野路の露をも染めて。
寂しさはげに野をこめて廣がりぬこむ世の聲と鐘なるひまを。
歩みわび花ふみまどふ落人の靄にぬれたる髪美しき。
ほととぎす我歌秘めて暫時行け汝が泣くところ緑葉枯れむ。
鼓うつ美女が眉みのひそみよりそらろ夕を秋立ち初めぬ。
雨侘びし夕萩散る化粧阪たぞや小鏡抱きて泣くは(曾我虎ケ磨)

潮

歌

我若うて小百合の影に笑みしより夜毎くを月に怨みぬ。
姉の弱き別れの今を袖に泣きて「寒しときくぬ、風ひき召すな」
聖堂や神祕をこさす朝の扉に登る白衣のきぬのすべりよ。
花に背き月に背きて經に耽くる隣の僧よ憂ひの甘才。
破風蹴りて朱鞘に目絞る夜嵐や桃山殿は焔いと凄き、(地震加藤)

漏れ来るは草の篠笛調ひくきを伺ひ寄りぬ京の夜を姫。

繪屏風に銀燭あかう雛酔ひて緋桃散る夜を春雨のふる。(妹の桃宴に招かれて)

片手詩集片手いちごの畑つゞき星仰き見てまだ歌もなき。

琥珀ゆらぐ曉野の花を夢に秘めてその子廿才の春を笑みしか。

紫 清

泉湧く山は語らず湯あがりの瘦せし頬のぞく月の窗より

たに蔦の松にからめる湯の里や都十里をやみし子のゆく

曙のそらに浴衣の高ふしだてぬぐひ冷ゆる温泉の宿

泡となり渦と彫ぬる淵のいろや鮎の鱗のひとしほの香や

淵のをみ孤亭の人のやまひ醫す蟋蟀橋の下むせびかな

瀧かかり織絹錦あきのたに蟋蟀橋にあくた捨つみる

廂破れて亭に人なしませ垣に夕貌のはなあるじ風情よ

山懷たにがはむせぶ神の聲あいたつきを療せよとてか

肌寒さあきのさよなか拍子木のよまわりいそぐ温泉の宿

たきつばにはに訪なふ秋の桐ああ流るよ桐の一つ葉

秋の歌

たばしまにつめたき秋の雨晴れて白雲動く湖水のあたり

露あれば尾花が袖に觸るゝなと月に伏し目の聲の二十よ

わか戀は詩にゆるさじの秘衣ゆふへの夢は白百合に聞きぬ

秋と云ふに一しほ才のたばつかな泣くに涙の花ともこらで

わかれ路の小萩が歌の亂れよりわれから秋をうきものにしつ

月白う風はたすゞしき草むらにこほろぎひとり秋の譜誦する

さらぬだに黙思興なき秋の夜を歌一つたまへ月姫星姫

スパルタの勇士三百眠る野に月影寒く秋風ぞ吹く

檜の實のひとりわびし秋の夜を戀ふらむ人と居らまくほしも

夕がほのふとほのめきてふと消て花の香高う暗を流るゝ

口紅をとかむの指に經とりて誦すにやつらし秋雨の窓

武藏野や月は尾花に眉はきて先づさし出づるはぢらひのけや

蒼穹に桂の宮の宴闌けて高樓朝の靄につまると

瀧つぼに石なげ入れて見つゝあれば水の色悲し秋の夕暮

吾妻はや船にわかれし波の音を能褒野の秋の松風に聞く

白水 斗牛 潮歌 嵐月 や東 晃南 天川 琴川 美島 秋羽 紫水 兒翠 水衣

笛 (即詠)

我やあらぬ笛の音消えし其宵ゆ琴の音たちてこゝに二年
 嗟峨の月を誰もたえんの篠の小笛雲影ゆるう西に流るゝ
 蓮の御園ほの紫の朝あけを笛に舟やる日もあらばとも
 敦盛の榮えの色は笛にあせて秋の須磨寺秋の雨濃き
 笛一竿戦死にし友の形見なり旅宿の秋夜調こひしき
 月はあかし嗟峨野にひとり駒立てゝ横笛吹くは誰が君ぞそも
 さらばいざ尺八の音ふかむ秘の曲秋玲瓏の待宵の月
 曉の笛には駒をとめざりし須磨の夕にたゆたひの袈裟
 月の夜を淋しと云はいかならむ鞍ながら吹く笛のすさびや

俳句

紫草紙

(夏秋混題)

小冠者の夏瘦ぶりや流し差
 夕納涼辻講釋をきゝがてら
 涼しとて橋でわれ呼ぶ團扇哉

紫

雲

斗牛 潮歌 嵐月 や川 琴川 美島 秋水 水衣

眼ざしの火串にすこき獵男哉
 掛香や上に見習ふ宮仕
 髭剃って男涼しくなりにけり
 薫風や春日に古き扇賣
 羅や京のみやびに染みずして
 初秋や若き恨に京を去る
 初萩や老を化粧の司人

新居

水に近く月下の歌や竹廂
 朝寒の息に鏡の曇りかな
 草筵ひいて角力の溜りかな
 高灯籠かむるみどり泣いてゐる
 秋の蟬雨に念佛申すげな
 壁薄う棺に釘打つ夜寒かな
 半纏にかくす夜寒の包みかな
 朝寒を男世帯の厨哉
 川霧や朝を灯す船掃除

文苑

祝曙會創立

新墾の雛菊露の蕾かな
 秋風や障子に歌を書いて去る
 野分やんで暮るゝ城下の空黄なり
 門敲く執袴の衆や萩の月
 浮かれ行く小原の月や染め被衣
 秋雨や馬市くるゝ捨篝
 天長佳辰菊三章
 聖天子上に、白屋の菊薫す
 菊の香やかたむけつくす大瓶子
 下京や菊賣る女うるわしき。

雑吟

のどかなる異人屋敷や丘の上
 春宵や人若うして思わり
 うらくかに金字の光る書棚かな
 一葦帯水知多半島の霞かな
 連翹やたぼる月夜に垣間見ぬ

美嶋

蘆さくた竹ヶ淵や水碧き
 夕風ぎてオゾン匂ふや夏の海
 風薫る書堂の人や眉涼し
 小走りに裏町通り頭巾かな
 灣頭や浪静かにして千鳥の譜
 枯蔦に鶉の巢や岨急なり

四高俳句會吟草

◎蘭燈の巻◎

この月に御舞へ候へ案山子どの
 篆刻の石の埃や蘭の花
 初潮や住の江近き船簞
 回廊に未だ残る燈や鹿の聲
 檻車行く逢阪山の月夜かな
 青衿の露にぬれけり月の舟
 山厨の富や栗飯菊膾
 青きより鬼灯の主定りぬ

紫影

妹の墓に鬼灯熟しけり
 船の灯の虫鳴く草を照しけり
 竹の葉の露ふみこぼす雀哉
 病む母に藥煮る夜や虫の聲
 京の月大雅が裸踊かな
 雁一行網干す上を渡りけり
 種芋を干しひろげたる秋日哉
 閑庭や雨にみの虫晝をなく
 此夕雁立つ浦に船もなし
 句に負けて酒買ひに行く月夜かな
 高檣關取衆の月見哉
 芋買ふや風呂の戻りのたもと錢
 野葡萄や馬曳いて行く陸奥の秋
 雁なくや面影橋の露じめり
 裏畑に芋堀る朝の狭霧哉
 朝風にたけき身振の案山子哉
 落月や京をのがれて露三里

湖月

嵐月

水盤に葡萄葉ちるや朝嵐

萍水

萩の花雨に月戀ふ夜となりぬ

よき程に糸瓜の月や桔櫛

菊膾亡き母の日を念ひけり

雁なくや病む手に重き窓障子

初奉公染まぬ枕や雁の聲

明月やさて色々の露の草

湯上りに新内をきく月夜哉

蓮の葉に踊る露の子露女哉

雁一群廢城の森にかくれけり

五家の花芋の出来秋駒で見る

蒸芋や朝またきなる麓茶屋

何故の眉うき人よ月今宵

萩の戸によき人見たり宵の月

帆柱の月に船歌の小唄かな

ころくと子芋を鼠のひく夜哉

山徑を毬栗よける素足かな

浪奴

美嶋

山梳子

はち郎歌

竹園

蝶羽

潮歌

江の月 梁山伯の酒宴哉
 朝月や大蜘蛛の巢に露光る
 蘭の花 古書堆き書齋かな
 鬼灯に口臙脂忘る遊女哉
 喰ひ残す菊の膾や古戸棚
 虫鳴くや去年埋めたる井戸の跡
 廢園の 槐の花や月さゆる
 笠にかゝる薄の露や濡れ草鞋
 老の齒のこぼれて寂し秋の暮
 朝露や 葡萄の房を掌
 雞僧の椽にならんで月見かな
 朝川や 噓飛ばして芋洗ふ
 名月や 尻居冷き小草山
 うすさむに茶粥の味や菊膾
 蘭の露 簀子つめたき嗽ひ哉

紫 雲

白 水



報 報

卒業證書授與式

七月五日、大學豫科第十四回(本校創立以來第十
 七回)卒業證書授與式は舉行せられぬ。至誠堂裡
 文武朝野の諸士が列席の間にこの盛儀大典は終
 始嚴肅を以て終りぬ、

先文部大臣よりの祝詞は朗讀せられたり。曰は

本大臣は諸子の光榮ある卒業を祝し併せて諸
 子の克く本校教養の趣旨を體し進んで大學に
 入り益々其學識技能を鍊磨し操行を慎み身體
 を健全にし以て國家に諸子に期待する所に副
 はんことを望む。今や皇師連捷威武中外に揚
 る然りと云へども國運の振張に伴ひ國家の前
 途愈々多事に國民の責任益々大なり諸子之を

思ひ一層奮勵する所あるべし。

明治三十八年七月五日

文部大臣 久保田 讓

吉村校長立つて告辭を讀まる、曰はく。

卒業生諸子、本校は、本日茲に諸子の爲めに
 卒業證書授與の式典をあげ以て諸子が正に本
 校所定の課程を修了し本校卒業生に要する所
 の資格を具備することを證明す、是れ實に諸
 子の榮譽にして亦本校の光榮とする所なり而
 して諸子は此の榮譽を擔へると同時に亦愈々
 重大なる責任を負へるものなることを忘るべ
 からず、輒近我國の文明は長足の進歩を爲し
 文に武に年に其面目を改め現今に於て既に歐
 米先進國に恥ぢざるものあり而して文明の愈
 々進歩するに隨て世間百般の事愈々複雑とな
 り精緻なる頭腦と巧妙なる手練とを有する人
 に非れば決して之を處理すること能はず此の

頭腦と手練とは高等なる學術技藝を攻究するにあらざれば之を得ること能はざるなり。諸子は本校に入學以來刻苦勵精の功を積み茲に其の業を卒へ是より進んで大學に入り各々其の志すの學藝を修めんとす其の前途尙ほ茫洋として津涯なきが如し然れども堅實忍耐克く其の志を持し其の難に堪へ孜孜として怠ることなくんば遂に彼岸に達することを得。熟々國家社會の現狀を觀、時勢の推移する所を察するに文學技藝政事經濟其他商工農等何れの方面に於けるも英俊の人才を要重すること蓋し今日より急なるはなかるべし而して諸子は即ち大學卒業の後此要望に應じ以て國家社會に貢獻すべきの人なれば常に留意し今より大に期する所なかるべからず

窃に惟みるに去年以來の日露戰爭に於て 皇軍連戰連捷の結果 皇威四海に溢れ 皇國の

隆運に向ふこと恰も旭日の東天に昇るが如きものあり此の時に際し内は益々向上の精神を養ひ諸般の改善進歩を圖り外は務めて東洋諸國を啓發誘導し以て世界の文明を禱補するは我國民の天職と謂はざるべからず近頃既に支那朝鮮を始めとし印度暹羅等の諸國は我國の文明を欽仰し範を我に資らむと欲する者日に月に多きを加へ我より往て之を移植するもの亦彼より來て之を採擷するもの甚だ少なしとせず現に支那留學生の如き其數四五千の多きに至り尙ほ便船毎に五六十名の渡航者ありと云ふ戰爭未だ終局を告げざるの今日に於て形勢既に斯の如し平和克復の後に至らば其隆盛實に測り知るべからざるものあるべし諸子は幸に此の千載一遇の盛世に生る須らく常に國勢に鑑み奮って其學業を力め其本分を盡し各々國恩に報ゆる所なかるべからざるなり諸子旣

方めよ

明治三十八年七月五日

第四高等學校長 吉村寅太郎

即卒業生總代進み出で謝辭を述べ、曰はく時維明治三十八年七月五日本校は生等の爲めに盛大なる卒業式を舉行せられ貴賓の貴臨を仰ぎ特に文部大臣の祝辭を忝うす生等 怡悅措

を小にするか教育果して天才の發展を沮むか斷じて否なり生等茲に赫々たる國運の伸張に駕して至高の學を究めんと欲す高言壯語は賤しむべしと雖も生等亦甚だ輕んぜざるものなるべからず爾今恩師の訓戒を服膺し驚鈍に鞭ちて、他日國家の材たらしむるを期す一言以て謝辭となすと云爾

明治三十八年七月五日

第四高等學校第十七回卒業生總代

三部醫科 川村 幸一 謹白

の風強き朝、犀川の水清き夕諸先生が詢々として諭し玉ひし垂訓は遂に生等をして今日の光榮を膺はしめ玉ふ鴻恩何ぞ言ふにたへん今や又校長閣下示すに懇篤なる訓辭を以てせられ生等 感激措く所を知らず生等將に星辰校を去りて無盡の希望を抱きて學府の門を訪はんとし皆を上げて社會の大勢を一瞥す肅然として自ら襟を正すものあり今や社會は頻々として氣骨なき學生の品性を見る 教育は果して人

○○○○に目出度く式は終りぬ。
○○○○卒業生諸兄は今や各證書を懷にし煦々として尾山城下を去りぬ。
○○○○超百の秀才は洋々たる前途の希望に微笑みつゝ高く光彩燦たる桂冠を戴いて更に最高の學府に登り行けり。

第十八回卒業生氏名

第一部 英法科

- 荒木 彦弼 富山縣平民 藤岡 兵一 石川縣士族
- 栗本 快一 福井縣士族 岡田 信 滋賀縣平民
- 岩本 秀雄 石川縣士族 上杉 復男 石川縣士族
- 青山 暢性 京都府平民 石黒 文吉 石川縣平民
- 加藤榮一郎 愛知縣平民 増谷 平八 石川縣平民
- 菊治 信次 京都府平民 三木 寛治 德島縣平民
- 阿河 孝平 香川縣平民 池田 一郎 埼玉縣平民
- 水野 重功 山形縣士族 橋本 節治 兵庫縣平民
- 大藪虎之助 京都府平民 江川 義雄 高知縣士族
- 木村増太郎 石川縣平民 増淵宗一郎 栃木縣平民
- 田口 八郎 群馬縣士族 野間庄治郎 滋賀縣平民
- 森 悟一 熊本縣平民 武藤 七郎 群馬縣平民
- 大竹 勇 福嶋縣平民 喜多村 清 三重縣士族
- 栗林 豊作 青森縣平民 廣瀬 嘉一 石川縣士族
- 森 薰 東京府士族 佐藤豊次郎 福島縣平民
- 金澤 熊男 三重縣平民 高 英治郎 東京府平民
- 内田 節三 埼玉縣平民 山本 晋 秋田縣平民
- 栗本瀬兵衛 東京府平民 久保田吉律 香川縣平民
- 鈴木直次郎 愛知縣平民

第一部 獨法科

- 得能 佳吉 富山縣平民 内藤純三郎 富山縣平民
- 西本 道圓 廣島縣平民 後藤多喜藏 福岡縣士族
- 野田敬之助 京都府平民 矢口 長三 栃木縣平民
- 今井 晨一 岐阜縣平民 本間 嘉舖 山口縣平民
- 中野 並助 群馬縣平民 山本嘉三郎 奈良縣平民
- 山内 秀一 石川縣士族 白井鐵太郎 三重縣平民
- 山口 龍作 石川縣平民 堀尾 成章 長野縣士族
- 山西 終朔 福井縣平民 吉田 孫作 東京府士族
- 小島 周一 埼玉縣平民 金田彦三郎 大阪府平民
- 淺野 良 茨城縣平民 服部太一郎 富山縣士族
- 丹羽 可一 愛知縣平民 生水 己松 石川縣平民

小川 堅二 石川縣士族

第一部 文科

- 哲増田 維茂 愛媛縣士族 哲竹島 寛 富山縣平民
- 哲織田 祐蒨 福井縣平民 西川 五郎 愛知縣士族
- 南日 重治 富山縣平民 哲猪狩 蕃 北海道士族
- 伊藤 文雄 山形縣士族 大谷 勝眞 京都府華族
- 松本勘太郎 東京府平民 三矢 禪英 山形縣平民
- 山崎 麓 兵庫縣士族 哲龍山 義亮 富山縣平民
- 哲華房 敏磨 滋賀縣平民 哲堀田 相爾 東京府平民
- 哲中井宗太郎 京都府平民 哲富山 智海 三重縣平民
- 川崎 清男 富山縣平民 丸山 清作 新潟縣平民
- 電清水與七郎 富山縣平民 船中川 駿 愛知縣士族
- 土宮長 平作 富山縣平民 採高橋 二郎 山形縣士族
- 電伊地知光朗 京都府士族 土原 恭藏 福島縣士族
- 土前田 與一 鳥取縣平民 應齋藤 飾 石川縣平民
- 機伊香 志朗 青森縣平民 建後藤 慶二 東京府平民
- 機阪本 鷹雄 高知縣士族 機村山 威士 鳥取縣士族
- 留吉 東京府平民 電山田 鉢一 愛知縣平民
- 電井阪 勝三 三重縣平民 船民野 雄平 群馬縣士族
- 土菅原 喜市 富山縣平民 機木谷安二郎 大阪府平民
- 應藤崎勝三郎 千葉縣平民 採石田 濟 京都府平民
- 電温井 亮吉 石川縣平民 土中村 廉次 富山縣平民
- 土高宮 豊作 福井縣士族 電横山 芳松 石川縣士族
- 機福田 門彌 兵庫縣平民 機野村 幸郎 茨城縣士族
- 機岡本 泰 千葉縣平民 造藤田 修 福井縣士族
- 採石井 信 新潟縣平民 採柿田 佳實 石川縣士族
- 造黒田 乙吉 大阪府平民 土芥川 均一 山梨縣士族
- 應大窪 登一 東京府士族 土見間芳三郎 三重縣平民
- 應重田 德三 神奈川縣 船安部 良吉 岐阜縣平民
- 應加藤 完治 東京府士族 應岡 信吉 山梨縣平民
- 藥與野 政藏 大阪府平民 物森川 昌一 和歌山縣

第二部 工科

第一部 獨文科

第二部 理科

物大橋 庄一 岐阜縣平民 物次木 萬 靜岡縣平民
 動倉賀 野晋 福井縣士族 地小林儀一郎 新潟縣平民

第二部 農科

農齋藤 正良 新潟縣士族 林鈴木 賢司 新潟縣士族
 農佐藤 逸策 新潟縣平民 農化入江彌四郎 栃木縣平民
 農池田泰治郎 岡山縣平民 林五十嵐平二 新潟縣士族
 農清水 勝雄 石川縣士族 林森 三郎 岐阜縣平民
 農木田芳三郎 大阪府平民 林神保 信一 石川縣平民

第三部 醫科

川村 幸一 鳥取縣平民 松本 信一 福嶋縣士族
 野口 理朝 山梨縣平民 藤島 兼道 新潟縣平民
 飯田 庄八 新潟縣平民 安藤 義三 愛知縣平民
 井上 胤良 山梨縣平民 櫻井 正矩 富山縣平民
 下平 尙 北海道平民 八田善之進 福井縣平民
 宮坂 芳香 長野縣平民 丸山 綠 石川縣平民
 橋本 正員 栃木縣平民 竹下 謙治 福井縣平民
 横田 彌吉 茨城縣平民 久保田省一郎 東京府平民

土門晋次郎 北海道平民 谷澤 雅一 茨城縣平民
 笹岡 恭平 新潟縣士族 高久 忠 福嶋縣士族
 内田 樸 東京府平民 山本彌三郎 和歌山縣
 藤井正太郎 東京府平民 木曾 淨專 長野縣平民
 松井 太郎 愛知縣士族 早川憲次郎 岐阜縣平民

送卒業生諸君

卒業生諸君
 僕等こゝに諸君と驪歌を奏す。岐に臨み笈を負ひ行々重ねて遠く行く諸君を見、轉た繼繼の情に堪へざるものあり。顧みれば諸君が北辰の下に出郷關を吟じつゝ來りしは、枯柳蕭疎凄々たる蛩語吟懷を喚ぶ蘭秋の夕なりき。而して今や螢雪三年の功を積み、綠樹重陰四隣を蓋ふ巨、金城々々こゝに僕等と分手し僕等にそゝる斷腸の思を遺さんどす。
 卒業生諸君

回顧すれば僕等亦幸にして本校に入りしより爾來數十ヶ月落花落葉の間、諸君の薰陶により諸君の鞭撻により以て深く感銘する所ありしは、實に諸君等が痴愚の輩を教ふるに吝ならざりし厚志によるとせざるべからず。噫今にしてこれを思ふ、僕等慚愧の念切なるものあり。諸君が善導や至盡なるものありしと雖、或は恐る僕等悉くこれを捧持し得たりや否やを。

卒業生諸君

僕等こゝに陽關を唱ふ。徒らに哀別離苦に悲しむは由來男兒の潔とせざる所、迫遯として諸君の前途を思ふ時、僕等豈兒女の涙をのみ灑がんや。夫れ諸君が趣く所は最高なる學府なり、神奧なる學を修むべき樂園なり、諸君が渴仰する自由の空氣は横溢せり、諸君が活動すべき舞臺は備はれり。諸君が旅裝匆匆として金城々々下を去られむとする蓋し故なしとせず、乃ち僕等

亦絆を煙霞の外に開き以て諸君の行を壯にす。

卒業生諸君

然れとも諸君、諸君が行かんとする所は皆これ紅塵萬丈の巷、誘惑は間斷なく諸君の身邊を襲ふ恐るべき地なり。僕等諸君の堅忍不拔の意氣に負ふ所大なりと雖亦私に憂慮措く能はざるものあり。語に曰はずや、胡馬北風に嘶き越鳥南枝に巢ふと、若し諸君にして氣稍倦みたりとせば、希くば北海波あらし北辰の下孜々として勉勵する愛弟等を思へ、而して諸君が愛弟等を保育せらるゝ諸先生の俛を忍べ、然らば諸君の意氣自ら昂るものあらむ。

卒業生諸君

僕等謹で諸君を送る幸に自重せよ。後會期遙なりと雖、諸君と一堂の下再談笑する折もあらんか。今や帝國の地位は萬國に冠たり、願くば諸君不撓不屈以て益々國威の發揚を努められん

ことを。僕等日夜諸君の健在を祈る。(水衣)

迎新來諸君

風紅蕉に噪き雨紫菊に匂ひ思凄然に際し今新に北辰校裡稜々たる志氣自ら外に溢るる諸君等二百の健兒と相與に語るを得。あゝ諸君の意何ぞ夫れ壯なる、諸君の志何ぞ夫れ大なる。僕等そぞろに微笑を禁ずる能はざるものあり。乃ちここに諸君と少しく計る所あらんとす、願くば諸君、僕等が老婆心を憐み暫く僕等の蕪辭に聞くらんことを。

思ふに諸君が始めて金城々下に來りし時先づ諸君の心中に浮びたるものは愛慕措く能はざる諸君の郷里と而して他日錦衣を纏ひ其郷里の山川に見えんどの意氣なりしならむ。然れども日を経るとともに俄然として諸君の意氣を挫きしものあらむ、何ぞや、天候の險惡これ也。

由來天候が人の心身を左右するは諸君が夙に熟知せらるる所、而して諸君は不幸此地に三年の星霜を経る可からず。於是乎、諸君の意氣次第に消沈し遂には自ら救ふ能はざるに至る可けん也。

親愛なる諸君、僕等の言に惑ふ勿れ。夫れ天候の險惡は偶々諸君の心身を鍛ふべき器にあらざるなきか、天候險惡の爲學ぶを得ずとなすは畢竟薄志弱行の輩のみ。僕等不幸にして未だ能く學び能く身を修むる者のひたすら天候險惡を訴へこれが爲殆ど身を處するに苦しむと云ふあるを聞かず。況んや月を経るに従ひ諸君が此天候に對して抱く不快の念は漸次消滅するに於てをや、願くば諸君、天候險惡の故を以て自ら棄つる事なかれ。要は節制にあるのみ。

親愛なる諸君、諸君此地に來りし後數日、諸君の口より洩れし歡聲を聞きし小童は云へり、

諸君は日々學課の無趣味なるが爲とこれに逐はれつゝあるが爲、氣息喘焉たるものありと。諸君よ僕等これに付て多くを云はず、否云はざるに非ず云ひ能はざる也。

抑諸君が小學を終へて中學に入りし時いかなる感想をか喚びたる、噫當時の諸君の心中は果して如何なりしか。山頂に到らむとするに平地の歩調を以てせむは偶々以て人の嗤笑とならむ。蹂躪せよ、唯蹂躪せよ、然らば諸君の行路は自ら開かむ。

願くば諸君、勇往邁進、絶えず諸君等の前面に輝きつゝある理想の光明を目睹し倦むことなく自ら常に努むるあらむことを。謹で諸君を迎ふ。(水衣)

天長節祝賀會

本校職員と生徒との發起に依りてなれる此會

は、天長の當夜、秋季大運動會舉行後、校庭に於て開かれぬ。

寒雲夕陽を蔽ひ、溟濛たる氣四隣を包む頃。茲に集り來れる幾百の黑影の團々は、夕闇に輝き渡る幾多の篝火の下に在り。この黑影果して何する者ぞ、怪しむ勿れ。これ恭しく謹んで聖帝の喜辰瑞節を賀し、寶祚無疆、大演無極を祈らむとする熱切なる赤子蒼生にこそ。即ち校長閣下は嚴然として高壇上に立ち徐ろに菊花節の祝辭を述べ給へり。曰はく。

「今日茲に吾等大日本帝國臣民として最も尊敬すべき又仰慕すべきわが允文允武なる 天皇陛下の佳節に際し、吾人は、本年の天長節が各年のと相異り特に其祝賀の感情に於て頗る著しきものあるを感知せむ。

即ち敵國終に屈し、媾和條約は締結せられ、戦局茲に終を告げ今や我帝國は、光榮ある戦

勝國てふ高名を六合八紘に轟かすに至り、我
 天皇陛下の稜威は、遠く普天の下に及び、聖
 徳の餘澤は深く卒土の濱に迄も敷かれ、四海
 波平靜に、萬民舉つて天下泰平を謳歌し、欣
 喜抃舞、恭しく南山の壽を献するの日に會せ
 り。本校も茲に諸子の手によりて盛大なる運
 動會を開くを得ついでこの夜此の所に諸子と
 共に聖堯の壽を賀する爲めこの祝賀會を開け
 り。今日此のありがたき聖代に生を享け、平和
 なる天地に生を送るを得るは、皆聖天子上に
 御座し、恰く恩澤を垂れ給ふによる。諸子、
 これを心銘して日夜刻苦勵し以て國恩に報
 ひ、高德に酬ゆる所あるを期せよ。適々この
 佳節に遇ひ、感ずる所を述べて以て祝詞に代
 ふ」

所謂立食の饗應にあづかる間に、仕掛花火あり
 紅焰天を焦し。火粉飛んで燦爛宛然火の雨を降
 らすが如し。皆賞讃の聲をあげ、拍手喝采す。
 音楽は囀唳としてひびき渡りぬ。かくする間に
 大方折詰も平げつくせりと見えて篝火をまわり
 に廣く圓陣を作り居たる一群の黒團は、ちぎれ
 ぐに一團を構成し、場の真中に躍り出で、音
 樂隊の愉快なる音調につれて奇妙奇手れつなる
 舞蹈(?)と洒落れこむもあり。或は其の周圍に
 ありてたゞ聲をはりあげて校歌寮歌などを唱ふ
 ものあり。嬉々として談笑するもあり。あちら
 に飛び、こちらに跳ね、ついには舞蹈の渦中に
 突進するものもあり。洵に無邪氣極まる太古に
 見るが如き光景なりき。やがて、ある一團の校長
 先生に迫ると見る間に尊體は高く宙に飛びぬ、
 則ちこれ校長先生がわれらの胴上げをうけ給へ
 るなりき。かくする中に時刻も大分移り六時近
 布す。

祝辭終りて「君ケ代」の合唱あり。次に折詰を配

くになりぬれば、さらばと校長先生の發聲にて
 天皇陛下萬歲、皇后陛下萬歲、第四高等學校
 萬歲
 を三唱し、茲にめでたく本日の祝賀會も終りを
 告げぬ (紫子)

漫語

○曩に冷語君が誌上に於て意氣沈滞せる北辰校
 裡半千の健兒を嘲笑するや吾人亦大に彼と見を
 同うせしと雖只管時機を須つべきを云ひき、爾
 かも依然として寥々たる北辰會雜誌を見ては吾
 人豈一語なからんや、唯笑ふ勿れ吾人の憤慨兒
 戯に類すと。

○自然や人世や歌ふべきもの論すべきものは既
 に涸渴し盡し其餘す所なきを以て爾く吾人は筆
 を捨つべしと云ふか、見よ文藝は日に月に進み
 行くに非ずや、然るに我雜誌のみ是に反せんと

する傾向を示しつゝあるは何が故ぞ、嘲る勿れ
 吾人は徒らに憤慨するものに非ず。

○嘗て聞く我れ一たび論文を草するや先輩の人
 罵つて生意氣とせり、又曰く我れ一たび序情詩
 をものするや同窓の友我が品性を疑へり、更に
 曰く我れ筆を把る故を以て人呼んで才子とし推
 して學に不忠なる者とせり、則爾來我筆を折り
 再ひ文藝の事を云はざるや茲に數年と。

○もとより吾人はかの奇を銜ひ語を壯にし衆目
 を欺き名聲を擅にせんとする如き輩に至ては全
 然云ふべき所を知らずと雖苟も自己の信念を吐
 露し赤誠を發表するに於て何すれぞ何の容喙を
 須たんや、天地自然の美、人情の機微を謳歌す
 るに當り何すれぞ他の趣味意向を覗ふ必要あら
 んや。

○思ふに窘迫者は彼等に強ふるに自己の意志を
 まげよと云ふに非ざるなきか、自己の感情を欺

き他の趣味に一致せよと訓ふるものに非ざるなきか、若し果して然りとせば人は吾人に自殺を薦むる者也。

◎顧て吾人は社會の迫害の爲斷然文壇より退き舊廬を捨て、晦跡餘生を風塵の外に送る知名の士數多あるを聞き而して社會は嘲笑譏誣彼等に被らずに無腸漢を以てせむとするを耳にしては蓋し遊子が社會を呪咀する聲を全然否定すること能はざる也。

◎菓子嘗て其友に忠告の辭を呈するや其文章家たる故を以て徒らに筆をまわすものとし冷笑省みられざりしを聞けり、此一例抑如何に文學が或一部の社會より擯斥せられつゝあるを見るに足らんか。若し夫半千の健兒にして激する所一に茲に在りて筆を採らずとせば吾人些諒とするあらむもしかもこは將に數年後に於て遭遇すべき所、かの一小雜誌なるか故に將た懸賞なきが

故に關せざる者あらは願くは卿等少しく反省せよ、吾人と雖三拜九拜而る後始て卿等の玉稿を得て雀躍する商估の模倣を潔とせざる也。

◎誰か出すべしと人の巾着を頼るが如きは唯これを腰拔輩に見る、高等教育を受けつゝある吾人にとりては斷じて排すべき也。

◎云はんと欲する者は十分に之を云はしめよ、唯吾人の胸底にひそむ信念が否認する者は云はざらんとするよりは先づ思はざるに若かず。

◎曩に綠灣子がグロウンオブスチュデントを見るや吾人滿腔の同情を以て讀みたりき、爾もしかく大膽にしかく露骨なるこの文あるに係らずこの洋語を邦語とするを憚りし子の衷情を察したる時吾人更に暗涙に咽びき。而るに今や予此一篇を遺し遂に本校を去らざる可からざるに至る、吾人云ふ所を知らず、願くば健在なれ、而

して懊惱は絶えず人生に供ふものなるを思へ。

◎趣味趣味！懊惱をして輕からしめむには必ずや趣味を以てせざる可からず。恐ろしと思はゞ黄昏野路を辿る時案山子を見てすら尙且魔とも

思はるゝにあらずや、衣服の上の塵一だに重しとせば千鈞を背に負ふより更に苦痛を感ずるに非ずや、多少の束縛の如きは束縛なしと斷定するに若かず、器械の如しと自ら思ふよりは書を器械視するの賢なるに若かず。

綠灣子尙苦笑をとむる能はざるか。

◎大に動かんとする者は大に靜也、衆俗其靜なるを見て直に呼んで愚とす、焉んぞ知らむ一たび起たば木の葉を捲く疾風の如きを。

◎過不及なきを希ふは腐儒の教也、古來大人物の經歷を見るに其愚なる時は痴人よりも甚だしく其極端なる時は恰も狂人の如し、爾かも其間

悠々自ら信念をして更に固うせしむ。

愚なる時や狂なる時を以て直に其人全般の品性を云爲するに至ては吾人が則るべきは凡人なりと教ふるに若かざる也。

◎矛盾や撞着や多くこれを世の所謂冷靜なる人に見る、他なし偶其一事に遭遇するや必ず自己の利害得失より判斷すれば也。而して義と云ひ仁と稱するは畢竟圓滿なる感情の權化に非ざるなきか、吾人はかの情の人たるを以て與に語るに足らずと云ふ語を聞く每一種の怕を感ず。

◎阿諛よ爾は竟に人の世より去る能はざるか、爾は人の世を賊せむ爲にこゝに降りしか。

◎若し爾にして到底人の世と絶つ能はざれば願くば自癡起つべからざる老人と婦女子とに行け、霸氣滿々たる青年間には爾の如きは斷じて入る可からず。

○由來青年は修養の時代也、爾の卑劣なる、巧に人の弱点に乗じ修養の途上にある彼等をして其品性を情落せしむること事言語に絶す、願くば信念と赤誠とを吐露するに當り少しく遠慮せよ。

○傲慢よ爾は永遠に人の世を見捨つる能はざるか、爾は小憤の爲自ら死地に陥れよとの使命を帯びて人の心を覗はむとするか。

○爾戀々として人の世を離るゝ可からざりせば唯一歩阿諛の方へ進め、由來青年は受働の時也、先輩の前に膝を屈するを不名譽とするが如きに至ては爾の害毒蓋し看過し難きものあるに非ずや。

○人阿諛に非ずんば傲慢に居るものとせば吾人將に孰れをこらむとする。凡そ食を以て能事終れりとせば須く阿諛を撰ぶべし。何となれば人

稱せられて喜ばざる者少なければ也。然れどもかの傲慢に至ては竟に豎子をして誤らしめ一生を闇黒裡に葬らしめずんば止まざらむとす。

○噫阿諛と謙遜、傲慢と自信、何ぞ相似る事の酷しく爾かも相距る事の遠き、要するに反省良心に耻ぢざれば可ならむか。

○露骨なる者世に容れられず詐僞に妙を得たるもの將に大道を濶歩するはこれ社會の狀態也。宣なる哉虚禮假裝瞞着の處世術とやらに必須物視せらるゝ事や。

○露骨果して笑ふべきか、たとふれば玲瓏なる水晶の如し、虚飾果して則るべきか、たとふれば艶麗なる毒茸の如し。一たび日光を受くるや一は益美に一は容易に溶けむとす。

○小細工的詐僞はこれを放擲せよ、苟も詐僞を以て世に立たむには進んで大詐僞漢となれ、洪秀

全が基督を摸擬せんとして千載の誹を招きたる如きは蓋し未だし論するに足らず。

○爾かも世に洪秀全の半ばにすら及ぶ能はず齷齪として一時の彌縫策に腦漿を絞る者多きは何の故ぞ。

○露骨とは天真爛漫自から欺かざるを云ふ、天真爛漫はこれ大偉人の片影に非ずや。

○獨り怪しむ當年の小説新体詩の風俗を壞る所以を以て一偶に斥けられ枕草紙源氏物語の類依然として尙讚せらるゝを、蓋し前者は餘りに露骨にして後者の婉曲なるが爲か將た今文の卑むべくして古文の尊ぶべきが故に然るか。

○前號歌壇を見る、一として吾人の意を得たるものなし、唯里人君の

笙笛の調べに香を焚きなやむちひさき御手に泣かれぬるかなの一首稍神韻を傳ふ。

○征露君の

舞殿は社は南の扉あけ能の衣ほす葉櫻の風
葉櫻の風それ如何、この一句一首の生命なるべしと雖亦之れを損ふ事大也、俳句とせば兎に角和歌としては如何にや、さはれ尙前號歌壇中の佳作たるを失はず。

瀬にせがれ行きがわづらふ若鮎の水上戀ふる其思かや(瀬平)
ちきり置し集の頁にこほるきの鳴く音も牙えて人のきまさぬ(里人)
茜さす御旗の下に立ちたまふ將軍の馬あわかみ出す(征露)

○瀬平君のは可愛しと雖下句の結尾餘りに強く云ひすぎたる爲眞摯をして滑稽に近からしめ、里人君のは哀れなれど集の頁に蟋蟀の鳴く音するは燈を携へて野に出でゝ集を繙くとするも殆どあり得べからざる圖也、征露君のは勇ましけれど馬のあわかみ出すが爲に茜さす御旗のもとに立たせらるゝ將軍の風采をして一層擧るを思はしめざるに非ずや。

御姓にわが名連れしをいふ書人もや見る袖ふせにけり(里人)
衣洗ふ二の腕すいし友禪の禪三尺柳よき川(征露)

一は深窓の少女が轉輾の情緒を表はし一は柳影かゝる水の流に無心の少女が衣洗ふを畫く、一は動き一は静也。

さらば君別れはつらしこの夕鐘の音遠き人の行方(瀨平)
語はで只このまゝに消えなむ告げまくほしき人はあれども(里人)

御強い事哉御弱い事哉と申すべし。

瀨平君曩に他より詩人に特有なる熱情を有せずと評せらるゝや、今乃奮て熱情を装はんとす、

こは吾人大に君の爲取らざる所、由來君の歌は自然に對する深き同情より出でたるに評者の言を誤て同情を人にもとむ、宜なる哉鐘の音遠き人の行方の何ぞ惘然として捕捉し難き。

樂堂に樂の音絶て一しきり牡丹くづる春の雨かな
ひいなにさ桃の下道桃の枝さきを折りぬ春の夜の月

前々號に於ける君の歌は實にかゝる者にあらざる程。

るなかりしか、前號君の歌合はせて六首一として首肯せしむるものあるなし、評者の君は時に無責任也、徒らに人の言を以てして其所信をひるがへす勿れ、吾人君の爲に惜む。

里人君のは調は到れるも想は凡也。

歌ならで友に返し己が畫に花ふりかけぬ春の夜の月
これ征露君の九首中まさに白眉とすべきもの。

み手の額にふれまし折の思をば傳へむものか琴の緒より
これ里人君が駄作、乳臭近づく可からず。

花籠の花の七色香のゆらぎばらの白きは燭にまげゆき
これ瀨平君が獨特の調、獨特の想也。

君來ませ我住む島は桃によし藤月よし春霞むころ(征露)
有難う。

契りにし人の心は唯暫し流れにうつる飛鳥の影(里人)
今更の事は。

涙かくれ「松が見えますほのく」鰹釣る舟今かへりくる
(瀨平)
なる程。

○要するに前々號の歌壇に於て大に望を囑したる吾人は前號に於て、より大に失望せざるを得ざりたり。

○枯桑君の詩由來瀟洒を以て著はる。前號「回祿の賦」は蓋し君が得意とする所ならむか、其着眼常に街奇を事とする者や或は眞の熱情なくして是を字句に借る如き詩人とは大に異なるあり。眞摯にして同情に富める恰も醉茗先生の詩を誦する如し、うらむらくば君が詩時に先生の幽玄神奥の点を缺くるを以て人をしてそらるに肺腑をるぐる思あらざらしむる事を、但し吾人はかの朦朧体をど君にすゝむるものに非ず

○さばれ

火をふくむ禰鳥軒を
羽がきして飛ぶと見るまに
屋根かげにのこ現はれし
紅ながら女人のれもて

かみしめし唇わつて
るみ笑ふ舌は緋牡丹
の如きは思ふに君に非ずんば歌ふ能はざる所ならむ。

其第五節に至ては「紅蓮の焰かぐやきて、屋根の上高く移り行く、煙たなびく大空」もやがて「息ふさかへし、光和ぎ雲とけて、命にかへる去年の草」はあれども家々は跡無う満目寂寥たる光景を畫きたるの、君が獨特の妙所と同情とは遺憾なく發揮せられたりと云ふべし

小障子映えて日は斜め
千餉の鞆なきわびて
粟のこぼるゝ敷居きは
子猫眠りし椽いづこ
の如き或は

冬の夜さむに櫓くべて
栗のあぶるゝ間遠さに
まはらぬ舌に鬼が島
まごお語りの爐はいづこ

の如き慘憺の景直に人に迫り來て殆ど再誦するに忍びざらしむ。

要するに枯桑君の詩美しき同情緻密なる觀察を有せりと雖深刻なる煩悶無し

君

知る人ぞ知る君は清廉高節の士也、嘗て中學校にありし頃、斗筭の輩と交ると云ふ故を以て累は君に及び、先輩は君の器才の邪道に誘かれむを憂慮して誠むる所ありしがこえて三日、蓬窓月暗き夕君が家を訪れて相語る事數時今や將に五更に垂々としたる時今宵の如き靜かなる夜なりき、折しも雁の九天に叫ぶを聞いて我等をや尋ぬらむと四つの袖は霑ひたるを君よ今も覺わつらむ。

君は感化善導を以て其主義となしたりき。

君

然るに頃者傳ふる者あり曰く君既に此主義を放棄し白眼看他又曩日の君に非ずと。

噫敬愛なる君よ、君は竟に衆俗の濟度し難きに呆れたるか、將た彼等と交る事の君が名譽を毀損する如きを感じたるか、將た君が信念の彼の惡徳に害せらるゝを恐れたるか。

僕もとより之を詳にせずと雖、思ふに孰れにもあらざるべし。僕かくと聞きたる時黯然たらざるを得ざりき。

君

君は學生也、僕も學生也、我等は學生也。僕云ふ所を知らず願くば藏する所更に深く廣く而して一たび蹶起せば須く天地を震駭せしめよ、僕君に望む事頗ぶる大也。

蕭々たる西風野菊をわたり蛩聲轉哀切、窓をたせば楓葉霜を含んで滿山紅也。庭前の老松無

此夜君は、よし疑の眼は毒矢の如く身邊を射んも批難の聲は管のごと身をうたむも其主義を捨てずと誓へり。僕を以るに君が意氣を壯したりき。

いかに大なる徳ある先輩の士ありと雖後進の者と疎通の道講せられずば竟に感化を云爲するは無用の囁語のみ、修養の何たるを教へずして罰するは酷も亦甚しからずやと爾來君は更に廣く好んで所謂鄙人と交を結び淳々乎として教ふる所ありき。獨り廉潔を保たんは畢竟易々たる事のみ進で自ら得たる智と徳とを以て人を動かさんとするに至ては實に大なる信念を要す。爾かも惡友と類を同らすと誣ひられ、爲に得たる品行点丁なる荆冠を戴きながら欣然として其主義に進む君を見たりしとき僕其意氣を壯とし

君

絃の琴を弾じ、花にわかれたる胡蝶籬を去りやらず、擔打つ雨の日毎夜毎天地は次第にさひれゆかむとす。

あゝ凄凉たるかな暮秋の天地、物みな聲をひそめ水流ひとり四隣の寂寞を破る。仰げば空碧を翔る鴻雁愁を傳へ濃々たる露華衣を霑す。

秋の天地は露骨也、萬象を解決すべき秘鑰は將に此ときに受くべし、吾人豈思ふ所なからんや。

(水の人)

在寮諸君に呈する書

降りみ降らすみ、金澤の天候は甚だ曖昧に御座候へ共、天下は既に晩秋と相成り候。今朝櫻橋々上初霜を踏み申し候處、犀川の曉風一しは身にしみて武夫の心膽爲めに慄き申し候。されど幸福なる諸君は、時習寮内和氣霽々の中、更に秋の何たるを御了知無之事と存じ候。

「なくてぞ人は戀しかりけり」とやら、左程まで、有難しとも感ぜざりし時習寮も、一たび去つて石と冷たき人情に弄ばるゝや、あゝ温き時習寮は眼前にちらつき申し候。茶話會團欒、湯飲場の快談、雪を蹴散して、星を戴いて無聲堂裡に聲あらしめた時、ラッケットを翳して日没を見送つて、夕月を迎へた時、あゝ夢に候。夢に候、時習寮と名づくる花の上に結んだ春の一睡に御座候。

さるにても、美しき希望に憧がれて郷關を出で、前途の光明の外何等の限なき諸君の眼には此の北辰校、此の金澤市はいかに映じ申し候哉。驚き給ふ勿れ、吾等の云ふ處を靜かに聞き給ふべし、耳を掩ひて眼を潰して聞き給ふべし。金澤は暗黒の市なり、翫つて一たび諸君を思ふ、あゝ、眞白き諸君もやがては眞黒き暗に化せむとするに。吾等は只だ愁嘆の外無之候、

日を過しつゝあるに候はず哉。げに諸君は四面楚歌の中にある者。然れども諸君には牢固の確信と、不拔の意志も候ふべし。猛進して暗黒を打破し給へ。北辰校裡精神的革命の旗幟は、その色、諸君にありて鮮明たらむ。聊か感を書いて寮生諸君に呈し申し候（舊寮生みどり）

六百の諸兄に呈する書

字引と角力を取る。之れ人生の意義に御座候哉。六百の頭顱を數ふればその數六百なり、その手足各々千二百なり、一人拾五貫と見積ればその總量實に九千貫に達す。六百の髑髏、二千四百の手足は優に一の珍奇なる博物館を構成するを得べく、九千貫の肉塊は少くとも金澤市民三日間の副食物たるに余ありと存候。然れども吾が校六百の生徒、今將た何を爲しつゝありや。問

諸君、吾が北辰校は北陸の重鎮に御座候。校規の肅や、校風の美や、正に北辰も光を争ふべく候。されど世に金剛石のみ落ちてゐる者に御座なく候。吾等は只だ瓦片の比較的多きを嘆くのみ。御座候。遮莫、吾等は老いたり。吾等が云ふ所は老馬の嘆のみ。然れども今や、生氣潑々として希望に燃え燃ゆる諸君を迎ふるに及んで、衰へ果てたる吾等が鬢の毛も秋風に颯々として戦ぐ心仕り候。水銀の如く冷ひきつたる吾等が血潮も湧き立つが如き音微かに聞え申し候。せめては老後の思ひ出にもう一度暗黒の中に奮闘を試み度と存候。昇天の概ある諸君。共に手を携へて吾等の主義に向つて猛進し給はずや。白髪頭を地に付けての吾等が願は、諸君を男と見立て、の所以に御座候、

時習寮を出づる一步。世は秋風眞盛りに御座候、腐敗分子は諸君と棟を並べて、帆を並べて其のふを止めよ、一個糞壺尙ほ六百以上の蛆虫を生ずるにあらずや。青ざめたる諸君の肩に、瘦せ果てたる諸君の腕に、此偉大なる國家はいかにしてその重任を托するを得べきや。再思三考靜かに反省し給ふべし。

固より讀書可也、沈思可也、然れども讀書のみ、沈思のみは斷じて不可也。清き眞水も止まりて流れずば、遂に子子の生せむは之れ眞理に候。眞理に偽なし、讀書はやがて耽讀と變じ、沈思はやがて墮落と化せずんば止まざる也。

「小人閑居して不善をなす」と言や簡にして要を得たり。諸君は此の格言の理解者にして兼ねて此れが實行者に候はずや。活動は青年の要義也。活動なき青年は底なき土瓶の如し。諸君は底なき土瓶に水を盛りて果して何の要にか供せむとする。咄々。

あふ、衰へ果てたり六百の人、北辰校裡今や冷として死灰の如し。人ありて聲なく、口ありて響なし。只だ見る者は幽霊の如き鉛色の顔色と、亡者の如き憔悴たる形骸とのみ。狂句あり曰。

幽霊の正躰見たり四高生、

何が故に、何の必要ありて諸君はかくの如く因循的、退嬰の方針をのみ事とする。青年は老人にあらず、故に老人ふるは断じて不可也。諸君の意氣てふ者今何處に存するや、諸君の人格てふ者の價をも如何。此れでも嘗てはその人ありと知られたる北辰校にあらずや。

男子の意氣は正に天を突かざるべからず、千仞の巨巖を真二つに劈ぎ、萬重の峻嶽を足先に蹴飛す、之れ男子の事なり。狐疑躊躇何等のなす事なき諸君は、男子として耻しからずや、千万言を費すも無益也、吾人はたゞその現状を見て泣

かむのみ、泣いて六百諸兄の心腸に訴へむ、而してその反省を促さむ。妄言多罪（みどり生）

獨語集

我國の天職は世界古來の文明を吸集し之を同化して以て水蒸氣を雨となして彼等に與ふるなり徒に机上に孜孜たる者果して此を同化すべき健全なる胃を有し得や

本能は天與の動力直覺は神明の力本能を抑壓せば社會は死物とならん本能に任せば社會は革命とならん之を抑へ而して之を自由にす始めて文明出でん以て理想の國生れん

濡手で粟をつかむの時代は三十年以前の事なり口に喋々するよりは先づ手に棍棒を携へよさらば汝は優々と進み得只だ實力を養ふのみ

理性とは感情を満足せしめんが爲めの武器のみ只だ聖人と小人英雄と凡人感情の大小、清濁に

依るのみ等しく感情の爲めに動くは同じ

世界の暗黒に生活せる盗人とは之れ取ることをのこなるが爲のみ、若し大なる者を取れば、これ英雄なり豪傑なり豊公は英雄にして五右衛門は盗人なり、一は天下を取り人心をとる一は一家を目的とし物質を取る

一歩進めば一歩人を利すと習ひしことあり残り物に福ありと習ひしことあり斯くては何れに従ふ可きかと思案に日を費すなり故に曰く、理窟は都合よくつけられる者なり要は時と所に依て臨機應變たるべし

力士の角力の呼吸とは力を貯ふことに非ずして之を或箇所に集中して用ゐることなり、本ばかり頭にたまれる諸君之を用ゐる方法を講せよ男子は鍬を手にして畑に出で妻は薪を手にしてかまごに向ふ、之れ人生の根本なり文明とは其上にかざりをなせしのみ

人間人間と勿体振れど我等は食して出し蛆虫製造に急なる如し而して蛆虫は又他の爲めに生ける者の如し云は、社會は下はばくちりやより上は人間に至る迄圓形をなせるにて別にどこも始終なし

人生長くて百年無限の時間から見れば、まるで○なり其間にわづか、能く食して日に一升大の字にねて疊二枚、而して彼等は之が爲めに孜孜として額に汗す去つて永遠の生活に入れ而して此に大自在の大安樂あるを發見すべし、

凡て萬物度を過せば、善も惡となる者なり要は適度を超わざれば、可、而して適度と云ふも人に依つて千種万態、斯くつめ來れば、即ち何んでもしてよし已れの満足する者はするなり而して已れの爲めに働けると思へることは自然人の爲めになり居るなり世の中別に心配は少しも、いらす、ごんごん己れの内心疚しからざること

はやるべし、人に頭を叩かれて黙せるは狂ならざれば怯なり之を忍耐力と云ふは之れ弱者の泣言のみ、力足らずは始めより相手になるな相手になつた上は全力を盡して敵をたすか己れ亡ぶるか二者一を選べ

働きあれば反動あるは万物の通則物必ず陰陽表裏あり天才は又必ず足らぬ所あるなり大人物には又大欠点あり徒に聖人や英雄を崇拜するに及ばず、我が與へられたる位地に満足して全力を盡せば足る報酬は獨り吾を山頂に持ち來らん、厭世家よ世の中は不幸と思へることが反つて後に幸福になる者なり遼東還附を不幸と思ひしが之ありしが爲め日本も露に勝ちて世界の花役者となりしに非ずや今度の談判も不平と思ふ諸子日本今や元祿姿を呼び起して社會將に淫樂を歌はんとす此中に償金の十五億も取ればそれこそ

精粹健兒の動靜や如何に。

○我が北辰會雜誌も茲に四十有二の號を重ねるに到れり。吾等不肖編輯の大任に當るもの無爲蠢耳の徒。よく其の責に盡さず、たゞ徒に委員の名を漬すのみ。今や熱誠なる會員諸君の盡瘁に依り煥爛たる榮光を放て本號の上梓を見るに至れり。見よ、如何に詞林の復活の曙光をあびたるかを、論壇は小笠原秋水君の「悟道を論ず」てふ長篇を以て一段の美花を添え、次いで文苑欄に入ては、新歌に影坊主、潮歌、ゆき、嵐月、紅芙蓉、萍水、美島、の諸子、古株には斗牛、水衣、枯桑の諸兄によつて一異彩は放たれ、辞藻の宏麗、詞采の鮮媚たる以て天下に覇を唱ふるに足る。かくの如くして今や茲に我が北辰文壇は其の黄金時代を現出するの氣運に嚮へり。あゝ多幸なるかなこの一小冊子。あゝ多望なるかな其の前途。北辰會員の諸士よ。尙進んで我

最後故に償金を減じて日本國民を奮起せしめん
とす神の攝理又妙故に徒に嘆息する勿れ万事之れ神の攝理だゝ現在を己れの置かれたる位置に於て樂むべきのみ(中外)

野人語

○秋逝矣。噫秋暮れぬ。寒鴉孤城の暮に喚び、怪禽荒濠の月に啼く。楓葉飄落、山河骨立ッて秋茲に暮れぬ、野末の萩の上風に秋の韻を傳へにし鴻雁今や、其の影なく、園生の萩の下露を我が秋と啼きにけむ鈴虫の音も、今や、後生を托む、あわれ念佛の如く金城の天地、野も山も孤寂れにさびれぬ。空林影疎にして、黃葉凋落、地上婆娑の音寒く、池塘の夕、風肅々、折蘆枯萩戰いて雨を呼ぶこと頻なり、噫呼、寂寥々たる哉。暮秋の風光。この期の時、我が星辰校の景状やいかに。北辰校裡力靜に養へる半千の

が文壇の眞粹美をして發揮せしめ、層一層多幸なる前程を辿らしめよ。苟しくも諸士にして一片の俠骨義心あるあらば、蘊蓄の餘沫を寄するを齎す勿れ。

○あゝ喜ばしい哉我が運動部の振興發展せることよ。我が庭球部は、彌が上に盛觀を發揮し北陸に於て匹敵の對手を見ざる確乎たる地盤を作り爲すに至れり。次いで今春以來長足の進歩革新をなせるものを我が野球部とす。草茫茫として落日寒きわが運動場をして映あらしめ目新しき偉觀を現する到らしめし功や没すべからず。これ偏に野球部委員諸氏の熱切なる誘導に依るとは云へ、又一方よりこれを觀れば、北辰校の健兒が野球を以て男子的非亡國的遊戲として認知するにいたり彌々これが技術の蘊奥を究めんとせらるゝ熱心磅礴たるに歸因するに外ならず。されど吾等が不幸として常に痛嘆措く能はざる

所のものは何か。則ち毎年初冬の候より如月の頃にかけて、金澤の天候、險惡霰飛び雪積り、蒼天を仰ぎ見るの日實に僅か指を屈する程にして、かゝる活潑々地たる野外の運動に阻止せらるゝ一事たる則是れなり。天を怨むるもよしなし。されど野山色づきて花笑ひ蝶舞ひ融々たる春光天地を包み野外の光景自ら健兒を惹いて活戲を縱まならしむるの期いたるあらむ。われは早く其の機至りて球鳴り、バット震ふの活技を看るを鶴首翹足、一日千秋の思して期待することや切なり。振へ斯道の健兒幸に自愛せよ、豪爽の眞丈夫。

●四高は内部に於て幾多公私の會を有す。則ち、曰はく國文會、漢文會、演舌部等これらは皆公の會に屬するものなり。さて國文會にては、今回新たに「徳川時代小説史」は藤井紫影先生によりて講せられ、漢文會に於ては、村上函峯先生

の「作詩講義」あり、されど演舌部にいたりては孤壘を保つの看あつて今日迄にさほどの進歩發展を見ず。これ果して何に歸因するやは今こゝに喋々たるをまたずして明なり。實に多少志あるもの誰か長大嘆息せざるも得べけんや。次に私の會に於ては比較的振興し嶄然として頭角を擡ぐるの觀あり。則ち彩虹會は「人はパンのみにて生くるものに非らず。よろしく崇高の趣味によりて渴えたる情を愈し、盡きざる自然の靈泉を掬ひていたみある胸を静めざるべからず。吾等は、自己の瘦腕によりて自然の清美を探り宇宙造花の幻戲の奥を究め、藝術の鑰を得て以て、不可解の深秘の扉を排せん哉」と絶叫して我が四高の一方に覇をなす。其主張や宜し。其の本領や高し。卿等進んでこれが發揮につとめよ。又四高俳句會は、新に紅芙蓉、白水、嵐月、美島の諸氏を得て今や漸く盛大の極に達し其の活

躍實にめざましく、高く凡俗を超脱して所謂俳美俳趣味の天地に逍遙し、北陽唯一の吟社として天下に名を爲すに至れり。慶賀すべきことなる哉。又々今秋新に和歌研究を名とせらる曙會は創立せられたり。其の主率は、斯道の大家水衣の君にしてこれが翼としてや、や、斗牛の二君あり。歌集既に三を重ねたり。これ其斯道の爲め大に慶賀すべきことにこそ。

逍遙せんとするを以て其の目的とするなり。然るに來る不幸にして吾大茶話の擧あるをきかず。われら翹望して日夜空に其の快を夢想するのみ、卿等幸に微衷を垂れよ。

(紫雲生) (十一月初旬稿)

北辰會役員氏名

●時習寮諸士に告ぐ。校風振興の大任は、直接卿等の双肩に懸れり。我校元氣の淵藪となり、活動の中心となり四高の中堅となるは時習寮に非らずして何ぞや。卿等茂矣茂矣。われ嘗て寮に絶叫して時習寮を以てこの世に於ける「和樂殿」「澤樂園」と謂へり。これ、寮裡清樂自ら湧いて和親濃かなるを云ふの謂也。聞くならく大茶話會未だしと。この會合たるや、われら舊寮生通學生と在寮生と懇親を結び共に和樂の境に

- | | |
|-----|-------|
| 會長 | 吉村寅太郎 |
| 副會長 | 今井省三 |
| 理事 | 本間好茂 |
| 委員 | 吉村政行 |
| 同 | 藤井鏡 |
| 同 | 川島俊 |
| 同 | 山瀬時吉 |
| 同 | 山岸勘太郎 |
| 講話部 | |
| 委員長 | 河合義文 |

雜報
委員
西英盛
村木維夫
赤尾直松

演說討論部

委員
永井靜雄
本間好茂

語學部

委員
茨木清次郎
村上珍休
藤井乙男

委員
三竹欽五郎
ウオルフアト

委員
シューモール
スタイネル

委員
水蘆幾次郎

委員
浦井鎧一郎

雜誌部

委員
西田幾多郎
關操

委員
市村塘
田上謙三

委員
久保田圭右
小谷仁十郎

委員
林竝木
山瀬時吉

委員
河野義一郎
山田喜久良

委員
田中鉄吉
森内政昌

委員
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
田中鉄吉
森内政昌
上原菊之助

委員
藤井乙男
八波則吉
垂水延秀
岡田精一郎

弓術部

委員
中野嘉作
宮地彦八郎
楠正可

劍道部

委員
高橋郁治
村木維夫
國下太作

柔道部

委員
宮川熊三郎
田部隆次
青木恭太郎

排球部

委員
村田金太郎
東福寺正雄
山瀬時吉

蹴球部

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

獨法三年

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

文科三年

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

二部三年甲

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

二部三年乙

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

一部二年甲

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

一部二年乙

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

二部二年甲

委員
大橋八郎
高倉徳太郎
中島一郎
吉田一郎
松本宇吉
下田光造
河合良成
中山隆吉
藤井悌
密田良太郎
森田政一
塚本良禎

二部二年乙

代議員氏名

一部一年甲 加納憲治
 一部二年乙 木場了本
 一部一年丙 葉井林治
 二部一年甲 池原英治
 二部一年乙 上阪巖
 三部一年 不破格

獨三 柳沼廣三
 語學部
 文三 中島一郎
 一ノ二乙 小笠原秀實

和 石阪大巖
 漢 笹井幸一郎
 獨 脇田武失
 香川健爾
 獨 吉田一郎
 小澤民治

北辰會委員氏名

講話部

文三 山本月照

獨法三 泉崎三郎

一ノ二乙 英秀 瑯

二ノ二甲 關谷吾一

三ノ三 松村義郎

演說討論部

英法三 細貝五十吉

文三 山本月照

雜誌部

文三 篠原一慶

英三 岩田幸美

英 吉田良次
 白上佑吉
 太田恭治
 衣斐清香

一ノ二甲 河合良成
 二ノ二甲 青木精一
 三ノ三 渡邊信吉

二ノ二甲 鈴木寬一
 ロンテニス部
 理三 千代嘉一郎
 三ノ三 小澤民二
 一ノ二甲 品川主計

獨三 柳沼廣三
 工三 衣斐清香

フットボール部
 理三 加藤鐵之助

獨三 赤松祐之

漕艇部

一ノ二乙 眞館保

英三 山田正三

二ノ二甲 關谷吾一

工三 鷺尾正吾

二ノ二甲 田島亘

三ノ三 湧井廉平

柔道部

英三 中村正

一ノ二甲 安藤榮吉

一ノ二丙 正力松太郎

二ノ二甲 大内靜雄

二ノ二甲 小泉禎次

三ノ二 茂野哲夫

ベースボール部

一ノ二甲 山崎喜登一

校報

(明治三十八年正月以降職員移動)

△一月六日 依願囑託ヲ辭ク

劍道教師 香川善二郎

十八公氏に答ふ

△三月二十八日 休職

助教授 宮川 爲三

鴨 水 生 寄

△四月五日

兵式體操教授ヲ囑託ス

金澤醫學專科 助教授

福見常太郎

△六月三十日

依願解囑託

劍道教師 學生課員

石川 龍三

△七月二十六日

任第六高等學校 助教授

日下庄太郎

△八月二十九日

兵式體操教授ヲ囑託ス

小谷仁十郎

△八月三十一日

劍道教授ヲ囑託ス

國下 太作

△同 本校醫員長ヲ囑託ス

金澤醫學專科教授

上田 計二

△同 本校醫員ヲ囑託ス

金澤病院醫員

三木 三郎

△同 依願解囑託

校醫

津川 恒

△同 同

同

竹多乙三郎

△九月二日 休職

教授

中俣 匡

△同 任第四高等學校教授叙高等官六等

小田切良太郎

手塚 爲吉

△十月十日 博物授業補助ヲ囑託ヲ辭ク

手塚 爲吉

北辰會誌第三十九號に載せられたる、「吾が觀たる社會主義」と題する、幼稚なる予の一論文に對し、前號に於て、十八公氏が、懇切なる教示を垂れられたるは、予の深く感佩する所也、予は彼の論文を起草したる當時、經濟學に關して、何等の智識を有せず、否寧ろ其の定義をだに明にせず、且つは社會主義に對しても、何等組織的に記載論究したる一書を繕きたるにもあらず、唯予は、予の從來の傍觀的觀察を以て、此の大なる社會問題を論せんとしたるは、所謂盲者象を評するの類にして、其の論旨寧ろ一個の滑稽に近かりしならん、さるを十八公氏は、毫も予の幼稚淺薄を責めずして、深切丁寧なる批評を吝まれざりしは、予の幾重にも感謝せざるべからざる所、予や固より、彼の論文にも多

少言明し置きたるが如く、決して社會主義に對して、全然反對の位置に立たんと欲する者にあらず、又彼の世上よく見る人々の如く、始めより厭惡の眼を以て、社會主義者の言論行動を觀察せんとするものにもあらず、予固より非才、未だ人と共に社會主義を論ずるの素養と研究とを有せずと雖も、社會主義の發生したる原因、並に現今の社會主義者の言論行動に對しては、多くの興味寧ろ同情を以て、觀察否傍觀しつゝあり、予は常に、衷心國家を愛し、人類を思ふ者は、其の社會状態の過去、現在未來を研究するの道途に於て、必ずや、此の社會主義の研究に逢着すべきものなるべきを信じて疑はず、予は必ずしも憂國の士を以て自ら任ずる者に非ずと雖も、國家を愛し、人類を思ふの一念に至りては、必ずしも人後に落ちざるべきを信ず、從つて予は爾後幸ひに經濟學討究の好機を得たる

に乗じ、共に此の現世の大問題にして、又將來の大問題たるべき、社會主義の真相と、其の價値、並に其の運命等に關して、忠實なる研究を致さんことを期す、十八公氏並に此の問題に多少の興味と同情とを有する人にして、爾後予に垂るゝに、適當なる示教を以てせられれば、予は望外の喜として之を受けん。

十八公氏が、其の序辭に於て、「……田子より見るも富士、吉田口より見るも富士、見地を殊にするによりて、所觀を殊にするは理の當然也、只愛鷹山を指して富士となす人ありとせば、眞の富士を指示するは其同行者の務なるべし、吾亦深き研究をなしたるものにあらざれども、此と同じ途上にあるもの、各自の所見を發表する亦良からずや、只氏の觀る所果して富士か、余の觀る所果して愛鷹か、諸彦の公平なる批評眼に任せん」と述べられたるは、寧ろ抑謙の甚し

きもの、而も予に取りては確かに頂門の一針たり、予や富士を批評せんとして、而して富士が一個の火山たるの大事實を忘却せり、其の所論に大缺陷ありしは實に其の所のみ、こゝに蕪辭を綴りて、謹みて十八公氏の好意を謝す（三十年九月）

嗟吁長部文三君

遺友 野田敬之助寄

長部君は亡くなつた、文三君は早や此の世の人では無い、嘘のやうだが事實である、思へば、君が病氣と氣付いて、床に臥したのは、さうだ六月の始め、始めはさしたる事でも無いと、君も吾々も思つて居たが、一週間程経つて、醫師は到頭腸チブスの診断を下した（言ふのを忘れたが、君と僕とは、當時同じ宿に居つたのである）、君は早速僕に、一時も早く入院をしたい

からと言ひ出したので、僕や他の人々も、直ちに手續をして、同月十日、僕は二臺の俵を憫ひ、一臺には、もはや多少の衰弱をして蒼白い顔の長部君を乗せ、他の俵には僕が乗つて、金澤病院へ出かけました、其の途上、僕はいろんな考を起して、試験を目前に扣へて、此の大患にかゝつた君が、どうも氣の毒で氣の毒で堪へられなかつた、やがて君は金澤病院の一個の病床を充す身とはなつた。心配さうな顔をして、冷やかな病院の一室に身を横へた君を、夕暮の薄暗い中に残して、トポ〜と病院の廊下を傳つて自分獨り歸つた時の僕の心持、どうか察して貰ひたい。

君の入院以來、僕も始めの内は、日々見舞に行つたが、何分試験前の事であるから、到頭隔日に行くことにした、所が六日の末からは衰弱も眼に見えて甚しく、僕は心配のあまり、密かに

看護婦に君の容体を聞き糺した所、「何分た牛乳を日に一合より、御飲りになりませんもんですから、實は心配をいたして居ります」とのことであつたから、僕は驚いて、再び長部君の病室に引き返して、「君、モ少し牛乳を飲んで呉れなきや困るよ、せめて日に三合ほど飲めないのか」と聞けば、君は、醫者でも無い僕が、いやな事を言ふと思つたのか、落ち込んだ眼を僕の方へまだるさうに向けて、「だつて、いやでいやで、一合だけ飲むのが、精一杯、……三合はとても駄目だ」との答を聞いて、僕は落膽してしまつた、これでは余程注意をしないと……もう少し飲めないかなあ……長部も余程衰弱したわい……早く熱が降つて呉れないといふと……今のやうでは、若しや萬一のことかイヤ馬鹿な、ソナナ事があつてなるものか！諸君、僕此の考を不吉といふ勿れ、此の時分に、君を病

床に訪ひ、眞實君を愛する心より君の容体を見た人は、必ずや僕の憂と同じ心配を起されたに相違ない、發病以來、こゝに一ヶ月、一ヶ月の間日に牛乳僅かに一合、之れでどうして人間の身軀が持てやうか、殊に君は腸チブスといふ大患、（中頃に檢鏡の結果、眞正チブスで無いとはきまつたが）如何に平常氣樂な僕でも、心配せずには居られない。

其後、君を訪ふたびに、看護婦に様子を聞けば、やはり口に入るものは、一日牛乳たゞ一合、従つて君の衰弱は日一日と甚しい、勿論、君の病氣が容易には治らないと定つた時、僕からも君の御宅へ手紙を出して、何誰かに是非御來澤を願つた所、早速君のた兄さんが來られ、續いては、肉身の親兄弟にさへも、談話することは許されない、此の時分のた母さんや、兄上の御

心配、言ふだけが野暮である。

僕は六月の二十七日、試験の済んだ其の午後二つ、三つ……ポトリ／＼落ちるのが、病氣に思へば之れが、僕の君を此世に於て見ることに、早速君を訪ふた、衰弱は又一層であつた、出来た其の最後であつた、僕の其の翌日、端なくも君と同じやうな熱病にかゝつてこゝろに病辱の身となり、爾來三ヶ月といふもの、苦しみに苦しみ、一時は生命までも、どうであるかといふ瀬戸きはまで進んだのである、僕は今、病床に机を寄せて、此の文を認めて居る、時は夜である、虫の聲は雨のやう、暗黒に夕顔の花ポツと白う、思ひ出しても涙の種。

思へば君の訃音が、僕の病床に達したのは七月七日の夕暮（僕は二十七日に病床に就いて以來、容体面白からず、七月三日病軀をかゝへて故山に歸臥したのである）僕は發熱に惱まされ、ドノヨリとした眼で、庭さきを眺めて居た

が 空は一面に掻き曇つて、今にも泣き出しさう、かてゝ加へて、片隅の木槿の花が、一つ、二つ、三つ……ポトリ／＼落ちるのが、病氣につかれた僕には、言ふに言はれぬ思ひを起させた折も折、電報と來たのが、兄上からの君の訃音……昨二時死サクニシスコンヤカツアスキョク今夜火葬明日歸口……僕は瘠せ細つた手で、戦く／＼之を開いて讀んだのである、此時君は早や、たゞ一片の白骨、思へば無慘なわけである。

人の生れて死する、固より己むを得ないが、花でさへ一度は香を放つて散るでは無いか、まして人の身の上、これから事を成さうといふ蕾の身を、思ひやりもなうムザ／＼と、一片の白骨を土饅頭の下に残し、露冷やかな萩の秋に、多くの人の涙をしぼりて、思へば世は常へに春では無い、人によつては、或は君が未だ世の險難に苦まず、青春天真の義をそのまゝ、極樂へ

往生したのを喜ぶかも知れない、が僕はいかに

も残念である、たとへ君は死生の間に在つて悠々命に安んじ、莞爾として世を辭したとするも、尙ほ僕は飽くまでも、君の夭折を遺憾とする、僕は僕の病氣が危篤に陥つて、若しやの場合に際しても、決して死にたくはなかつた經驗に徴して、尙ほ蓄の身の君が、未だ花さくを待たず秋をも待たで散り去つたのは實に返す／＼残念である。

るまいか！

だが、過ぎたことは仕方が無い、せめては蕾で散つた君のた土産、何か一つ僕相當な花を咲かせて、君の魚津城を飾ることが出来たならば、その時こそはせめてもの僕の慰め、君も靜かに萩の下葉の小陰から、其の時の來るのを待つて居て下さることゝ信ずる。

筆を擱くに當つて、余は謹みて君の夭折を悼む（三十八年九月病床に於て）

人生無常、蜉蝣の朝夕も長しと思へば長く、

人生五十短しといへば短し、二十年にして死すると、七十にして死すると、宇宙の眼より見れば其間分厘の差異あることなし、かういふことを、得て彼の悟り顔の先生は言ふが、僕はどうしても、君の死を見るに、かく冷淡になり得ないのを寧ろ憾みとする、人は僕の思ひ切り悪さを笑ふかは知らぬが、寧ろ之れが人の情ではあ



附
錄

秋季陸上運動會記事
流れ藻（散文）



附 錄

第十三回秋季陸上 大運動會記事

概 況

十一月三日午前七時至誠堂に於て天長佳節拜賀式を終り直に校内運動場に於て第十三回秋季陸上運動會を開催したり

此日空曇れども降らず晴るれど日照らず。

交叉せられたる大國旗のひるがへる校門を入り左折すれば一大綠門あり菊花にて「獨尊」の二字を現はせり。三部館には數條の萬國々旗を吊し科學の標本を陳列し手品るもあり、けふこそと得意の實驗に鼻うごめかすもあり、茶菓を供しての案内の趣き客足隨分繁かり。

運動場の中央には一大輪櫛をめぐらし勇士競技の大舞台に充つ、會場の中央には雲聳の一大旗

竿樹てられこれより無數の萬國々旗を吊し滿艦飾に擬し巨椽の蔭天幕を高くして會長席賞品授與席委員席つきて右左に低く來賓席保證人席衛生部員を設け周圍には各學校生徒觀覽場及び一般觀覽場を區別したり、場の西北三四の老松枝を交ふる蔭に帷帳を引きまわせる小亭あり法文亭と云ふ、古物展覽會を開き内外の珍寶悉くこゝに集まる、券を有するものには茶菓の饗應をなす恰もこれ八陣の勢またこれ臥龍山頂御茶屋の跡出入の遊客頗る雜踏を極む更に見る東天一大部旗の高く翻へるを城壁空に聳え敢て敵の視ふを許さず鬪を排し突怒として躍入れば豈に圖らむや渾沌錯雜外部の構造に眩惑せられたる眼は啞然として口に移る

九時來賓席は既に充滿し尺寸の地をも餘さずされば會場の周圍は蟻の這出づる隙もなく高襟、紋付の御役人様、裾ひつからげた草鞋掛の

爺さん、庇髪の御嬢さん、赤い手柄をかけたニ
ア、鉢巻のアンマ、金縁の紳商我も我もと
押寄せたりける

忽ちにして嚙喰たる音楽隊の奏樂聞ひ續いて鈴
聲高く開會を報じぬ用意の聲と共に諸人片唾を
呑む折しもあれ銃聲一發耳底を劈けばあはや砂
を蹴りぐるりと廻る曲幕進!

勇壯滑稽千態万狀豫定の順序もて次第に競技を
行ひたるが午砲頭上に轟くや三十分の休暇は興
へられぬ

この折にこそと當日第一の催物なる時習寮に入
れば各室孰れも奇想を凝らさざるものなく本日
休業として室内に菓子、菓物を並べ硝子窓の外
より唾涎を催さしむるもあり廊下には一面に悉
く擬滿艦飾を施せり其美其麗殆ど筆紙によく盡
し難しと申すべし

又法文タイムズと云ふ臨時新聞を發刊せり新聞

社の前には當日の出來事を何くれとなく書き並
べたてたれど悲しい哉盲目千人の世の中誰あり
て足を止むるものなかりしぞうたて覺ゆる、こ
れに反しタイムズ社の後の彩虹會は中々賑々し
かり各々得意の天狗連の事とて淡畫あり濃畫あ
り種々雜多あれど昨年よりは稍衰へ氣味なる
は如何なりしぞ紀念畫端書を分與せり但し一組
六錢!

場の西北には又一小亭あり同じく繪畫ボンチ畫
を前に掛けて客を引かんとひしめけりこれをこ
れ獨三クラブとす

競 技 (口生)

競 技

△第一回 二丁競走

受賞者氏名

一 田 島 互 二 久 島 精 一

三 不破 橘 三

△第二回 武裝競走

一 千代嘉一郎 二 大橋 八郎

三 水島 政一

△第三回 戴靈提灯競走

一 渡 邊 龍 二 櫻井 青二

三 戸田 三郎

△第四回 四丁競走

一 中島 謙三 二 鈴木 寛一

三 大内 靜雄

△第五回 學術競走

一 赤松 祐之(英) 二 浮田 國彦(英)

三 上田兼二郎(數)

△第六回 旗取競走

一 高 井 始 二 下村 良三

三 茂野 哲夫

△第七回 二人三脚競走

一 宮田 格 二 唐崎 有三

三 石川 汎兵 三 若井 孝太郎

三 西山 新 三 岡田 國衛

附 録

△第八回 障礙物競走

一 水島 政一 二 衣斐 清香

三 宇野 正雄

△第九回 二丁競走

一 茂野 哲夫 二 高橋 武濟

三 鎌形 勝彌

△第十回 福引競走

一 江守 彌二郎 二 色 部 貢

三 白崎 重治

△第十一回 戴靈提灯競走

一 岡崎 一松 二 長田 勝芳

三 小池 新太郎

△第十二回 重荷競走

一 吉田 一郎 二 鈴木 三郎

三 堀田 外次郎

△第十三回 制步競走

一 砂谷 智導 二 池田 實

△第十四回 幅飛競走

一 白上 佐吉 (一丈八尺八寸)

二 高橋 武濟 (一丈七尺二寸)

△第十五回 武裝競走

一 秦 勝 彌 二 高 井 始

三 金子 善一

△第十六回 學術競走

一 小林鉄太郎(數) 二 孕石奏慎(數)

三 澤田 瓢造(英)

△第十七回 四丁競走

一 上田 兵藏 二 今 川 淵

三 小野津百八

△第十八回 二丁競走

一 宮 田 格 二 尾 佐 竹 堅

三 荒見 多三

△第十九回 一分間競走

一 太田 恭治 二 前坊源一郎

三 山下 昇

△第二十回 片脚競走

一 久田 一雄 二 高橋 武濟

三 西 久 光

△第二十一回 二人三脚競走

一 平野 履謙 二 關 田 健 三

綿谷 吉松

△第二十二回 騎馬競走

大井 安彦(乘手)

高井 始(胴)

小澤 民治(首)

△第二十三回 旗取競走

一 江守彌二郎 二 米澤 末治

三 田 嶋 亘

△第二十四回 武裝競走

一 戸田 國雄 二 谷中峻太郎

三 笹井幸一郎

△第二十五回 竿飛競走

一 諏訪 富多 (八尺五寸)

二 渡邊 二郎 (八尺四寸)

◎第二十六回 障害物競走

一 千代嘉一郎 二 矢田 豊

三 白崎 重治

◎第二十七回 六丁競走

一 河合 良成 (一分五十二秒)

二 鈴木 寛一 (一分五十三秒)

三 國峰 專吉 四 西山 新

△第二十八回 カンヂキスブレース

一 尾佐 竹豊 二 木村 重雄

三 渡邊 彦造

△第二十九回 サツク競走

一 檜田 太市郎 二 岩田 幸美

◎第三十回 貳丁撰手競走

一 茂野 哲夫 (二十九秒)

△第三十一回 福引競走

一 渡邊 二郎 二 久島 精一

三 松浦 武雄

附 錄

◎第三十二回 學術競走

一 森 魁 梧(數) 二 矢田 豊(數)

三 高島 精(數)

◎第三十三回 四丁撰手競走

一 中島 謙二 (一分十秒)

◎第三十四回 來賓競走(戴笠)

一 越村 仁吉 二 清水 奎平

三 生田友二郎

◎第三十五回 二人三脚撰手競走

一 西山 新

岡田 國衛

◎第三十六回 武裝撰手競走

一 高 井 始

◎第三十七回 職員競走(提灯)

一 水蘆 先生 二 三竹 先生

三 八波 先生

◎第三十八回 障害物撰手競走

一 千代嘉一郎

◎第三十九回 公立學校撰手競走(六丁)

一 中村喜太郎 (一分四十七秒)

二 高島浩三 (一分五十秒)

三 倉元常三 (一分五十四秒)

△第四十回 金澤醫學専門學校撰手競走(六丁)

一 吉田(某) 二 高木(某)

三 服部(某)

◎第四十一回 各部撰手競走(六丁)

一 田中八百八(二部)(一分四十秒)

二 横田利喜一(二部)(一分四十二秒)

三 宮田格(三部)(一分四十四秒)

◎第四十二回 一哩競走

一 檜田太市郎(五分三十秒)

二 國峰專吉 三 谷中峻太郎

四 小栗庄二 五 河合良成

以上

特に面白かりし勝負の梗概を述べん。

第四回四丁競走 中嶋最もよく馳く、迅にして敏。鈴木遙かに

及ばず。

第七回二人三脚競走 宮田石川の二組先驅の功名す其のスター

トを出づるや早くも長驅して前馳たり。

第十四回颯飛 其の始めの競技に於て自上二丈八尺余を飛ぶ。

實にめざましかりき。若井つさめたりしもハン

ターの爲めあはれ賞にあづからず高橋に襲はる

第二十三回騎馬競走 今回初めて設けたるものなり。組は二つ。

大井組の高井其の帯に尾を垂らしたるも

滑稽にて眼を白布にてかくされたる首を

あやつりて其のコースをうまくしむるは

騎士の手續(?)。

第二十五回竿飛 場に現はれたる勇士は柳沼 渡邊 諏訪の三

名。皆よく跳ねよく飛ぶ技や妙なり。身や軽

し。いつれも劣らず勝は判定せざることも多時。

ついに七尺六寸に於て柳沼介る。無念とや云

ひつべし。八尺五寸に至り渡邊ついに胃をぬ

いて諏訪の軍門に降る。諏訪の餘悠釋紳々た

る風姿洵に麗。

第二十六回障害物競走 勝者は例年の顔ぶれなりき。千代の技

や實に神に入る悠々迫らず然かも敏捷。觀者をして驚嘆せしむ矢田またこれに劣らずつれに千代の後につけり

第三十四回來賓競走

「いかゞです」と誘ふ水にさらばさばかり洋装のものは上衣をぬぎ袴の人はもいだち高くとりてスタート線上に現はれたる様面白し奇態萬態。また一方より見れば

無邪氣でもた讀め申したいくらひ、皆先を争ひ。勝に馳せ給ふ。越村君獨り衆

に超絶美事なる勝を得。清水君は仙台平の装にて少しもせかず人が後より來や

が來まいが吾關せず焉をきめこんで靜々

と運歩をうつされ給ひし風體寧ろ滑の稽なるものなりしよ。さぶなく三等の生田

君に追ひのこされる刹那身は決勝線の内にありこゝに二等の賞は授けられ嬉々雀

躍胸間に光るメタルは衆の眼を射たりけり。

第四十一回各部撰手競走 今日唯一の呼び物見物なる各部撰手

競走は來りぬ、幾週間の練習に我こそ

桂冠を得んこ心中窺に成竹を期せる各撰手は各部生に送られて出發線上に立

てり則ち一部の撰手としては松岡邦、

白嶺慶敏、原康次郎の三勇士二部の撰

手として現はれしは田中八百八、羽下

昂次郎、横田利喜一の三傑士三部にて

其の撰にあたりしは石川沱兵、宮田格、

吉田秀助の三剛士なり、各其の責任の大なるは知る所なり。觀者の意氣軒昂

應援の力みまことにすさまじかりけり

やかて白煙迸りて轟聲耳を裂けは撰手

等しく走り出づ。各部の應援者聲援者

は聲をかきりに其の帽色をよび宛然狂

ひたるが如く心も空に帽を揮ひ手巾を

振り旗をわけ叫喚大地も聲せんさまな

り。

第一週の順序。青。青。白。赤。白。赤。；

第二週の初。青。青。白。赤。；

第二週の終。青。赤。青。白。；

第三週の初。白。青。青。赤。；

かゝの如くしては、や勝敗の機は迫れり矣。衆勝負いかに堅唾をのんで見物す、各撰手満身の意氣を双鐵脚に込めて走る。風馳電閃。須臾にして勝旗はひらめき賞牌は勝者の胸間に輝きぬ。一身に榮譽をになひし勝者の名は永く本校運動史に記されん。一等は誰。二部の田中二等は誰同じく。二部の横田三等は誰。三部の宮田一部はあはれ四等なりき。

(三周に要せし正時間一分四十分)

本日第一の大競走。天黄昏れに近きぬ。競技者は皆満身の勇を鼓して飛ぶ初めに擲てし者必ず勝れざるなく先づ後れて殿りするもの負くるべきに非らず最後の勝利は誰れの手へ歸したりしが。

曰はく檜田。國峯。谷中。小栗庄。河合の五名の八町二郎。(紫子)

◎餘興

△二部行列。電機工科を現はせる雷様を先頭に

これについでくもの大時計(機械科)パノラマの高厦(建築科)船(造船科)蕪(農科)葡萄酒瓶(應用化學科)吊鐘(採鑛冶金科)五條橋(土木科)彈丸(造兵科)星(天文學)そろばん(數學科)等音楽隊の譜調に合せ列をなしてサークルを廻る皆意匠を凝らし元來器用なる面々のなせしこと故わるからふ筈はなく皆均しく立派に見うけられたり。最も其の中にて予の意を得て感服仕りたるは電機工科の雷様なりき。

△時習寮儀の一寸法師行列。同勢合せて二十有余名、皆一様に俵の中に体軀をかくし、其の下部にあたりて洋服の筒袖と短きすぼんなどを現し、これを以て一寸法師の形を示し、俵の表面には、色々の顔を掲げたり。百面相とでも云はんか。笑へるあり、怒れるあり、閻魔が唐辛なめたやうなものもあり皆とりくくにもしろく、其の指導者となりしは高砂の尉と嫗なり。二人とも衣

装すばらしくまた上手にきなし、腰も梓の弓とまがりし尉はさきに立ちてなにやら音頭をどれは俵の小僧ども皆一聲にコラサと唱ふ。外よりきいて居れば、よくはきこねねどしきりに何をか申すげな。盛にコラサの聲のみ高し、嫗はいつも其の行列の世話やきをつとめ侍るものあればこれを起し、すねるものあればこれをさとしなぐさめ、後るものあればこれを伴ひ宛然慈母の其の子に於けるが如し。やがて喝采の裡に一週し終り場の中央廣場に集り圓陣を作り陸軍軍樂隊の奏する愉快なるマーチの曲にあはせ

き(紫子)

◎各部報

◎法文亭雜觀

松木立を後楯に取つて會場の入口にどっかと陣を布いたのは、其の位置に於て更に間然する所がないが、建物が割合に平凡で、無作法に簀で取り圍んだのはあまりに見榮えがなさ過ぎた。併し外觀の美を棄て、内充の實を取つたのは、一部にも似合はぬこと、只管奥床しい心地がする。

御客さんは朝から潮の如くに押寄せて居る。極めて平民的に造られた故でもあらう。百姓も来る、丁稚も来る、山出しの下女も来るがシルクハット、インバネス連はあまり見當らなかつた。元來法文亭の主義は、来る者は拒まず去る者は止めずてふ極めて洒々落落たるものであるか

ら、あながちハイカラ連を拒絶した譯でもないか、驕傲なる彼等は垢著ける衣服を纏へるパウエル連と、肩を摩するを潔とせざりし故でもあらう。

古毛布で間に合はせの赤門アチヂを潜ると、榮螺の中でも歩く様な心地、人波に揺られては、ひと息ついた所に茶菓券引換所がある。恰度倫敦の裏屋町の珈琲店の様な仕組、矢鱈に茶を啜る田的紳士も居る、あちらを向いて急いで菓子を頬張る女學生も居る。先づ社會の百面を遺憾なく露出して居る。

再び人波にゆれて入つたのは珍絶奇絶古物展覽會である。其の名に背かず、あらゆる珍絶奇絶の物品を蒐集して、あらゆる珍絶奇絶の評話を歴史的に加へてある。辨慶も出れば奈翁も出る、敦盛も出れば板額も出る、今古英雄兩眼中的の概があつて余程興味があつた。中には非常に奇

抜な者、不思議な者、笑はれぬ程可笑しい者も

あつた。或る老姿さんなどは接待係の法螺に吹き巻かれて、危くも窒息しさうだつたげな。先づ學殖深しとでも、史眼炬の如しとでも云ふべきだが、概して一部の法螺吐き溜の觀があつたこの噂。

此の日の法文亭の入場者は無慮五千に達して、接待係は眼が廻る程だつたそうだが、その働き振も中々見上げた者で、特に老幼に對して痒い所に手がとどくほどであつたのはいたく吾輩の感を引いた。法文亭の事業として此に特書すべきは、法文タイムス發刊の事である、今年は大擴張をやつたので、前後二回の發行の外に號外を發すること九回に及んだ。そして極めて敏活に會場に於けるあらゆる出來事を報告して、觀客をして一層の便宜と、満足とを感せしめた。

(みどり生)

◎二部館

會場に立ちて、眼を金城の方に轉せんか、佛蘭西式二層樓の儼然として異彩を放てるを見る、名づけて二部館と云ふ、閣上の部旗は高く翻りて天を衝かんとし、閣外の堅壁高く長くして万里の長城を欺かんとす、綠滴たらんとする杉葉を以て、その綠を飾り、光燦たる北辰の校章を以て、その兩翼に翳す、阿房の宮殿も、而かく宏大ならざるべく、埃及のピラミッドも、而かく豪壯ならざるべし、聞けばこれ一に二部生の築く所なりと、その精巧なるに驚かざるを得ず、更に、僅かに一日にしてこれを作ると聞くに至つて、何人かそのお手際に驚嘆せずとてやあるべき、内部には優に數百の萬國旗を連ねて、満艦飾を施し、周囲には某博士の製圖を始めとし、土木、造船、電氣、物理等の諸器械圖を吊して、工藝の大体を一般に示す、彩虹會は時こそよけ

れど、唯一の場所に見世を擴げて、そが製出の

繪葉書を同志に頒つ、一方には無數の食卓と椅子を並べて、宇治の銘茶に菓子を供する等頗る妙を極め、觀客皆な入るを知りて出るを忘れ、館内爲めに立錐の餘地なし、高帽高襟の官員あり、頬かぶり草鞋の稼人あり、角帶前掛の町人あり、印判天の職人あり、丸鬚の奥様あり、曲腰白髮の老婆あり、蝦茶式部あり、佛人あれば米人あり、米人あれば英人あり、老若男女ひきまきらず二部館破れよと寄せてはかへる、いづれも劣らず天長の佳節を謳ふかどうれし

(△生)

◎三部館

特筆して報道する程のこともこれなく候例によつて新たに修繕の成りし靜勝館を占領いたし居り候、玄關の屋根より高く長く幾條の萬國旗

を張り、緑門造つて菊花の扁額うつたる、新しきペンキの色と共に甚だ氣持よきため、馳せ参する東西遠近の住人その數を知らず候、一度裏門の開らかるゝや浪うつて流れこむ人の潮は頗る非常なものにて、さすが物理的に造りし内部の装置も終には吸収排泄の妙を失して大混雜を極め、委員が少なからざる恐慌を呼び起し候、それも一つは中身が價ありし爲めなるべく候。先づ玄關の造り模様は醫者の卵だけあつて一寸奇麗に出來居り候、中央に小さき噴水を設けあり候、小さきにも似ず水は菊花の中より登つて七尺、天井を飾りし紅白の菊の花環をばキッスして徐ろに降下する様、まこと見事にて候ひし。入つて左側には珍なる植物、動物、標本等を手手に排列して、委員はこれが説明の勞をとられ候、近く醫王山、寶達山にて採取したものもこれあり候、人は寧ろ右側にありし物理化學の諸現象に驚歎し怪訝の眼を光からし候、茲にコツアの中に一人の支那人が入られ居り候、左方の高所よりサイホンによつて水はコップの中に注がれ候、されど憐むべし彼れ大口あけて甘露一掬連日の渴を愈さんとすれども、無情にして水は再びその膠より降つて永久かれは恵に與つかるを得ざるにて候、なんだかホーマーがオデッセイの中に書かれしユリセスが地獄にて見たるタシタルスが事も思ひ出されていやな氣持となり候、小供が珍らしげにテーブルに首を載せて見てをり候、あまり壓す爲め椅子とか机とかを破つたとて騒ぎ居り候、次に電車が走り、砂糖に火がつき、水面より火が立つなど皆な相應の注意を引きたりしが、珍無類の面白きと云ふは一本の試験管によつて行はれし水の組合せにて候、先づ見る卓上十數の硝子壺に無色透明の水液を充たし、術者は一本の試験管にて各壺より

少量の水液をとつて混和するのにて候、こゝまではよけれども驚天動地奇想天外なるはその壺のレットルにて候、物々しやな曰く、醫學専門校の水、曰く、高等女學校の水、曰く商業、工業、師範、第一、第二中學、北陸、金澤女學校の水と、かくて技術者は平然として聲高く、今こゝに入れるのは高等女學校の水です、これに醫專の水を入れると何そなりませうか、赤くなりました、これに四高の水を入れると、それはなくなりました。此度は女子師範の水と師範の水です、ハ、ア黒くなりましたな。……かくの如くして彼れは各學校の水を混和しては種々の變色を市すのにて候、その組合せ方や實に珍と云ふべく、妙と云ふべく。術者の顔を見て思はず咳笑いたし候、たしか當日第一の奇觀にて候、次に呼び物なるは昨夏以來大に世の科學者を悦ばせ世人を驚かし、科學界の大破壊者、新

福音の宣傳者を以て目せられし一世の大伏魔殿たるうデウムにて候、大きな圖まで書いてあり候、當日は充分に説明の勞をとらむとて熱心に諸書を涉獵して畫まで書いたは好かつたが、隣むべし一人として彼れが所に來るなく、説明を求むるはなかりし由委員はコボン居られ候、名物も此くの如く惡遇されては氣の毒と思ひ候、又館の左の廣場で風船を五つ程あげ候、一つ可成に揚りしのみにて失敗に終り候、小さかりし爲めに候、

右様の有様にて候、終りに委員諸君が熱心には大に感謝いたし候。(野夫)

◎寮の天長節

先きには兵を北強に加へて、國威遠く西歐を振はし、今又更に天長の佳節に遇ふ。歡聲野に満ち山に滿つ。我時習寮も即ち此の佳辰に對して

先きには兵を北強に加へて、國威遠く西歐を振はし、今又更に天長の佳節に遇ふ。歡聲野に満ち山に滿つ。我時習寮も即ち此の佳辰に對して

聊か祝意を表せんために、各室を裝飾す。見よ！今日の時習寮を。凡て之花の時習寮也。萬國旗の時習寮也。飄々たる和氣四邊をこめて、笑聲嬉々として堂に溢る。眞に之平和の郷、天下の樂園也。今各室裝飾の重なる物を上げん。南寮。拾號室の天の橋立最も見るべく、雅趣掬すべし。且板の間に紅葉を散らし、其間に和歌を置きしは頗る佳。聞く、之は色部君の苦心になりしとか、蓋し南寮の白眉也、六號室の琴とバイオリンよりなる養老灘も亦輕妙。九號室の凱旋門武揚も仲々手際よし。其他八號室の北辰銀行本日休業と他の主人出征中につき來客謝絶は人の注意を引きしも頗る不精と云ふべし。中寮。三號の畫葉書は先づ人の目を喜ばしむ。四號室のビヤホール水月軒は白布の卓上燦爛たる花瓶を中心に、茶菓を並べて頗るうまさう也、然も明日開店は意地悪し。五號室「祝講和」面白し、八號室の直下の世界は頗る佳也、机、腰掛の凡てを倒置して直下の世界の状を表す所、仲々奇拔也。第九號室の「ポーツマウス談判室」表す所、極めて面白し。十一號室の別世界も亦艷麗也。十三號室は蚊帳の二見ヶ浦、亦佳也。北寮。一號室の天下の大角力は頗る滑稽。五號室の陳列館に種々古物珍品を集む、中にも鹿砦は人の目を引きたり。七號室は「夢の世」にて一人の學生、横臥して夢みる所也。一條の大神經首元より出で、其末四方に分れ、種々の夢となる。即ち理想はシルクハットにして、食欲は牛肉とねぎ、試験前は書物と卵と、牛乳とは滑稽也。蓋し之北寮中の白眉也。八號室の南山苦戦は餘り露骨に失するを惜む。十一號室の憂國病、人をして嘔飯せしむ。十三號室の笹の葉を

満室に植えて、『いでそよ人を忘れやはする』の歌を題せしは中々ゆかし。十五號室の布團見が浦(二見が浦)は布團と蚊帳にて手際よく作り、光線の度を調和して日の出を見せし所頗る佳也。(〇生)

流れ藻

巡禮

斗牛

黒く細ッては居るが、華奢な五ッの指をかゝなへて、更に小指を起した時、巡禮は眼を閉ぢた。

六とせの秋を今こゝに、西國の旅の空、菅の小笠にうら若き、女身一ッ忍ばせて、繪馬堂を右斜、草の上、胸に秘めたる緒環の、想ひの糸を繰ればにぞく、疲れは消えて、恍りと、迎る夢路の昔の春、花にや舞ひし、月にや翳しく、振り袖の面影。

一と度は拂ひもしたれ妄執の雲、さりながら、解くに易き誓ひの縛、さもあらばあれ、惱めばとて、あゝ、其まぼろし。やつれた頬、あせた唇、脚絆は弛んで、草鞋の紐は切れたまゝ。

折からの尾の上の風、衣紋に沁み入る寒さの、わびしげに身をゆすった途端、曾に憂々、三十三の札のひびき。

とばかりして、凹んだ眼を、だるさうに注いだ、遠く——落暉に染みし紀伊の海。

淡路島は、笠の端にかくれて、下は芦邊の和歌の浦、二に玉津島、

金波に浮いて紺青の、松のながめ夕眺め——巡禮は立ち上りさま、ふり仰いだ、五層の塔にかゝる細あや雲、北に靡くを、明けなば踏まらん泉州の土。

いざと、鈴のね高う、うなだれて、頼む大慈

の觀世音。

(故郷をはるくこゝに紀三井寺……)

國の訛りをそのまゝ、哀れなく聲、杖に絶

つて、石階の頂、笈肩に、白衣のうしろ姿！

消ゆるまで、見送つたが、何として巡禮の知

り得やう、去りもあへざる黒衣の影。

「行けるだらう」

炯々たる眼を塔より移して馬子の面上を電の如く射たのである。

「とんでもねね旦那様、羽根ッぺえなうてごうちやら行かれますべえ。そえに塔ちや魔性の住み家だどたら爺いづも云つてたゞ、まあとんでもねね」

笛 の 音

「羽根が無くては行けない？ 魔だ？ うむ」

萬株の楓葉秋霞を疊む、唯見る錦綺燦爛の景、百尺の斷巖絶壁の盡くるところ、朱塗の五重の

塔の縹緲として霄漢に聳えてるのが蒼鬱たる喬

松に取りまかれて上半を見せたまゝ、これや山

姫の手梁か、絶壁の麓は燃ゆる様な檀紅葉。

馬子は茫然として見惚るゝのであつた。

鞍上の客人しばし菅笠を傾けて耳を澄ますやう

であつたが虎髯を一なで、手綱を結んで前輪に投

げざまひらりと飛び下りた。

眉のあたり險しく動いたが馬が頭を上げたので馬子には見えなかつた。

夢ならずやと客人。

塔上はるか天地四隣の寂寞を破つて尺八のひ

びき。

この秘曲をも彼に非ずんば誰か奏せむ。

あゝ三とせ前跡を晦ました笛の妙手親しかり

し友のそのすさびと胸をかきむしらるゝ様に覺

わたが

「た前は地の者だからよく知ってるだらう、いつも聞ゆるのかい」

「何がががす」

合点の參らぬ馬子がたれもち、圖ぬけて大い

耳朶を手で後より被ふやうにして

「旦那様何がががす」

「笛」

「松風でさあ」

「笛」

「とんでもねね」

「笛」

「松風でさあ」

然り松風と聞かう、妙なる君が調は三年のむ

かし落花の一夜に絶わて終つたのなもの。

袖をかき合せて身のまわりをつくづくと眺め

さて眼を閉ぢた。

憐むべし名聞の子某畫家が落魄して故郷へ歸

る姿このまゝ、謹で笛の君の萬歳を祈る！

乳 母 車

高尾龍田の係を、庭の紅葉に通はせて、友禪

の模様そのまゝ染め上げた時雨の、今日は、から

りとはれて、干す傘の上から立つかけろうさへ、

ひらくと、蝶にでもなりさうな小春日和。

婦人は乳母車の手を止めて、うららかな光を

やどした瞳に、今しも流を二三反横り出た渡し

舟の行衛を逐ふのである。

初冬の隅田川、映ろう花はなけれど、かざし

にとめた菊の一輪、櫻の梢を辿る日差しに、薄ッ

すり刷かれた頬の紅る。

もとより、是と心を惹いたものがあつての

はなければ、渡しの影が、白帆の背になつたか

らとて、惜しまれやうもなく、否、婦人の眼は、

いつか艇庫の上に乗つてゐた。

然う、婦人は慥に、或思ひを馳せてゐるらしい、夫は嘗て心に劉られた印象を、新に花咲かす可く、つとめてゐるので、思ひ、印象、さりとて、余りに臆に、余りに漠としてゐるので、今は其何ものなるかを付るに苦しむのであるが。

憊う、身を斜に開いて、一端は唇に、淺ッさり含んだハンカチーフを、輕ろく扱きながら——と、只、わけもなく、笑みが面に跳る、狂ふ、袂で蔽ふて、

蒸氣の笛、余波が土手に、ざわ／＼と紫朶摺れ。

倒れやうとした身をやど支へながら、乳母車を越れてくの字になつた。

内には、白薔薇の蕾のやうな寝顔を囲んで、た伽づかれのオシヤ、ブリ、太鼓に、鳩ポッポ、ふわりと、上に三尺、これは、眞赤な風船玉。

昵と、瞞めて、『可愛い！』と口の内、されど

あゝ、こんな乳母車に乗つて、『可愛い！』と云はれた、禿切りのねんね、其人は、たゞ、其人は………？花月に結んだ漆の黒髪！

乳母車は再び軋り出た、言問ひは向ふの角。坊やの夢はまださめなかつたのである。

姉 君

一しきりさら／＼と葉摺の音は高う冴ねぬ。

われから友にはぐれてひとり森にさまよひ入りしが、小高き丘の上に立つさゞやかなる祠の階に腰下して傾く日の小葎の上繪馬の白きに射かへりたるを何心なう見上げつ。

遠くあまた／＼び我が名を呼ぶ聲の淋しう響きたるに答へむとせしが、あまりに靜なるあたりをさませせば魔のしるべともならむと心とも

なくもだしぬ。

みたりの友より我が名はかはる／＼呼ばれてやがてうら悲しく聲をうち合はせたらむががすかに聞ね、それよりあたりは更に靜になりぬ。

秋なり梢を拂ふ風の音高し。

云ひ知らぬ怕の胸に湧ききたるにつと身を起さむとせしが、琴の音に似て非なり、あやしきものゝ調。樂器ならむとは幼心にも推するを得たりき。

面白きものと思ひぬ。夕日はいつしか落ちて森黒う、白き月は色づき來りぬ。さはれ妙なる樂の益々面白うなるに赤き鳥居をぐどり出でて左に折れぬ。右は家路なり。薄の穂のゆらくとしたる、露蟲の歌すしう、しばし調はどだわたる様に覺えしが薄を通りぬけたる時、更に近う聞えしかばこゝろみに歩みをとめたるにかなたより迫り來る如き心地せられぬ。

開きたる草叢は再せまうなりつ。ひくう腰の

あたりまでのびたる熊笹と人の丈ばかりなる竹の一むらゆくてを遮ぎれり。眼を閉づる如くしてわけ入りつ。

三十歩ばかりにして通り越したる時、祠より向へはなゆきそと宣給ひし母上の誠を思ひ出しぬ。

池のほとりに出でたり。人の云ふなる櫻が池とはこれならむ。

調こそ今は手に取る如く聞ねたりしか。

何となう恐ろしうなりて引かへさむとせしとき、樂の音はたと止みて今一しきり葉摺の音の高う冴えたるに耳を被ひたるまゝ、月の光のくだけて散れるを瞬もせて眺めたりしが、池のはたを傳ひ美しき衣着たる人の双の手に小琴の如きを携へたるが目の前に現はれぬ。

つと近よりて

「敏ちゃん」重ねて敏ちゃんと宣給ふ。
 我は頭を振り、そは我が名に非ざればなり。
 「あゝ、坊ちゃんは敏ちゃんぢやないのね」わ
 れはうなづきぬ。

月の光は白き額の上を美しう照せり。

「坊ちゃん姉さんゐないの」頭を振りぬ。

「さう、では坊ちゃんの御名は？敏ちゃんと云
 はなくつて……なせかう似てるんでしやう」
 袂をかきあはせて更にちさき樂器を抱きなほ
 し給ひし時さらりと鈴の如き音立てぬ。

「もう姉さんをた忘れになったの、え敏ちゃん」
 すゞしき御眉の曇りたるに我も何となう悲し
 うなりつもの云はむとせしを「ほ、ほ、まわ姉さ
 んゐらっしやらないと云ひなざるのにね。坊ち
 ゃん姉さん欲しかあないの」うなづきぬ。

「わたしなりませうか」とあでにほくそみ給ひ
 たるが眼の光は鋭かりき。

いかに答へむと躊躇ふを「そのかはり敏ちや
 んと云はして下さいな、ねいゝでしやう、さう
 すれやこれから毎晩これ弾いて遊びませうよ、
 ね御嫌」

袂をさどかへし身を斜、月に半ば背き給ひし
 と見るまに樂の音ははや大空に冴えわたるぬ。

夢の如くも御袖の下にかくるゝ様になりて蹲
 りたるが、一きは泣くが如悲しき一節

梢たかう 花かさなれど

うき身には うれひぞつもる

秋とならば 虫の音きよて

よもすがら いかにすごさむ

「ほ、ほ、泣いてるのね」

こよひはこれにて分れむ、家にはさぞ母上の
 待ち給はむにと宣給ふに心づけば、月高う空に
 かゝれるなりき。
 熊笹へ差しかゝりたる時見返りたるに、たぼ

ろげに池のほとりに立ち給ふ御姿の更に懐しう
 なりてかけもどらむとせしを、御袂の舉りたる
 につと竹林に入りつ。

「姉——さん——」

「あゝ」

こたまは高うかへりぬ。

雨二十日、晴れし夜は九夜、日毎に寒うなり
 きささりたるが、十二月の三日と云ふに雪いたう
 降りき。名にし負ふ北國の空の雪消ゆるらねば
 心ならずも春の日を待ちわびぬ。

ひと日空晴れて梅のほころび初めたる夕小半里

の路をさせ來りさだめの刻を待ちしが見ね給は
 ず、次の日も見え給はざりき、
 日は温うなりまさる。

かくて櫻の散るころ悲しき思にうづもれて池
 のほとりに來りしとき、岸に立てる松の枝に絃
 のくちたる樂器のかゝりたるを見出しぬ。姉君
 はいづ地にか去り給ひしなり。

あはれ姉君とはよし九夜の縁なれ、一目只一
 目遇ひまゐらすを得ば、今にてもわが命の十年
 はこれとかふべきものを。

明治三十七年度北辰會費決定計算書

表中△印ハ朱書

| 科 | 目 | 豫算額 | 決算額 | 流用増額 | 流用減額 | 殘額 |
|-----|--------|---------|---------|------|------|--------|
| 第一款 | 經常收入 | 一、二五二〇〇 | 一、一五九三〇 | 〇 | 〇 | △三七八三〇 |
| 第一項 | 特別會員寄付 | 二五〇〇〇 | 二五〇〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 |

| | | | | | | | | |
|--------------------|---------|----------|---|---|---|---|---|-------|
| 第二項 通常會員會費 | 八四七五〇 | 八五六〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 八五〇〇 |
| 第三項 預金利子 | 五〇〇〇 | 三六四三〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 三三四三〇 |
| 第四項 春季運動會 乘艇申込料 | 一六〇〇 | 一〇五〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 二二〇〇 |
| 會 債 償 却 | 二七〇二〇 | 二七二七〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 二五五〇 |
| 通常會員臨時會費 | 二五四二五〇 | 二五六八〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 二五五〇 |
| 前年度殘餘繰入 | 一五九六〇 | 一五九六〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 收 入 合 計 | 一、三八五三〇 | 一、四二五六九〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 四〇三八〇 |
| 第一款 經常支出 | 九九四九〇 | 九八八七六 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | △ | 六五八一四 |
| 第一項 講話部費 | 二〇〇〇 | 〇三〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一七〇〇 |
| 第二項 演說討論部費 | 三〇〇〇 | 一六二〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一三八〇 |
| 第三項 語學部費 | 一五〇〇 | 一一〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇三〇〇 |
| 第四項 雜誌部費 | 二七八九五 | 二六二七四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一八六二 |
| 第五項 弓術部費 | 二七〇〇〇 | 二七〇〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |

| | | | | | | | | |
|--------------|--------|--------|---|---|---|---|---|-------|
| 第六項 劍道部費 | 四五八二五 | 四六二〇五 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| 第七項 柔道部費 | 四九八〇〇 | 四九二八五 | 〇 | △ | 〇 | 〇 | 〇 | 〇三三五 |
| 第八項 ベースボール部費 | 五〇〇〇〇 | 四九七五 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇二八五 |
| 第九項 ロンテニス部費 | 七二〇五〇 | 七三〇一四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇〇三六 |
| 第十項 フットボール部費 | 六〇〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六〇〇〇 |
| 第十一項 遠足部費 | 二五五〇〇 | 二二六四五 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 二八五五 |
| 第十二項 漕艇部費 | 一三七三〇 | 一二六四四 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一〇六三六 |
| 第十三項 春季運動會費 | 一〇〇〇〇〇 | 九五三五八 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 四六四二 |
| 第十四項 秋季運動會費 | 一八〇〇〇〇 | 一六〇八七七 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 一九二三三 |
| 第十五項 會務費 | 五〇〇〇 | 四九七九 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇〇一一 |
| 第二款 豫備費 | 六〇四〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六〇四〇 |
| 第三款 端艇新造基金 | 六〇〇〇〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 六〇〇〇〇 |
| 會 債 償 却 | 二七〇二〇 | 二七〇二〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |

